東方氷娘記　番外

亜莉守

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

えっと、ここはコラボとクロスオーバー用です。気まぐれ更新当たり前、いつもながらのご都合設定　それでは注意事項　※この作品にはキャラ崩壊が予想されます。※それ以前にキャラの基準がいろいろ間違っている。　※一部性転換要素があります。※オリキャラ要素もあり？　※後々転生者要素出るかも　以上の点を踏まえてお読みください。

目次

氷娘邂逅録（コラボ）
氷娘幻想郷入り？　前編 ―― 1
氷娘幻想郷入り？　後編 ―― 6
氷娘陽炎夢　前 ―― 13
氷娘陽炎夢　中 ―― 22
氷娘陽炎夢　後 ―― 40
氷娘贋作譚 ―― 60
氷娘夕食話 ―― 71
氷娘刹那録 ―― 78
氷娘喫茶録 ―― 87
氷娘邂逅録（クロスオーバー）
人物紹介 ―― 95

某守護者編　1 ―― 99
某守護者編　2 ―― 105
某守護者編　3 ―― 115
サーヴァントステータス ―― 129
某凡庸型主人公編　1 ―― 135
某凡庸型主人公編　2 ―― 149
某凡庸型主人公編　3 ―― 165
某凡庸型主人公編　4 ―― 177
某凡庸型主人公編　5 ―― 193
某凡庸型主人公編　6 ―― 211
某凡庸型主人公編　7 ―― 236
氷娘邂逅録（番外編）
氷娘表裏夢 ―― 248

氷娘邂逅録（コラボ）
氷娘幻想郷入り？　前編

さて、現実世界から幻想郷に入るなんてことは普通にありだと思うんだよね？　それはある意味当たり前だし、そうじゃなかったら『忘れられたもの』が浮かばれない。ついでに言うならそれは理なんだし……とりあえず何が言いたかったのかって？

「幻想郷から幻想郷入りって普通にあるの？」

声を出したところで返ってくるものは無い、当然だよね。一人っきりなんだし

僕こと明乃はまさかの他の幻想郷入りという異常体験をする羽目になったのだった。

――　少女移動中。

「せめて紫がいれば……というよりもそもそも紫が気付けばこんな状況にはなるはずない気が……」

とりあえず見知らぬ森を歩く、このまま迷子の可能性の方が高い気がしてきた。せめ

て魔法の森なら……いや、無理だ。あそこは絶対に迷子になる。
「湖に行けばチルノに会えるかな」
　平行世界みたいだし普通に居そうだよなぁ。そんなことを考えていたら森から出ることが来た。よっしゃ！　と思ったのもつかの間、僕が見たものは……
「恋符『マスタースパーク』!!」
「氷盾『アイシクルイージス』！」
　湖のほとりでマスパをぶっぱしている魔理沙とそれをスペルカードらしき盾で防いでいるチルノだった。正直に言おう、やっぱりここ異世界だ。
　ウチの魔理沙はそりゃたまにはやらかすけれども、火力重視とはいえそこまでボムをぶっぱするタイプじゃないし、チルノにいたっては本気で知らないスペカだよ。うん、ここは絶対に異世界だ。チルノの外見違うし
「！　そこっ!!」
　不意に霊夢の声がした気がした。見れば迫りくる弾幕、まずい
「っ」
　弾幕はどうにか避けることに成功した。でも……
「あれ？　あんた誰」
「ん？　本当だな、見かけない奴だぜ」

思いっきり目立ってる。どうしろと

あわてて誤魔化そうとして……

「え、えっと　僕は通りすがりの氷精の娘で……あ」

墓穴を掘った。そういえば、幻想郷に氷精って滅多に居ないんだよね。僕の言葉にちょっと唖然とする三人……うん、ごめんなさい。

「へ？」

「ええ?!　チルノって子持ちだったのか」

「へぇ、それは知らなかったわ」

「そんなわけないでしょ?!」

絶叫するここのチルノ、そして僕の胸ぐらをつかんで揺すり始めた。うわわわ、ゆ、ゆれ

「どういうことよ。説明しなさいっ!!」

「ちょ、チルノ待て　なんかその子ぐったりしてるぞ」

――　少女気絶中。

ふと、たばこの臭いで目が覚めた。ぼうっと周りを見渡す。あー、えっと？

「お、目　覚めたのね」
「チルノ？」
　何か妙に大きくなったような？　……ん？
　そういえば妙に見覚えのない家具とかてかチルノってタバコ吸わないよね？
「すみませんチルノさん、ここどこでせうか」
「私の家よ、まさかあそこまでサクッと気絶するなんて思わなかったから」
　つまり、
　あきのはにげだそうとした▼
　にげられない▼
「……不幸だ」
「どういう意味よ!!」
　もう一回ぐわんぐわんと揺すられる。もう勘弁して欲しいんだけど。
「お姉さん！　遊びに来たよ!!」
　ドアが破壊される音がした。出入り口は完ぺきにご臨終している……ドンマイ、ドア。あ　誰かがそこに立っていた。みれば金髪に赤い服……あ、あの子だ。
「あれ、フラン　いらっしゃい」
「えへへ、遊びに来たよ!!」

随分と楽しそうな顔をしている。そっか、あの子もあんな風に笑えるんだ。日の当たるところに来れるんだ。そう思った……ちょっとしんみりしている間に二人の会話は進んでいて、

「ねぇ、この子誰？」

「あ」

うん、あれかな。会話が楽しくて存在すら忘れられる法則、そのまま忘れてくれてた方がありがたかったなぁ。逃げれたし

後半に続く。

氷娘幻想郷入り？　後編

――　少女説明中。

「なるほどね。明乃は平行世界の住人なのね」
「うん、まさかチルノのキャラがここまで違うとは……」
　見れば見るほど絶対に別人だってわかる。髪型違うし、服装も違うし、何より身長が違う。ウチのチルノは僕よりは大きい、でも彼女はそれよりも大きい。１７０近くあるんじゃないのかな。そんなことをつらつら考えているとフランに服の袖を引かれた。
「アキノ、アキノの知ってるお姉さんってどんな人なの？」
　チルノ？　うーん
「ん？　えーっと……色んなところに知り合いが居て、面倒見が良くて、それに自称幻想郷最強の妖精かな」
「最後だけは頭がちょっと痛いわ」
「「大丈夫？」」

頭痛いって。頭痛薬とか飲む？　そう聞いたら首を横に振られた。
「ううん、黒歴史だし」
「いや、でも最強の名には地味に恥じてないって言うのかな。チルノ、結構強いんだよ？　魔理沙負けてたし、僕のスペルカードの師匠はチルノと博夢さんだから」
未だにチルノに勝てないんだよね。いや、僕が弱いだけだろうけど。
「そうなの、それにしても私がスペルカードの師匠か……」
「？」
チルノが急に立ち上がった。
「よし、明乃　今からあんたに私のスペルカード教えるよ」
「え？」
「何それ面白そう!!」
「いくぞ!!」
「え、ちょ……うにゃあああ」
僕は外へと引きずり出された。

――　少女強制特訓中。

「ま、そんなところか」
「どうも」
　とりあえず形になったところでチルノがＯＫサインを出した。……疲れた
「アキノ凄いね」
「ありがとう、それにしてもいいの？　スペルカード教えたりして」
　スペルカードって個人の物なんだから教えていいのかな？　まあ、人のスペルカードぱくった僕が言うべきことじゃないんだろうけど。するとチルノは僕の頭に手を置いて笑っていった。
「いいってことよ。平行世界とはいえ私の娘でしょ？」
「見事に吹っ切ったね。チルノ」
「いやぁ、一緒に居ると何だかんだでかわいいからかな」
「それはどうも？」
　僕がそのままチルノに撫でられているとフランが声をかけてきた。
「アキノ、弾幕ごっこしよう！」
「んー、い「ちょっとまったっぁぁぁぁ」
　普通にＯＫを出そうとしてチルノに割り込まれた。
「お姉さん？」

「チルノ、どうかしたの？」
「明乃、悪いことは言わないからやめておきなさい」
　チルノの目は真剣だ。まあ、そうだよね
「？　あー、確かに僕、実戦形式は経験薄いからなぁ」
「ちぇー」
　結局あの冥界の異変以来、普通に特訓しかしてない気がするし。百の練習より一の実践とか言うもんなぁ。そこまで考えて、ふとチルノを探した理由を思い出した。
「あ、ところでだけど幻想郷の管理人知らない？　帰り道、教えてもらわないと」
「ん？　幻想郷の管理人……紫のことか？」
「はぁい、呼んだかしら」
「おわっ」
　スキマから紫が上半身を出している。うん、いきなり来ないでほしかったなぁ。ちょっとだけ僕もびっくりした。
「呼ばれたから来てみたんだけど……ってあら？　見ない顔ね」
「どうも、幻想郷の管理人　平行世界の幻想郷から来た氷精の娘、明乃です。ウチの紫知りません？」
　真面目に返す。うん、僕はこういう時にふざけるような精神してないからね。

「ああ、あの世界の子ね。平行世界にまで手を伸ばして探しているから何事かとは思ったけど……見事に『世界』から拒絶されてるのね」
　こっちの紫にもわかるらしい。そこまでこれは強力なんだ。
「まあ、色々と事情があるんで」
「とりあえず事態は理解したわ。あちらの私に連絡を入れるわね」
「ありがとうございます」
「ちょっとくらいはのんびりしていきなさいな。幻想郷は全てを受け入れるのだからね」
　紫はスキマの中へと戻っていった。フランが不思議そうな顔をして僕に尋ねた。
「アキノ、世界から拒絶って？」
「僕は世界からいらないってされたってこと。まあ、フランは知らなくてもいいことだよ」
「ふぅん？」
　まあ、説明しても分かるかどうか。
「あんたも苦労してるのね」
「正直、僕は幻想郷に来れて良かったって思ってる。大切な人もいっぱいできたし」
「そう」

うん、本気でそう思ってるよ。

もう一回スキマが開いた。そこから見覚えのある方の紫が飛び出してきた。

「明乃っ！」

「あ、紫　やほー」

「心配したわよ」

いきなり抱きしめられた。いつも思うけどさ。

「あー、もう小さい子供扱うみたいにしないよ！　僕一応これでも十五だよ」

「なん……だと」

「いや、そっちも驚かないでよ?!　こんな精神年齢した幼女とか需要ないよね?!」

「こどもが需要だの幼女だの言っちゃいけません!!」

「ツッコミどころがまず違うんだぜ」

そこにさらにツッコミが入った。見れば見慣れた箒に乗った黒と白のエプロンドレスに金色の髪、

「あれ、魔理沙?」

「迎えに来たんだぜ。どう考えたって紫（スキマ）一人だと無駄に長引くからな」

うん、そこは共通認識だったんだ。まあ、結構グダグダになることは確かだけど。と言うよりも何でウチの紫はちょっと残念なのだろう。

「そういうわけで、こいつ回収するぜ」
「うわっ」
ひょいっと魔理沙に抱き上げられて箒に乗せられた。あ、別れの挨拶全然してなかった。
「えっと　チルノ、ちょっとの間だったけどありがとう！　それからフランも、後そっちの魔理沙や霊夢にもよろしくね」
そのまま魔理沙ごとスキマへと入っていくことになった。
「……行っちゃったね」
「うん、なんて言うか嵐みたいな子だった」

――――　氷娘幻想郷入り？　終了。

氷娘陽炎夢　前

博麗神社の奥の方、日が当たらなくて当たっているところよりは涼しい部屋に水を淹れたグラス（紫に頼んで現代から持って来てもらった。見た目が涼しいし）と水が入った氷のうを風呂敷でくるんだものを乗せたお盆を持って、僕は向かっていた。部屋に入ればこの神社の巫女である博麗霊夢が間に合わせで敷いた敷き布団の上で仰向けになっている。

「全くさ、熱中症って」

「ごめんなさい」

神社に遊びに来てみたらぐったりしている霊夢を見つけたんだよね。驚いて色々と確認してみたら典型的な熱中症になっていたんだ。本当に慌てたよ。

「謝って済むなら医者はいりません。はい、塩水、一気に飲まないように、それからこの氷を脇に挟んで」

すっかり板についた水を凍らせる技（パチュリーさんの見立てではちょっとした魔法だそう）で氷のうを作って、霊夢に渡す。

「うん、ありがとうね。明乃」
「はいはい、あーあポカリとかあったら楽なのになぁ」
　あれって暑いときの栄養補給とかにちょうどよかったんだよね。こっちに来てから気が付いたけど。
「ぽかり？　何それ」
「適度に砂糖と塩の入った飲み物、下手に自分で濃度調節しないで済むから楽なんだよ。まあ、自分で作るし大丈夫だけどさ」
　コツがわかるまで大変だったなぁ。今度、紫に頼んで粉タイプのやつ持って来てもらおう。
「こまめに水を取ること。なんだったら麦茶でもいいんだからね。味が大丈夫なら塩を入れるとなお良し」
「はぁい」
　調子が良くなった霊夢にあれこれ指示を出してから家路につく。
「今年は無駄に暑いなぁ」
　チルノは氷室に引きこもった。魔理沙は避暑地を求めて出かけて不在だ。紅魔館も窓全開だ。ついでにパチュリーさんの考案した風の魔法で涼しい風を循環させているらしい。僕も日傘を手放せなくなった。それから向日葵畑の水やり手伝うことになっ

たし……これは関係ないか
「それにしても暑いなぁ」
ちょっと目眩がするけど気のせいだよね。

――　少女移動中。

一方、その頃　別時空の幻想郷、博麗神社の参道にて
「……疲れた」
「おつかれ」
一人の少年が地面に突っ伏していた。そのままピクリともしない。
少年の名前は吉井明久、幻想郷の住民ではなく現代の住民である。彼には『現と幻を操る程度の能力』と言う特殊な能力があり、その力は強力だ。彼はその力を使いこなすため、狙ってくる妖怪から身を守るため、自分の大切なものを守るため、特訓を重ねていた。
傍にはこの神社の主である博麗霊夢が居た、先ほどまでは『妖怪の賢者』八雲紫も一緒に居たのだが何やら気になることがあるらしく先に姿を消していた。少しだけ余力が戻ったらしく、明久が起き上がる。

「今日は妙に暑いね」
「そうね、幻想郷にしては暑いかしら」
　霊夢が眩しそうに目元に手を当て、空を見ながら言った。明久も同じように空を見て、何かを見つけた。
「ねえ、あれなんだろう？」
　ふらふらと日傘を差した何かが飛んでいる。
「あ、落ちる」
　明久は飛んで行き、落ちていきそうになるその何かを受け止めた。何故か日傘だけは手離していない。
　かなり、幼い少女のようだ。レミリアやフランと同じくらいか一つ下くらいだろうか？　薄い茶色の髪、目は閉じられている。服装は青のチェックのノースリーブのパーカー、フードの部分だけが水色、インナーは白の半袖の縦襟だ。ズボンはホットパンツ、水色と白のストライプのニーズソックスを穿いていて、靴はブーツ。かなり現代っぽい服装だと明久は思った。
　無事に着地して、改めて少女を見てみた。少し眠っているにしてはおかしいような……？
「よっと、ねえ大丈夫？」

「なんかこの子ぐったりしてるわよ」
「……」
霊夢と明久が顔を見合わせた。明久が宙を舞う、そしてちょっと振り返って霊夢に言った。
「え、永遠亭に連れて行ってくる！」

――　少年移動中。

ふと、夢を見た。
夏の暑い日差しの中、陽炎がゆらゆらと揺れている。ここは何処なのだろう？　周りを見渡してみれば、もう一年ほど久しい現代の横断歩道だった。
「遊ぼうよ？」
誰かの声がした。振り返ってみるけど、誰も居ない。
「あそぼう」
また声がした。声のした方も向けば、誰かが居た。
「君は誰？」
僕が尋ねてもその『誰か』は笑っただけだった。

――　少女昏睡中。

迷いの竹林の奥にある診療所『永遠亭』　少女を抱えた明久は迷わずにそこの門を叩いた。慌てて迎えに来てくれた鈴仙に事情を話して永琳を呼んでもらう。急患の話を聞いた彼女はすぐに来てくれた。

「まあ、典型的な日射病……って言いたいところだけとちょっと違うみたいね」

「え？」

あんな日差しの中でふらふらとしてたのだから、普通は日射病や熱中症のはずなのだが。

「どちらかというと精神的なものかしら？　たぶん少ししたら目を覚ますと思うし待ってて頂戴」

「うん、わかった」

――　少女回復中。

「えっと、あれ？」

淡い夢を見ていたようだ。ぼうっとしていると横から声がかかった。
「あ、目　覚めた？」
茶色の髪に茶色の目、服装はパーカーやズボンといった現代の物だ。とりあえず、知り合いじゃないことだけは確かだよね。
「……どちら様？」
「僕は吉井明久、明久でいいよ。君は？」
「……あー、僕は明乃　ところでここどこ？」
吉井って……なるほど、彼が本来の『僕』って言ったところか。まあ、その辺は置いておくとして。
「ここは幻想郷、それでここは永遠亭だよ」
「……そーなのかー。また幻想郷入りかい（ぼそっ」
今回で二回目だよね。てか、前回とは全然違う幻想郷に入ったみたいだ。思わず小声でツッコミを入れてしまう。ぼそっと言ったのが聞こえたのか彼は首を傾げた。
「ん、何か言った？」
「ううん、何でもないよ。なんで、僕はここにいるのかな？」
どう考えたって幻想郷入りする理由が見当たらないんだけど。前回は完ぺきに偶然だったし。あ、前回のことを踏まえたら理由を探す方が藪蛇なのか。

「うーん、ごめんねよくわからないや。わかってるのはふらふら飛んでたことだけかな」
「そうなんだ……本当にどうしよう」
　さて、ここの紫を探すにはどうしたものかな？　考え込んでいると、彼が声をかけてきた。
「えっと、君って現代の子だよね？」
「え？　あー、まあそうかな？」
　もう幻想郷に住み始めて一年以上たってるけどね。思えば中三の冬に幻想郷に来て、早一年半、早かったなぁ。思い出に浸ってると、彼が声をかけてきた。
「紫に頼んで元の場所に戻してもらう？　って言うか幻想郷が何かってわかってるかな？」
　ああ、なるほど。年下だと思われてるんだね僕は、一応これでも僕は１６だよ。未だに間違える人は多々だけど。ついにはレミリアにまで勘違いされるほどだったけど!!
「うーん、どうしよう？」
　首を傾げたら彼は悩み始めた。うん、なんかごめんね。紫に会いに行きたいなぁ。そう考えたけど、それより先に何かが脳裏をかすめた。そうだ
「あのさ、幻想郷　案内してよ。」
　彼は目を丸くした。でも、その後に笑って了承してくれた。

これは陽炎に彩られた真夏の幻想郷で誰かが僕らを『呼んだ』話。

氷娘陽炎夢　中

彼に案内されて、まず最初に向かった先は
「博麗神社かぁ」
霊夢大丈夫かな？　それなりにちゃんと指示出したつもりだったけど、下手やって体調拗らせてないといいなぁ。
「どうしたの？」
「ううん、熱中症大丈夫かなって」
「??」
僕の発言は確かに事情を知らないと訳が分からないよね。なんて考えていたら、黒髪に脇の出た巫女服の女の子がやってきた。霊夢だ。
「どうしたのよ……あ」
「えっと？」
霊夢がじっと僕の方を見てきた。なんだろう？
「この子は博麗霊夢、この博麗神社の巫女だよ。それからさっき君を助けたときに一緒

に居たんだ」
「そうなんだ。助けてくれてありがとう」
助けられた状況はよくわからないけどお礼言わないとね。
「私は何もしてないわよ。やったのは明久」
「そっか、でも心配してくれてありがとう」
「どういたしまして」
どうやらウチの霊夢よりは素直みたいだ。ウチの霊夢だと、皮肉が地味に効いた一言が来そうで怖い。ふと、彼の方を見てみれば何故か鳥居の方をじっと見ていた。
「……」
「どうかしたの……って、あれ?」
黒髪に赤と白のリボン、特徴的な脇の出た巫女服
「私?」
その子はにっこり笑うと弾幕で襲ってきた。
「弾幕張ってきた?!」
慌てて迎撃しようとする僕の目の前に彼が庇うように立って、クナイ型の弾幕を繰り出した。
「霊夢、それから明乃は下がって。僕が相手するから」

――　少年弾幕中。

ちょっと離れたところで彼と霊夢のドッペルゲンガー？の弾幕勝負を見ながら、霊夢と話す。

「それにしてもあなた、幻想郷の外から来たのよね？」

あ、流石幻想郷を守る巫女、見抜かれてたか。

「一応、そういうことになるかな？」

この幻想郷から見れば別の幻想郷も外だよね。

「世界から『拒絶』されてるようだけど、それはどうして？」

「……あー、僕は世界に入り込んだ異物にとって邪魔な存在だった。それかな？」

前に別の世界に行ったときにその世界の紫から言われたことと同じだった。上手く説明しようにもできない僕はとりあえず間に合わせの言葉で誤魔化す。

「ふぅん、まあしばらくは幻想郷を楽しみなさい……ってこれは私が言うセリフじゃないか」

「アハハ……ありがとう」

世界が変わっても、雰囲気が変わっても、幻想郷の住人は幻想郷の住人だった。

――　少女歓談中。

明乃と霊夢が話している頃、明久は霊夢のドッペルゲンガー？　と弾幕勝負をしていた。ドッペルゲンガー？　が放ってくる弾幕を明久は悠々とかわす。

「結構強いかな？」

また、散弾的にばらまかれた弾幕を自分の弾幕で相殺しつつ様子をうかがう。

「それにしても霊夢の姿をしてるからちょっとやりずらいなぁ」

かわし続けているとふいにドッペルゲンガー？　がカードを取り出して掲げた。

「！」

霊符『夢想封印』

「なんで霊夢のスペルカードまで?!」

――　少年驚愕中。

観戦していると、霊夢のドッペルゲンガー？　がカードを掲げた。
「あれ？　あれって」
「ウソ、私のスペルカード?!」
驚いているといきなり頭が痛くなる。
「っ」
「大丈夫？」
「う、うん　頭がちょっと痛いだけだから」
頭にあの子の声がした。また『遊ぼうよ』って呼ばれた。
「……『遊ぼうよ』か」
「？」
霊夢が首を傾げる。でも、今回は関係ない。これは多分僕の問題だ。
「ううん、なんでもないよ。そろそろ決着が着くみたいだ」

――　少年弾幕中。

夢想封印をかわしながら、明久はドッペルゲンガー？　から目線を離さずに言った。
「なんで霊夢の技が使えるかは後で聞くとして！」

明久がスペルカード宣言をした。

黒炎『加具土命無限炎昌』

ドッペルゲンガー？　の周囲に炎が次々と灯る。慌てた様子で周囲を見渡すドッペルゲンガー？　だったが、かわす暇などなく。灯った炎は矢へと姿を変えて、ドッペルゲンガー？　へ向かっていった。

「止めだっ!!」

撃墜音がする。いざ話を聞こうとした明久は呆然とした。

「え？」

ドッペルゲンガー？　の姿は消え失せていた。

――　少女傍観中。

彼がこちらへと降りてきた。炎系の弾幕使うんだ……万が一弾幕勝負する羽目になったら大変だなぁ。

「大丈夫だった？」

「こっちは何ともないわよ。それにしても消えた？」
「うん、一体何だったんだろう？」
　二人が話している。今回の異変は僕を指名しているらしい、二人を巻き添えにしないためにも離れないと。二人の方を向いて僕は言った。
「……えっと、二人とも僕のこと助けてくれてありがとう。それとすぐに帰れない用事が出来たからちょっと行ってくるね。異界で異変とかなんで巻き添えくらってんだろう、僕」
　そのまま僕は『呼ばれて』いる方へ向かった。
「え、ちょ」
「待って!!」

――　少年追跡中。

　誰かに『呼ばれて』いる。それだけを頼りに飛んできたわけだけど、
「次はここか……紅魔館って」
　見事に知っているところじゃないか、てか美鈴さんどこ行ったんだろ？
「そういえば咲夜は元気かな？」

赤い屋敷を見ていると、友達であるメイド長のことを思い出した。少し前からさん付けを止めるように言われたんだよね。そういえば、紅魔館は妖精メイドがバタバタ倒れて大騒ぎだっけ……今度冷たいもの差し入れよう。門の前でボーっとしていると声がした。

「やっと追いついた!!」

「へ？」

彼だ。僕を追いかけてきたらしい。何で？

「急に行っちゃうからびっくりしたよ」

「追いかけてくるなんて思わなかったよ。普通に放っておいてくれてよかったのに」

「いや、幻想郷って意外に危ないんだからね」

彼はかなりのお人好しらしかった。いや、僕もあんな意味深なこと言ったせいだよね。僕だったら追いかけてるか。

話しているとそこに銀色の髪に蒼の目、青の半袖に短いスカートのメイドさんがやってきた。こっちの咲夜だね。僕の知っている咲夜は何時でもロングスカートだった気が？

「あら、明久と……誰かしら？」

「あ、えっと。この子は明乃、なんか空から落ちてきたんだ」

「どうも、明乃だよ。よろしくね」
　僕は咲夜に挨拶をする。咲夜は笑って言った。
「そう、暑いからお茶でも……って」
　咲夜の目線の先には金色の髪に赤色の目、宝石を思わせるような羽、それに赤を基調とした服、フランだ。彼女のドッペルゲンガー……いや、陽炎がそこに居た。
「フラン?!」
「今度はフランかい」
　思わずツッコミ入れた僕は悪くないよね。てか、フランって日光ダメじゃ？

――　少女弾幕中。

「それにしても、何でこうなった」
「？　どうしたのよ」
「ううん、なんでもないよ。はぁーあ」
　またもや弾幕勝負自体は彼に回された。庭の日陰に僕らは居る。彼が負けるなんて絶対に思えないからいいけど、それにしてもさ。
『明久、がんばれ!!』

『フラン、乗り出したら危ないわよ！』
『そうですよ。フランお嬢様』
ベランダにこっちのフランとレミリアが居た。パラソルを持っているのは美鈴さんだ。
「あそこ、本当に大丈夫かな？」
「大丈夫よ」
だといいけど、日光浴びて火傷とかにならないよね？
そんなこんなで傍観してる合間に決着がつきそうだ。

剛脚『飛連脚』

どうやら霊力で強化した足を振りおろて、その速度で起きた風の弾幕で攻撃をしたらしい。
博夢さんのせいって言うかおかげって言うかで霊力については何となく感じることができるようになったから理解できるんだけどね。
「あ、勝った」
「そうね、って消えた？！」

陽炎が消えた。その瞬間、また『遊ぼう』って声がした。
「っ」
「大丈夫？」
「うん、まあ一応？」
やっぱりあの子は僕がご指名らしいね。

――　少年帰還中。

「お帰り明久!!」
「わっとと」
彼がフランに抱き着かれている。こっちの僕もこんな感じかぁとか思った。
「お疲れ様、それにしてもあれは一体」
「はい、何か異変のようなものでしょうか？」
レミリアと咲夜が真面目に考えている。そこにまた頭痛がした。
「あ、今度はあっちか」
「え？」
僕はそのまま空を飛ぶ、説明するなんてことは無理だ。どんどん頭、痛くなるだろう

し。
「またか!?　ごめんね。あの子、追いかけてくる!!」
　そんな声がしたけど気のせいだよね。
「なんなのよ。一体」

――　少年追跡中。

「今度は魔法の森っと、見事に僕の知っているところばかりだ……」
　今度は誰かな？　アリス？　それとも魔理沙？　考えていた僕の上から声が降ってきた。
「待ったぁぁ!!」
「！　まだ追いかけてくるんだ。一人で大丈夫だって言ったはずだけど？」
　今回は僕関係だし無関係の人巻き込みたくないんだけど。
「君が良くても僕が良くないんだ。それに異界の異変って言葉も気になったし、それになんで飛べるのかも聞きたいし」
「あー、そっか　説明……いるの？」
　というか、全然説明していなかった気がする。それにかれはよくここまで追いかけた

なぁと思った。
「うん、それからなんで急に飛んでいくのかも」
「しょうがないっか、とは言え」
僕は日傘を正面へと向ける。そこには見慣れた黒と白、それに金、魔理沙だ。また陽炎だけど。僕は笑っていった。
「この弾幕勝負が終わってからだけどね」

――　少女弾幕中。

「はぁ、何でこんなことやってんだろうね」
思い返せば色々と疲れることやってる気がしてきた。

魔符『スターダストレヴァリエ』

魔理沙のお得意の星魔法、こんなの序の口って奴でしょ。どんどんとかわしていく、そういえば何でこんなことになったんだっけ？
「博麗神社に行ったら、霊夢が熱中症になってて」

魔符『ミルキーウェイ』

天の川をモチーフにした弾幕をかわす。そういえば七夕まだだっけ。なのに日差しがきついんだよね。

「帰ろうとしたら、目眩に襲われて」

恋符『ノンディレクショナルレーザー』

これもまた十八番、ここの世界の魔理沙もこれとかが十八番なのかな？

「気が付いたら、異界の幻想郷で」

恋符『マスタースパーク』

氷恋符『フリーズド・スパーク』

いい加減に焦れてきたし、僕もスペルカードを使うことにした。マスタースパークを相殺する。

「もうっ」

氷星『アイシクル・スターダスト』

青白い流れ星が流れる。ラストっ!!

「いい加減にしろっ!!」

この勝負は僕の勝ちで終わった。

――　少女帰還中。

「ただいま」

すっかり暑さが緩んだ地上に戻ってきた。思いっきり氷系のスペルカード使ったからなぁ。

「おかえりなさい、結構威力凄いね」

うーん、威力重視じゃないんだけどなぁ。

「そう？　むしろ綺麗って言ってもらえたほうが嬉しいかな。僕らの世界では『弾幕は美しいほうが勝ち』だし」

「そうなんだ。確かに綺麗だね」
　ま、お世辞だったとしても嬉しいね。
「さて、陽炎が失せたことだし説明するよ」
　ま、自分の幻想郷入りの経緯とかは抜きだけど。あれは自分でも説明できないし。

――　少女説明中。

「とりあえず、ごめんね」
「いや、謝る要素がどこにあったのかな?!」
　普通に普通のことを説明しただけなのに?!
「いや、年齢が……まさか同い年だったとは」
「ロリで悪かったなぁぁ!!　もう、いいもん！　会う人会う人に間違えられりゃ慣れるもん!!」
「本当にごめん」
　申し訳なさそうにされるのが一番つらいわぁぁぁぁっ!!
「はぁ、はぁ、はぁ　もう、この話題は蒸し返さないことにしよう。うん、そうした」
「なんか本当にごめ「もう何も言うにゃ、あ」

もう何か嫌になった。ここが森じゃなくって絨毯の上とかだったらローリングしたくなるくらいに。
「あー、大丈夫？」
「うん、もうどうにでもなれ」
「それならいいんだけど、えっと能力について聞いてもいいかな？」
「ん、なんか変なところあった？」
自分としてはそこまで凄くない能力のつもりなんだけど。
「いや、具体的にどういうことかなって思って」
「あー、じゃあ例えばの話　何処か地下深い所で閉じ込められている女の子が居ます。その子の声は地上に聞こえるわけがないし、助けも呼べるわけがない。ここまではいい？」
「う、うん」
例えにしてはちょっと強烈だったかな？　ふと思いついたのがフランの話だっただけで他意は全くないよ。
「そんな女の子が心のどこかで助けてと誰かを『呼んだ』とする。その声は僕に届くんだ」
「え？」

彼は驚く。そうだよね、誰にも聞こえない声が聞こえるとか普通ないし。
「つまり、僕の能力は『名もなき誰かの叫びを聞いて助けに行く』ってことなんだよね」
「分かったようなわからないような……でも、それって凄い能力だよ」
「物理面では何も仕事しないけどね」
もっと物理で仕事する能力だったほうがいいんじゃないかなって思ったことはいっぱいあった。でも、ほかのみんなが居るからいいかなとも思うけど。
「それで、今も誰かに呼ばれてると」
「うん、だから行かないと」
「僕も一緒に行くよ」
「……うん、よろしく」
僕一人で行動しようっていう方がバカだったね。一人じゃ絶対にどうにもならないしね。

氷娘陽炎夢　後

僕と彼は幻想郷の空を飛んでいく。
「それで次は何処？」
「さー、僕自身にもよくわかってないからなぁ」
僕、引っ張られていってるって言った方が正しいからなぁ。
空を飛んでいると、黒い髪に黒い目、黒と白と赤のどこか鴉天狗を思わせるような恰好の女の人が結構な猛スピードで飛んでいた。僕らを見かけると空中で静止する。
「あやや、そこを行くのは明久君……と？」
「えっと、誰？」
本当に知らない人だ。
「あれ、知らないんだ。彼女は射命丸文、「文々。」の記者兼配達者だよ」
「ああ、あのゴシップ記事の」
そのイメージしかないなぁ。こんなきれいな人が書いてたんだあれ。
「ゴシップとは失礼な！」

「ごめんなさい、それで？　文さんは何でこんな所を飛んでいるんですか」
　こんな所をふらふらと飛んでるとか魔理沙じゃないし。
「何か話のネタは無いかなぁと」
　ですかー。これは僕らがやってることバレたら確実について回られるな。思いっきり話題を変えよう。
「そうですか、そういえば今日は無駄に暑いですね」
「そうですね。でもそれが一体？」
「うーん、涼しくなれる方法とか調べて記事にしたら読んでもらえるんじゃないですか？」
「おお、なるほど。それではさっそく！」
　文さんはものすごい勢いで飛んで行った。多分斜め上の記事ができるだろうけど、まあいいか。
「……よし」
「上手いこと撒いたね」
　彼が話しかけてきた。うん、どうにかしないと色々と危ない気がしたんだ。
「うん、基本的に僕の方に取材には来ないけど、それでもゴシップ記事書かれている身としてはあんまり関わりたくないかな？」

根も葉もない噂流されたことあるんだよねー。
「わかるようなわからないような」
「あ、あそこ」
『呼ばれてる』気がした。
「人里？」
「そこのちょっと外れたとこ、ほら陽炎が出てる」
ゆらゆらと空気が揺れてた。
「あ、本当だ」

――　少女移動中。

「……うん、ここだね」
それにしても暑いなぁここ。
「それにしても一体何がしたいんだろうね」
「『遊ぼうよ』って毎回声がするし遊びたいだけかな？」
考え事してると陽炎の中に誰かが居る気がした。
「！　慧音さん」

「あれは陽炎？」
　今度は慧音さんなのか、警戒する僕らに慧音さん？　が話しかけてきた。
「おーい、明久　君は何を……おや、そちらは？」
「はぁ、本物の方か　えと、彼女は明乃。異世界の幻想郷の住人だって」
　陽炎じゃなかったか、よかった。あれ？　それで通じるんだ。
「だとしたら陽炎は……あ、えっと　紹介にあずかった明乃です。ちょっと事情があってこっちの幻想郷に来ています」
「そうか、私は上白沢慧音だ。人里で寺子屋の講師をしている」
　やっぱり慧音さんは慧音さんだね。そう思ってるとさらに奥の陽炎の中に誰かの人影を見つけた。
「あれ、妹紅さん？」
　白髪に白と赤のリボンそれからもんぺ、うん妹紅さんだ。
「おや、妹紅を知っているのか？」
「ええ、僕、向こうだと寺子屋のお手伝いとか後人里へ買い物に来たりとかたまにしてるので、その関係で」
　妹紅さんがいきなり弾幕を張ってきた。こっちが陽炎か！
「待て、妹紅！　この子たちは敵じゃない!!」

慧音さんが妹紅さんに近づこうとする。それを彼が押しとどめた。
「どいて！　慧音、そいつ妹紅じゃない！」
「慧音さん、こっちに」
僕は慧音さんを連れて少し後ろに退避した。ちょっと暑いなぁ。

――　少年弾幕中。

妹紅が炎でできた弾幕を張ってくる。明久は悠々と避けていく。
「それにしても知り合いばっかりだなぁ」

不滅『フェニックスの尾』

「まあでも行ける範疇だ！」
明久がスペルカードを宣言した。

黒炎『加具土命無限炎昌』

相手の周りに三十六個の黒炎を配置され矢に変えて攻撃していく。しかし、妹紅の陽炎はそれをかわしていった。
「かわされた！それなら」
明久がさらにスペルカードを宣言しようとする。

二重炎『加具土命――――

いきなり冷たい土砂降りの雨が降り出した。見れば、陽炎の姿は消え失せている。
「え、何で?!」

――　少年驚愕中。

慧音さんと少し離れたところに逃げ出した僕はちょっと限界値突破しかけてた。
「……い」
「明乃、どうした?」
慧音さんが聞いてくるけど、そんなの関係がない。
「……つい」

「顔が赤いぞ？　大丈夫か？」
もう、我慢の限界だ！　思いっきり叫ぶ。
「暑いっ!!」
「へ？」
慧音さんが間の抜けた声を出す。
「あー、もう何でこんなに暑いのさ！　夏場に炎の弾幕なんて使うなぁぁぁぁ」
叫びながら僕は何も気にせずにスペルカードを宣言した。

凍雨『篠突く雨』

「冷たっ」
「もう我慢ならない。いい加減にしろおおおおおお」
暑いのは割と平気な方だけど、もう我慢の限界だった。

――　少女絶叫中。

ちょっとして、慧音さんがやってる寺子屋にて

「反省しましたごめんなさい」
　僕は正座して土下座に近いくらいまで頭を下げていた。
「いや、大丈夫だから」
　目の前に居るのはずぶぬれになった彼だった。そう、僕はスペルカードを怒りに任せてぶっ放したのだ。
「本当にごめん、僕どうかしてた」
「気にしてないから、大丈夫だよ」
「ごめんなさい」
　謝る以外出来ないんだけど。そこに慧音さんが湯呑に何か入れて持ってきた。
「こんな時期に温かい飲み物を用意することになるとはな。二人の分もあるぞ」
「あ、慧音　ありがとう」
「慧音さん、ごめんなさい」
　本当にご迷惑おかけしました。
「まあ、気にしないでくれ。これといった被害は無いわけだし、それにしても自然現象に関与するスペルカードは珍しいんじゃないか?」
「あー、でも僕これで三枚目ですよ」
『梅雨寒(つゆざむ)』に『狐の嫁入り』それからこの『篠突く雨』、どんどん雨関連のスペルカード

が増えてる気がする。
髪とか拭く手ぬぐいを貰って髪とか服とか拭きながら、慧音さんの話を聞く。
「そうなのか、とりあえず君たちが何をしていたのかを教えてくれ」
「あ、実はね」

――　少年説明中。

「なるほどな、それで君たちは陽炎を追っているということか」
「はい、そういうことですね」
慧音さんが心配そうに言う。
「しかし、目的はわかっているのか？　ただ闇雲に追うだけでは消耗するだけだ」
「まあ『遊ぼう』って言っているんで飽きるまで付き合いますよ。少なくとも僕はそのつもりです」
今のところそれくらいしかわかってないし。いつもそんな感じだけどね。
「僕は明乃が心配で一緒に行動しているだけだから」
「そうか、二人とも気を付けるように」
「「はい／うん」」

さて、髪乾いたことだし、多分移動している間に乾くだろう。え？　透ける？　幼児体型見てどこが楽しいんだか。

――　少女移動中。

次の場所へと向かった。
「えっと、ここって……」
「紅魔館のある湖だよね」
水面ギリギリに浮いて会話をする。
ここに縁がある人なんて一人しか思いつけない気が、いやもう一人いるけどちょっと?!
「……ヤバイ、勝てる気がしない」
「へ？」
彼が首を傾げる。弾幕の気配がして、彼の首根っこを掴んで思いっきり後ろへと飛ぶ、僕らが居たところは凍りついた。
「！」
「え、ちょ　うわっ」

さらに威力の高い弾幕が張られていく。そこに居たのは、水色の髪、白のギザギザ模様の入った青のリボン、水色で淵に白のギザギザ模様の入ったの縦襟コート、茶色のズボンに茶色の靴、それに青のマフラー……やばい

「やっぱかぁぁぁ、勝てる訳があるかぁぁぁ！」

どう見たって僕の知っているチルノだ。

「えっと、あれって」

「僕の保護者、自称幻想郷最強の妖精、チルノ」

「へ？　チルノ？」

チルノって意外と世界によって外見が違うみたいだからわからなくてもいいよ。

「まあ、この世界のチルノがどんな人なのか知らないけど、あれは僕の知っている方のチルノなんだよ」

「そうなんだ。でも、勝てるわけがないって？」

彼が不思議そうな顔をした。でもさ、勝てるわけないじゃん。

「……あのさ、親に勝てる子どもがいると？　師匠に勝てる弟子が居ると？」

「……むりかも」

「一旦ここは引いて……ってええ?!」

さらに別の弾幕が撃ち込まれた。クナイ型だ。そこに居たのはスキマに優雅に座っ

て日傘を差す。
「紫?!」
「えっと、あの紫、スキマ妖怪の?」
　微妙に恰好とか違う気がする。
「その紫だよ。何で?!」
　知らないよ！　てか、こっちの世界なのになんでチルノなのさっ?!
「よくわからないけどチルノに勝てとか無理」
「僕はどうにかなりそうな、なりそうもないような」
　あああ、もうどうしろっていうのさぁぁぁ。
「僕が相手して勝てるわけ……あ」
　今、重要なことに気が付いた。
「どうしたの?」
「ねえ、炎系の弾幕使うよね」
「うん、さっきそれが理由で雨に降られたわけだし」
　それはごめんね。あれは反省してます。でも、今はそんなことを言っている場合じゃない。彼の手を取って僕は言った。
「チルノの相手、頼んだよ」

「へ？　ああっ!!」
　彼も気が付いたらしい。
「そういうこと、苦手なら交換しちゃえばいいのさ！」
「でも、紫相手に大丈夫？」
　紫相手に弾幕勝負自体はやったことないけど。どうにかなるはず。
「時間稼ぎ程度であれば頑張る。避けるのだけは得意だから！」
「自信満々に言うことでもないよそれ?!」
　うん、あの鬼の様な弾幕練習はだてじゃないのさ！　僕は笑って彼に告げた。
「とりあえず、よろしく　明久！」
「あ、うん。わかったよ　明乃！」
　彼……いや、明久とハイタッチをして僕らはそれぞれの相手に向かいあった。

――　少年弾幕中。

凍符『パーフェクトフリーズ』

ばらまかれた弾幕が一瞬停止してまた動き出す。随分とかわしやすいようでかわし

にくそうな弾幕を明久はかわしていく。
「それなりに強いけど普通な気がするなぁ」
スペルカードを取り出して宣言した。

天符『天照』

天照が着火される前にチルノの陽炎が動き、かわした。
「あ、かわされた」
明久の弾幕をかわしたチルノの陽炎がスペルカードを取り出し宣言した。

白魔『ブリザード・モンスター』

まるで猛吹雪のような細かい弾幕が次々と襲ってくる。最初はかわしていた明久だったがかわし切れなくなりそうになる。
「っ」
スペルカードを取り出した。

『夢幻の狭間』

どうにか現実と幻の間に身を置き、吹雪の猛攻を避けた。
「強い、威力がどうとか言うよりも弾幕の張り方とか、そういうところが凄い」
それでも明久は諦めようとはしない。いや、諦める気がないと言うべきかもしれない。
「でも、負けるわけには――――」

――　少女弾幕中。

「やっぱり紫は強いなぁ」
紫の陽炎の弾幕をかわしながら、思ったことを口に出す。幽香さんやチルノや博夢さんが手加減してくれていたってことがわかる。
「だけど負けられない意地みたいなのあるし。負ける気は無いけど」
そう、だってもう一人、僕と一緒に戦ってくれている明久が居る。チルノのこと丸投げしたしこっちはこっちで頑張らないとね。
そう思った矢先に脳裏に何かイメージが浮かんだ。

「え？」
学校、笑いあった親友、一人ぼっちの作戦、それを僕はどこかで見ていた気がした。
「陽炎の見せる夢……あ、そういうことか」
陽炎の姿が一瞬ぶれる。そして、スペルカードが宣言された。

『陽炎夢』

「……やっと『呼んでる』のが誰かわかったよ」
彼女がここに来るなんてね。しかも探し人は僕じゃないし。
「ならなおさら負けるわけには――――」

――　少年少女弾幕中。

スペルカードを取り出そうとした瞬間、目の前にスキマが展開された。
「え？」
「へ？」
びっくりしてちょっと固まってしまう。そこに同じ声だけど雰囲気の違う二つの声

が降ってきた。
「そこまでよ。明久」
「はぁ、いきなりいなくなったからあわてて探したら何やってるのよ。明乃」
上を見てみれば、微妙に恰好の違う女の人がスキマに同じように座っていた。
「「紫?!」」
名前を呼べば、僕の知っている方の紫が破顔して嬉しそうに飛び降りてきた。
「探したわよ。明乃」
「だから小さな子ども扱いしないでよっ！」
そのまま抱きしめられる、何でこうなるの？　ちょっとしたら放してくれたので明久の方を見てみた。
「えっと、紫。どうなってるの?」
「つまりね。あの子がこの世界に呼ばれたのに気が付いてあっちの私が探しに来たのよ」
「そこじゃないんだ。陽炎は?」
そうだった。ちょっと忘れてた。
「おーい」
みんなの視線が僕へ向く。

「「？」」

まあ、そんなのは今は関係ない。僕は『応え』なくちゃ

「出てきて、探してる人いるんでしょ？」

黒髪にセーラー服、それから赤いマフラー、うんやっぱりあの人だ

「お姉さんが誰かを探してここに来たのは知ってる。でも、幻想郷にはその人は居ないよ。っていうかお姉さん忘れちゃったの？　あの人との一番思い出深いところ」

お姉さんが思い出したような顔をする。あの時見えた風景はお姉さんの思い出みたいなものなのだろう、あの風景を見たとき僕は「幸せ」みたいなものを感じていた。

「うん、そこで待ってなよ。そうすればいつか会えるから」

『ありがとう』

お姉さんは笑った。

「どういたしまして、僕には『応える』事しかできないから。いつか会えるといいね……文乃ちゃん」

彼女の名前を呼んでみた。もう、ここに陽炎は無いけれど。

――　陽炎消失後。

「それにしても、つきあわせてごめんね」
　明乃が心底申し訳なさそうな顔をする。それに明久は笑って答えた。
「別にいいよ。僕が行きたくて一緒に行ったんだから」
「そっか……ありがとう。君が一緒に行ってくれなかったら多分色々と大変だったと思う」
「どういたしまして、かな」
「それから、君って強いんだね」
　明乃が明久の目を見ながら笑っていった。明久が少し困惑しながら答える。
「そうかな」
「……でもね、同時に脆いなって思うことがある」
「……」
　明久は黙り込んだ。だけど、と明乃が続ける。
「多分、強くなれるよ。前だけ見てがむしゃらに進むのもいいけど、たまには振り返ってね。そこには大切な人が絶対に居るから、僕には居るよ。いっぱいね」
「……うん」
　明久が少しだけ笑って答えた。頃合を見計らったように明乃の世界の紫が声をかけてきた

「明乃、もうそろそろ帰るわよ」
「あー、わかった。あ、そうだ」
明乃がふと思いついたかのように言い出す。
「？」
明久が首を傾げていると意地の悪い笑みを浮かべて明乃が言った。
「もう一つだけ教えておくよ。僕の名前は『吉井』明乃、異世界の『明久』だよ。君が心のどこかで呼んでくれれば多分『応える』から、ま、紫が連れて来てくれるかわかんないけど、それでも明久のためなら頑張るから、じゃあね！」
それだけ言うと、明乃は明乃の世界の紫が作ったスキマに躊躇なく飛び込んだ。
「え、えええええ?!」
少年の叫びだけが幻想郷に響き渡った。

――　氷娘陽炎夢。　完

氷娘贋作譚

　それはある日、里へ買い出しに出かけたときのこと。饅頭屋で饅頭を買いに来たらお店のおばあちゃん（孫みたいに可愛がってくれる。時々おまけで饅頭を増やしてくれる優しいおばあちゃんだ）が言った。
「おや、明乃ちゃん　昨日はありがとうねぇ。おまんじゅう美味しかったかい？」
「へ？」
　そこに通りかかった材木屋のおじいちゃん（チルノの家を増築するときにお世話になった）がさらに言う。
「おお、明乃ちゃん　昨日は荷物運ぶの手伝ってくれてありがとうな」
「あれ?!」
　その後も僕はいわれのないことで感謝されまくった。

――　少女困惑中。

「へぇ、明乃の偽物な」
「偽物ってわけじゃないんだろうけど……そっくりさん？　何か昨日里中で人助けしてたみたいでさ、僕には覚えがないんだよね」
　避暑地に逃げ込んでいる魔理沙のところに思わず駆け込んだ。魔理沙は驚きはしたけど普通に出迎えてくれて僕の話を聞いてくれた。
「ドッペルゲンガー……とかか？」
「え、勘弁してよ。同じ顔した人に三人会うと死ぬっていうじゃないか」
　もうすでに一人会ってるんだけど、その人は男だったけど。魔理沙には僕の声は届かなかったらしい。手をポンと合わせてこう言いだした。
「興味湧いてきたぜ。明乃、探しに行こうぜドッペルゲンガー！」
「えええっ?!」

――　少女情報収集中。

　人里の寺子屋に僕たちは来ていた。昨日、ドッペルゲンガーが子どもたちと遊んでいたらしい。だったら慧音さんも見ていると思ったので尋ねたのだ。事情を話すと慧音さんは少し考え込んでから言った。

「そういえば、あの明乃黒かった気が」
「「黒？」」
　ちょっと待って、黒って何?!
「ああ、そういえば目の色が違った気が」
「「もうドッペルゲンガーじゃなないよね／だろ」」
　二人で同時にツッコミを入れてしまうのは当然じゃないの?!
「それから髪も長かった気が」
「ちょおおおお」
「どうして見間違えたのかがわからん」
　僕も分からないよ。現実逃避していると外から
　どんがらがっしゃあああん
　とてつもなく大きな破壊音が鳴り響いた。一体何?!　妖怪の襲撃?!　あてている僕の耳に知り合いの声がした。
「待て！　無銭飲食などをする人間だったか明乃っ!!」
「ちょま」
　外に出てみれば長い黒髪の女の子をシロウが追い回していた。何であれが僕に見えるの？

「待てぇぇぇぇい!!　僕がそんなことするかシロウのボケェェェェ」

キレた。思わずスペルカードを発動させる。

極氷術『アイシクルエデン』

黒髪の女の子とシロウの二人は突然凍った地面に滑って転んだ。そのまま動かない。

「……あ」

「やっちまったな」

「妹紅を呼んでくるか」

里凍らせてすみません。妹紅さんにも後で謝っておかないと。

――　少女反省中。

今日は開かれていない寺子屋の一室に二枚の布団が敷かれた。一つは女の子の分、もう一つはシロウの分だ。本当にごめん。

「それにしてもこの子供は誰だ?」

「妙に明乃に似てるよな」

「全然似てないじゃないか！」
　こんな長い髪してないし、肌白くないし、可愛くないし！
「そうか？　髪色とか髪の長さはともかく顔の形とかはよく似ているぞ」
「ん、んぅ？」
「あ、起きた」
　女の子を覗き込む。すると女の子は笑って。
「あ、おりじなるだ」
「「?!」」
　全員が驚く、そして女の子は僕の首に腕を回して。
「え、ちょ　どういうこと?!」
「ぬふふー」
　そのまま引き寄せた。潰さないように両腕に力を込めるけどそれでも引き寄せようとしてくる。
「結構力つよ、ってか抜けられない?!」
　僕が騒いでいたらシロウが起きたらしい。ぼおっとした目でこちらを見てきた。
「オレは……あれ、明乃何やってんだ？」
　目を丸くするシロウ、当然だよね。

「あー、シロウ凍らせてごめん、助けて」
「何故凍らせたのかはあとで聞くとして了解した」
シロウのおかげでどうにか腕から解放された。
「はぁぁぁ、助かった」
「で？　無銭飲食の挙句の果てに何故凍らせたのか聞かせてもらうぞ」
まだ無銭飲食犯だと思われてるのか僕。
「無銭飲食は知らないよ。大体さっきの騒ぎの時、ここ居たからね。魔理沙と慧音さんが証人だよ。凍らせた件に関しては反省している。ついカッとなってやったんだ」
「全く、それは犯罪に走る少年のような言い訳だぞ」
そーですかーだ。
「いいもん、暑さが理由で雨降らすような馬鹿だもん……あー、明久大丈夫かな？」
「一体それは誰だよ。それから雨降らすとか何処でやったんだぜ？」
平行世界の自分と同じ存在を思い出す。あー、雨降らしてすみませんでした。
「内緒、それにしてもこの子誰？」
そもそもの問題はそこだよ。
「見事に議論が元に戻ったな」
「やっぱ明乃に似てないか？」

「そう？」
　似てないと思うんだけど。
「とりあえずこいつが例のドッペルゲンガーってことであってると思うぜ」
「だよね」
「ドッペルゲンガー？」
　シロウが首を傾げる。あ、シロウは知らないのか。
「昨日のことなんだけど、僕は饅頭屋のおばあちゃんを助け、材木屋のおじいちゃんの荷物運びを手伝い、里の子供と遊んで、他にもいろんなところで人助けをしていたそうな」
「君であればそういうことを平気ですると思うのだが」
　僕はそういう風に見られてるのか。
「その日、僕は湖の真ん中にある真っ赤な吸血鬼の館で友達と遊んでた（バトって）。ついでに言うなら知り合いの泥棒行為を止めるために弾幕勝負してた」
「あれ？」
「おかしいんだよ。僕はその日、人里に来ようと思ったって来れるわけがない」
　人里から湖まではかなりの距離がある。それを移動するとか僕には無理なんだよね。
　魔理沙と慧音さんが席を立つ。もう少し聞き込みをしてきてくれるらしい。
　この子何者なんだろうなぁとか考えながら見てるとふと頭の中に画像が出てきた。

ケースの中から見たかのような世界、目の前では男が笑っている。その奥には何十枚にも張られた僕の写真、あれがオリジナル、僕のオリジナル
「っ」
「大丈夫か？」
「う、うん……」
つまり、この子って……
「あら、明乃が拾ってたのね」
「紫?!」
紫がスキマからにゅっと出て来た。
「明乃が拾うって……まあ、それも運命ってことかしら」
「紫……この子って、まさか？」
「そうよ。貴女のクローンよ。貴女が世界に『拒絶』される直前頃に作られたの、でも貴女は『拒絶』された。よって、この子も『拒絶』されてしまったの」
「じゃあ、何で今更幻想郷入りしたのさ?!」
時期が違い過ぎる。もう僕が幻想郷入りしてから1年半は過ぎてる。
「明乃は『拒絶』から何者かの意思によって救われていたわ。でもこの子は違う。自分の能力でここへ来たの多分貴女に会いに？」

「能力？」
　この子も能力持ちなのか。
「ええ、憶測になるけど『運命に抗う程度の能力』ね。凄い能力だわ」
「どういう風に？」
　いまいち分からないような？
「そうね。例えば今ここで貴女にお茶が掛かってしまう運命だったとするわね。それは貴女がどれだけ頑張っても不可避だったとする。でも、この子はそれにあらがうことができる。つまり貴女がお茶を被ってしまうってことを回避させることができるの」
　分かったようなわからないような。シロウも似たような表情をしている。
「えと、つまり自分が死ぬって確定してもそれに抗って回避できると」
「その方がわかりやすかったかしら？」
「うん」
「ごめんなさいね」
　とりあえずとんでもない能力の持ち主のようだ。
「あー、あれ？　僕なんでここに居るんだろう」
　気が付いたら彼女が起きていた。とりあえず自己紹介しないと。
「えと、はじめまして？　君は？」

「僕の名前は闇乃、よろしくオリジナル！」
「オリジナルって名前じゃないんだけど、僕の名前は明乃　よろしくね、闇乃」
これが僕と似ているようで全然に似てない彼女との邂逅だった。

――　少女邂逅後。

それからちょっと経って、とある食堂に僕は足を運んだ。
「いらっしゃい、明乃」
「こんにちわー、闇乃」
闇乃はすっかりシロウのお店の看板娘になっていた。闇乃はとても料理が上手（食べに来ていた女性客を凹ませるくらい）で、人懐っこい性格が受けたらしい。
それから便利屋を始めたそうな。どんなことをやっているかは彼女は教えてくれない。とりあえずシロウが言うには人間にはありえないほどの身体能力を使っているらしい。今度適当にふらふらしてたら仕事場に出くわしたりして。
「今日は何がおすすめ？」
「そうめんとか食べる？」
闇乃が首をコテンと傾げた。僕じゃ絶対に無理だね。

「そうめんかぁ……たれとか選べる？」
「もちろん」
　ならマンネリとかなさそうだね。
「じゃあ、それで」
「わかったよー」
　彼女はパタパタと厨房へ向かった。その後ろ姿を見ながら思う。彼女が『拒絶』に抗ったのは別に僕のためじゃないのだろう、むしろ世界で生きたかったからこそ、この場所に来た。
　幻想郷は全てを受け入れる京……闇乃みたいな人間も受け入れる京、願わくばその穏やかな日々が続くことを――――

氷娘夕食話

日も結構傾いた頃、僕はシロウの店で作業をしていた。
「ふっふーふーふーふーふふっふっふ」
思わず鼻歌を歌ってしまう。いやぁ、ほんと楽しみだなぁ。
調子に乗ってると黒髪に赤い目の薄い赤の着物の女の子、闇乃が様子を見に来た。流石にうるさかったかな？
「どうかしたの？　妙に機嫌がいいけど、というよりも何でウチの店に来て料理作ってるの？」
闇乃が首を傾けて聞いてきた。まあ、そうなるよね。いきなり押しかけて台所貸して！　だもんね。
「あ、闇乃？　ごめんごめん、思いっきりあったかい料理だからチルノに作るなら余所でやれって追い出されてさー」
チルノは暑いの苦手なんだよね。そのせいか今回は結構怒られたよ。事情を聞いた闇乃はわかったみたいで軽く縦に頷いてから聞いてきた。

「そうなんだ。何作ってるの？」
「パエリア、この前の騒動の時に材料、明久から貰ったんだよねー。海産物とか入ってるからこっちじゃ作れなくって、それにさっきシロウに頼んでパニジャーラ投影してもらったし」
　シロウの投影魔術って結構便利だよね。フライパンとか投影してもらったし、この前には卵焼き用のフライパンとかも、あれって無いと卵焼き綺麗に作るの大変なんだよね。
「それでご機嫌なんだ。それにしても、この前って？」
「ん？　ほら、シロウが喧嘩買って人里壊滅しかけたあれ」
　事情誰にも聞いても分からなかったからしょうがなくて紫に事情聞いたんだよなぁ。てか、あの人たち本当に何やってんだか。闇乃も思い出したみたいで顔を青くする。聞いた人聞いた人全員この状態だけど何かあったのかな？
「……あれかぁ。本当に危なかったよね」
「全く、男の子って喧嘩っ早いのが常識なのかなぁ？　煽ったあっちの紫も紫かもしれないけど二人が自重すればどうにかなった気がさぁ」
　どうもこの件に関しては愚痴っぽくなっちゃうよ。下手したら人里無くなってたかもしれないしね。

そんなことをつらつら言ってたら闇乃が口を挟んできた。
「一言、シロウ反省してるからもう不問で」
この話題になるとシロウちょっと複雑そうな顔するしまあ、もういいや。
「ま、それもそっか　よし、完成！　我ながら結構できた方だなぁ。てか、久しぶりだなぁパエリア」
「テンション高いね」
闇乃がちょっとだけ呆れた顔で言った。何言ってるのさ？
「もちろん！　パエリアだよ。パエリア！」
「……よくわからないけどパエリアでテンションが上がっているってことはよくわかった」

――　少女盛付中。

「きゃっふい、パエリアーっ!!」
とりあえず閉店している店の一角に鍋敷きを置いてそこにパエリアの入った大皿を乗せる。僕がテンションのあまりに叫んだのにシロウがツッコミを入れた。
「……明乃、何か悪いものでも食べたのかね？」

「パエリアだからだって」
「……なんでさ」
　むしろなんで二人がわからないのかがわからないんだけど。適当に持ってきたお皿を隣に置いてスプーンやトングを用意する。そういえば、これ全部シロウの投影なんだよね……日用雑貨って剣じゃないのになんで投影できるんだろう？
「あ、二人も食べるよね？」
　僕がそう言ったら二人がびっくりした顔をした。
「え、チルノのところ持っていくんじゃないの？」
「なんで？　暖かいうちに食べた方がいいよ。それにチルノは今日どこかで酒盛りだから」
　持って帰ったところで誰も居ないんだよね。
「あ、そうなんだ」
「それであれば君の家で作ってもよかったんじゃないか？」
　シロウが正論を言う。まあ、普通だったらそうするんだけどね。
「『暖気が籠るから止めなさい』チルノから怒られたんだよ」
　後、僕が一人だけで食事するのが嫌だったっていうのもあるけど。
「そうなのか。ま、せっかく君が作ったんだ。頂くとするか」

「明乃がそこまで自信持ってるなら美味しいよね。ってわけでいただ「ちょおおっとまった！」

誰かが店の扉を物凄い勢いで開けた。黒い帽子に黒と白のエプロンドレスに金色の髪、ここまでくれば二人しかいないし、身長から言えば一人しかいない。

「魔理沙?!」

「急にどうしたんだ？」

闇乃もシロウもびっくりしてる。そうだよね。僕もかなり驚いたよ。

「いやー、なんかうまそうな匂いがしたから来てみて正解だったな」

「目ざといっていうか鼻ざといっていうか」

「明乃、そんな言葉ないよ」

それはそうだけどさ。

「だよね。でもさ、それ以上に今の状況を的確に表す言葉がある？」

「無いな」

「無いけどね」

だよねー。

この後、僕ら四人は普通にパエリアを食べるのだった。

――　少女食事中。

「美味い！」

一口食べた魔理沙が嬉しそうに言った。よかった、料理人冥利に尽きるね。

「そりゃどうも、当然だよ。好物だもん」

好物なのに美味しく作れないとか普通は無いと思う。まあ、料理できない人もいるだろうけど。

「うん、僕も美味しいって思う」

「これはかなり良いな」

あ、本業料理人たちからも意外と好評価？

「お、二人の御眼鏡に適うってことはかなりいい？」

「だな。ふむ、明乃材料はまだあるか？」

「まあ、三日分は貰ったし　まだあるよ」

結構もらったんだよね。個人的には物凄くうれしいけど、あの量を持って帰るのはちょっときつかったなぁ。

そんなことをつらつら考えていたら僕の返答を聞いてちょっと考えたシロウが言った。

「では、明日は私が本場の味をお見せしよう」
楽しみにするといいと続けるシロウに僕は聞いた。
「え、シロウってスペイン行ったことあるの？」
「まあ、色々とな」
まあ、なんか事情があってスペインに行ったことでもあるのかな？　正義の味方活動の一環とか。僕らの会話を聞いていた魔理沙が首を傾げた。
「すぺいん？」
「あ、現代にある国だよ。この料理はそこの国のなんだ」
幻想郷ってその手の知識あるわけないもんね。ある意味隔絶された場所なわけだし。
「へぇ、米使ってるから普通にある料理かと思った」
「まあ、米食の国ってそれなりにあるからね。米の種類違うけど」
本日の夕食はだいぶ賑やかだった。

氷娘刹那録

　気が付いたらなんか道の真ん中に私は立っていた。ここは何処なんだ？　里とかなり違うし、はっまさか私は自覚のない瞬間移動術でも身につけたというのだろうか。そんなことをつらつらと考えていた私のお腹が鳴った。そういえば昼ご飯食べてない気が。ふと、目に着いた食堂へと入る。

「いらっしゃい」

「いらっしゃーい」

　中では褐色の肌に白髪という日本人離れした青年と黒く長い髪の赤い目の女の子が出迎えた。ちょうど昼時みたいで結構混んでいる。黒髪の女の子が注文を取りにやってきた。

「なに注文する？」

「えっと、なんかおすすめあるか？」

　ここの店は全然知らないことだし、料理人に任せた方がいいはず。

「今の時期ならそうめんとかあるよ？　それとも冷やし中華？」

「へぇ、そんなのあるのか。えっと、冷やし中華で」

私が注文すれば女の子は明るくよく通る声で厨房の方を向いて注文を繰り返した。
「はいよー、冷やし中華ー！」
「分かった」
青年が返事をして作り始める。どうやら彼が作っているらしい。
「はい、お待たせー」
しばらくして女の子が実に美味しそうな冷やし中華を持ってきた。何だか後光が差しているようにも見えなくはない。思わず目を見張った。
「ありがとう……美味しそうだな」
「当然！」
女の子は笑って胸を張ってそう言った。よし、いただくとしよう。

――　青年食事中。

「ご馳走様、えっと代金は何処に出せば」
会計用のカウンターなどは何処にもない。きょろきょろとしていると私よりも後に入ってきた茶色の髪に青みがかった茶色の目の女の子が話しかけてきた。
「あ、お会計だね」

「ああ」
　その子が手を挙げて忙しそうに動き回ってる女の子に声をかけた。
「闇乃ー、こっちの人会計だって」
　すると女の子はすぐに気が付いてこちらへとやってきた。なるほど、そうすればよかったのか。
「あ、りょうかーい。明乃ありがと、今人手が足りなくてさー」
「そうなんだ」
　どうやら彼女たちは知り合いならしい。顔だちとかがよく似ているからもしかしたら親戚関係なのかもしれないな。
「これで足りるか？」
「まいどー……ってちょっと待って。これは……」
　私が差し出したお金を見て女の子が固まる。私の代わりに会計を呼んでくれた彼女も私の手を覗き込んで驚いた顔をした。
「どうしたの？　……これって」
「どうかしたのか？」
　何か不味いことでもあったのだろうか？
「いや、ごめん。これは支払いには使えないや」

「え、そうなのか?!」
　里では普通に使ってるのに?!
「うん、これ昔のお金だよね。慧音さんが最近は廃れたがとか言って見本代わりに見せてもらったことがあるよ」
「え?　私はこれ普通に使ってるぞ?」
　一昔前とは心外だと思う。そこへ褐色の肌に白髪の青年がこちらへとやってきた。手にはフライパンらしきものが握られている。
「おい、闇乃!　注文が……どうした?」
「あ、シロウ　厨房いいの?」
　青い方の女の子が彼に問いかけた。
「それどころじゃないんだ。闇乃、急いでくれ」
　見れば店はまだまだ混んでいるようだ。ここの店は何人で動かしているのだろうか?
「とりあえずこれで会計は無理……と、どうしたものか」
「あ、いいこと思いついた。お兄さん、接客できる?」
　青い女の子が少し悩むしぐさをしている間に黒い少女が何かを思いついたと言わんばかりににいっと笑った。マズイ、これは嫌なことが起こる前触れに違いない。

「な、なんだ？　いきなり」
「とりあえず、注文とって、会計っぽい人に声かけて、商品運べば終わりだから。がんばれ」
「は？」
　いきなり何を言い出すんだこの子は。女の子は青年の方を向いて言った。
「店長、この人ちょうど手持ちがないみたいでさー。手伝いしてくれるってさ」
「え、ちょ」
　急に何でそんなことになった?!　青年がおかしいと言ってくれるだろうと期待して彼の方を向けば。
「そうか、それなら早くしてくれ」
「えええええ?!」
　……見事に退路は断たれてしまった。近くで青い方の女の子が「どんまい」と小さく言っていたが、それに答える暇などなく私は前掛けを渡され手伝いへと駆り出されてしまった。

――　青年接客中。

昼時も過ぎたらしく客が減った。ようやく手伝いから解放された私は開いているテーブルにぐってりとうつぶせた。青い方の女の子が私の反対側に座ってから苦笑して言った。
「お兄さん、お疲れ様」
「あ、ああ　いきなりこんなことになるなんて」
「まあ、シロウも闇乃も結構こき使ったもんねー。それ、僕のおごりだから食べていいよ」
目の前にはかなり美味しそうなケーキのようなものが置かれた。
「あ、いや」
「いいから、お金に関してはフォローできないけど闇乃がいきなり巻き込んだのは事実だし」
「君みたいな子どもにおごってもらうわけには」
どう見たってこの子は十歳にも満たないほどの女の子だろう。大の大人が子どもに奢ってもらうわけには。そう女の子に告げると女の子は少々不機嫌そうな顔で言った。
「……見た目はこどもでも今はきっちりお金持ってる僕のほうが優位ってもんじゃない？　っていうよりもお金があんな状態なのによく食べに来ようって思えたほうが不思議っていうか」

「私は普通にこれを使っているんだけどな」
そう女の子に言うと女の子は完璧に呆れた様子で言った。
「はぁ、とりあえず食べてよ。僕は食べる気ないから」
「そ、そうか」

――　青年喫食中。

さて、代金の問題もどうにかなったことだしお暇させてもらおう。
「では、世話になったな」
「じゃあねー」
青い方の女の子が私のことを見送ってくれた。後の二人は多分店の片づけに追われているのだろう。
私が出て行った後にこんな会話がなされていたことは私は知らない。
「……ところだけど、あのお兄さん何者?」
「とりあえず里の人間でないことは確かだな。それからかなりの手練れだ」
「うん、僕も見たことがないよ」

――　青年移動中。

しばらく歩いているとふっと目の前に誰かが現れた。
「はぁ、ようやく見つけたわ」
「え？　スキマババア？」
東方の八雲紫だ。ってことはここは幻想郷か？　私がそう呟くと八雲紫は静かに怒る。発してくる殺気はかなり怖い。
「誰がババアよ。全く、異界から入り込んだ何者かが居るって聞いて慌てたわ。あなた、天狗の里の住人ね」
「ええ、というかここどこなんだ？」
幻想郷ということは見当がついたが、わかったのはそれだけでそれ以上のことは何もわからない。そう聞くと八雲紫は涼やかな笑顔で笑った。
「『今』のあなたは知らなくていいことよ。それじゃあね」
「え？　うわっ?!」
いきなり足下に現れたスキマに足を取られて私は落下した。『一名様幻想郷外ごあんなーい』とかそんなのが聞こえたような気がしたようなしなかったような。

――　青年落下中。

私は気が付けば里の外れの草原に寝転がっていた。

「いっつ、あれ？」

私は一体何をしていたのだろう？　確か、見知らぬ場所に居てそこの食堂で食べたらお金が使えず手伝う羽目になって、その後で誰かに逢って……誰だっけ？

私が思い出せずに首を傾げていると柊がやってきた。

「一体どうしたのよ。こんなところで寝転がって」

「私はなんでここに居るんだ？」

「そんなの私が知るわけないでしょう。里の中に戻るわよ」

「あ、ああ」

ふと、冷やし中華が食べたいなと思った。何故だったかは忘れたけど。

氷娘喫茶録

　木でできた喫茶店らしきドアを開ける。本日はちょっと暇だったのでシロウと里を散策してたんだけど何というか『らしくない』ドアを見つけたので思わずドアノブに手をかけてしまったのだ。
「いらっしゃい」
「どうも、ここどこ？」
「やれやれ、特異点というわけか」
　シロウが訳知り顔でため息をつく。あ、知ってるんだ。
「知ってるの？」
「まあね。ちょうどアルバイトしてる時間では無くて助かったよ」
　誰が？　ちょっと気になるけど今その話をしている場合じゃない、目の前のなんか猫耳生やした店員さんに告げる。
「バイト？　何の話？　あ、二名です」
「かしこまりました。こちらの席へどうぞ」

窓際の奥の奥の席に案内された。先ほどまで誰かいたらしくたばこの臭いがする。うーん、たばこって直で吸われるのはあんまり好きじゃないのに何で匂いは少し気になるくらいで済むんだろう？　割と関係ないことを考えていた僕だった。

シロウはというとなんだか少しこのたばこの臭いが気になるらしい。しきりに周囲を見回して誰かを探すような素振りをしている。目がちょっとだけ希望でキラッとしているのは気のせいだと思いたい。

「へぇ、結構しゃれてるね。ここ最近この手のもの見なくなってきたから懐かしいなぁ」

僕が話題を振るとシロウはちょっと残念そうにした後、こっちを向いてきた。

「そうだな。里は割と文化的には遅れているし」

「しょうがないよ。あそこは『忘れられたものの集う場所』ぶっちゃけ昭和の物とかまだ現役でしょ」

昭和の代物で流れ着いたのって……手動式洗濯機？　アレはアレで驚いたなぁ。

「そうだったな。まあ、たまにあの雑貨屋で蛍光灯などを見たときには驚くが」

「電気ないのにどうしろって話だよね。ふむ、お金あるかな。なんか頼みたいんだけど」

こういうところに来るとお腹が減ってしまうのは人間の性分だよね。飲み物でもいいや。

「さてね。私は里の通貨しか……む？」

シロウが財布を覗き込んで驚いた顔をしてる。見てみれば中には諭吉が3枚と野口4枚入っている。結構な額だよねこれ。
「あれ？　現金に代わってる？」
「そのようだな。なぜだ？」
シロウが首を傾げる。僕も首を傾げた。
「さあ？　まあとりあえず何かたのもっか」
「はぁ、ま　一品くらいは構わないか」
店員に声をかけ僕らは一品ずつ注文をした。
――　少女注文中。
カランカランと音がして誰かが入ってきた。聞き覚えのある声の二人組だ。何で？
「……はぁ、アーチャー」
「恨みがましい目で見ないでくれマスター、先ほど謝ったはずだが？」
平行世界の『僕』であろう黒い上着に黒いズボン姿の高校生くらいの男の子と白髪に褐色の肌、服装は黒のYシャツに黒のズボンなどう見たって見覚えのある青年の二人組が入ってきた。
「まあ、良いけど？　バイト代出るし？　喫茶店の厨房くらいなら手伝うよって言ったし？　とは言え色んな意味でタイミングが最悪だったんだよ!!」

フシャーと猫を思わせる感じで男の子は怒った。青年の方が少しだけ呆れた感じで返した。
「だから魔術の実験中に言い出したのはすまなかったと言っているだろう?」
「はぁ、もういいや」
「なんでさ」
いや、それ言いたいのはこっちなんだけど。とか思いながら前に視線を戻せばシロウが動揺しまくっていた。
「っ?!」
「わわっ、倒れる倒れる」
お冷が倒れ掛かっていた。
「……なんでさ」
それしか言えないよね。気持ちはよくわかるよ。
『アーチャーってプラナリアだったの?!』とか言ってみる」
「なんでさ。でもそうかもな。単細胞だなオレ」
うん、僕ら二人ともがパニクってたのが見て取れるやり取りだね。
「とりあえずあれだねバレたら大パニックだ」
「ああ、そうかもしれないな」

とりあえず大人しくしておこうと決意した矢先に猫みたいな店員さんがお盆を持ってやってきた。
「ご注文のコーヒーとパフェでございます」
店員さんからどちらも受け取る、何故か僕の方にコーヒーが来たのでシロウの方に回した。
「ありがとうございます。はい、コーヒー」
「ありがとう」
カップを傾けながら飲むシロウを見る。うわぁ、絵になるなぁ。そんなことを思った後でふと考えたことを口に出した。
「思うんだけどさー、何でみんなコーヒー飲めるのかな？　あのただひたすらに苦い飲み物飲めるのが不思議でならないんだけど」
「君は割と子ども味覚と言われないかね？」
ちょっと苦笑されつつ呆れられたふーんだ。
「べーだ。子ども味覚で結構、コーヒーゼリーとかは割と好きなんだけどねー。飲む意味が分からない」
「ま、その辺は人それぞれというものだろう」
それもそうか。

――　少女喫食中。

さらにカランコロンと音がして誰かが入ってきた。またもや聞き覚えのある声がする。

「あれ、特異点に来るなんて珍しいこともあるんだな」

「マスター、君の図太さには感心するよ。時空間レベルでの移動のはずなのによくその感想で済んでいるな」

今度は僕がサーヴァントもどきになった時にマスターだった彼が着てた制服を着た高校生くらいの男の子と赤いジャケットに黒のインナー、黒ズボン姿の青年だ。髪はこちらもオールバック。

青年が呆れたような顔で言えば男の子はきょとんとした顔で言った。

「は？　別に気にしたところで始まらないだろ？」

「はぁ、相変わらずだな」

前に向き直る。そして二人同時に言った。

「「……なんでさ」」

それしか言えないよ。

「二人くらいは予測ついてたけど、三人目が来るとか思わなかったよ?!」

「ああ、俺も思わなかった」

でしょうね。二人ならまだしも三人って……

「うん、もうツッコミ入れたら負けだね。色んな意味で　月から人、来るとか思わなかったよ」

多分彼、月から来たんだろうなぁ。そしてあっちの彼も、彼は多分無銘の英雄の方なんだろうなぁ。

「月？　それがどうかしたのかね」

「あー、何でもないよ。お会計どうしよう」

レジあったっけ？

「だな。レジに行けばいいのか？」

シロウはレジを発見してたらしい。レジの方を見たらなんかかわいいメイド服姿の女の子が金髪に赤目の唯我独尊的な雰囲気垂れ流しのめんどくさそうな人に絡まれていた。

「……レジ、今いかない方がいいね」

「ああ、同感だ」

――　少女待機中。

さらにまたカランと音がして誰かが入ってきた。

「あれ、アーネンエルベ？」

「うん、意外だね」
平行世界の『僕』服装は黒コートに黒ズボン、肩には何かが入ったケース、とそれから癖の強い黒髪に黒コートに黒ズボンの男の人だった。
「……」
シロウに目線を戻したらなんか固唾を飲んで男の人を見てた。あ、これは話しかけたら拙い、とりあえず一時間は語られるのを覚悟した方がいい気がする。
「セイバーいないのがちょっと残念、彼女ここ好きなのに」
「そう？　どちらかというと君と一緒に居るのが好きなだけだと思うけど？」
とりあえず仲いいんだなぁあの人たち。それだけは伝わった。シロウがなんかぎりぎりしてるけど無視で。
その一時間後どうにか僕らは会計を済ませて店の外に出ることができた。
そこは元いた場所だったし、振り向けばドアは扉に戻っていた。うん、不思議体験だったね。シロウは微妙に機嫌がいいのか悪いのか不明になった。ま、愚痴くらいは付き合うか。

氷娘邂逅録（クロスオーバー）

人物紹介

クロスオーバーで登場する人物と用語紹介

エミヤシロウ

ある日幻想郷に迷い込んだ　元『守護者』

肉体面精神面両方の摩耗により『世界』から捨てられた際に明乃に拾われる。拾われた当初は精神的摩耗で記憶喪失となっていた

『無意識』に『呼ばれた』明乃の荒療治によって摩耗はどうにか回復、過去を取り戻すこととなる

性格は皮肉屋で現実主義者、慇懃無礼、そのくせ根はお人好し　色々ふっきれたので皮肉は割と少な目、ただし明乃との漫才に近いようなボケとツッコミは容赦なしである。多分明乃に記憶を全部見られているから、何やっても大丈夫っていう安心感があるからかもしれない

また左腕を肘から下を失い回復しなかったため、河童特製の義腕を装着している。使い心地は上々のようだ。河童が虎視眈々とミサイル機能とかつけようとしているのは

知らないし知らない方がいい、これに関しては明乃が止めるように言っているため実現はしていない

現在は人間の里で料理屋を開いている

投影魔術は健在だが、スペルカードは所持していない。また、空は飛べない

※基本的なところは原作に準じているので割愛する

岸波白野

月で行われた聖杯戦争に参加していた元マスター、サーヴァントはアーチャー

五回戦の終わりにシェイプシェプターに襲われて、月の裏側へとやってくる。その際に己のサーヴァントであったアーチャーとはぐれ、そのまま虚数空間を落下している際に『無意識』の『叫び』を聞きつけた明乃の魂によって救われる。そのままアーチャーのポジションに明乃が放り込まれてしまった。そして裏側の事件を解決した後に月の聖杯戦争に優勝、中枢にアクセス、分解されかかったところを明乃に救われた

性格は図太く、割と度胸がある。また人誑しの気があり、女難の相がありそう。たまにセクハラ発言してドン引かれるがしばらくすると忘れられる

現在は紅魔館で住み込みで働いている。主な理由はレミリアにドン引きしなかったから。休みの日には幻想郷を旅している。お供は主に明乃

コードキャスト用の礼装はなぜかすべて所持している。最近はパチュリーに魔法を習っている

空は飛べない、スペルカードは護身用に所持

・エクスイカバー　使用者：チルノ・明乃・シロウ

Ｉｃｅべきおバカが持つ勝利の氷剣、形状は夏場によく売られている某スイカ型の氷菓子

見た目上鈍器のような印象を受けるが、実はよく切れる。ネタモノ武器と侮るなかれ、かなり強い。某勝利の剣よりは劣るがランク付けすればＡには確実にはいるくらいの力はある

最初の持ち主はチルノ、それが明乃へ氷剣『エクスイカバー』として受け継がれて、シロウの投影魔術の一部に加わった

チルノは割と嬉々として使い、明乃はキレたときの制裁用その二、シロウはかなり使うのをためらう、シロウ的には見た目とかそれから自分がそれをぶん回している姿がシュールだからあんまり使いたくない、実際かなりシュールだし

ちなみに鈍器として使用も可能、そして可食である

基本は感想欄にのみ出現、もしくはコラボ先

・永久凍土の氷剣（アイスカリバー）　使用者：チルノ

上のエクスイカバーによって放たれる極太の氷のレーザー、要はあの某勝利の剣の氷版

能力の種類上、チルノしか使えない。シロウはエクスイカバーの「記憶」としては知っているが使用は出来ない。明乃は力不足で使えない

このレーザーが放たれた跡は綺麗な氷柱が立つ。巻き込んだもの全てを「周囲」を凍らせるので注意が必要、この特性は某魔法先生のロリ吸血鬼の終盤戦で「人形」を破る際に見せたスペルと似ている

出番としては「凡庸型主人公」のみ、例外的に明乃が使用した

某守護者編　1

それはある晴れた日のことだった。散歩に出た／引き寄せられた草原で倒れている何かを発見したんだ。

「え」

よく見てみる。赤だけが目立つけれども他にも黒や褐色も見える。そこで僕はそれが人だって気が付いた。

「ちょ、大丈夫……うそ」

心配になって駆け寄ってみる。それは……

「うわぁぁぁぁ」

『東方氷娘記　番外編　正義の味方編』

僕は空を飛んで迷いの竹林にある永遠亭の玄関先へと降り立つ。そのままの勢いで扉をバンバン叩いた。

「てゐ！」
「どうしたの、明乃珍しいじゃない……て、どうしたのよその血」
　そんなことはどうだっていいんだよ。
「お願い、この人助けて！」
「どういう……って、誰よこいつ」
「知らないけど怪我が酷すぎて……」
「はあ、わかったわ」
　てゐはあきれ顔だったけどすぐに僕が背負っていた人を運んでくれた。

――　青年負傷中。

「とりあえずだけど処置は完了したそうよ」
「ありがとう……どれくらいの怪我してたの？　正直……血まみれだったから」
　何処をどう言う怪我をしていたのか全然わからなかった。それくらいにあの人は酷かった。
「腕が一本なくなって、足にも大きな傷、片目も無くなってたわ」
「っ」

想像以上だったことに思わず息をのんでしまった。それに鳥肌が立ってしまう。腕や片目が無くなるってどんな妖怪に襲われたのさ。

「はぁ、そこからとりあえず腕を除くほとんどを回復できたのが奇跡ってものね。どうしてそこまでの怪我してたのかは本人に問いただす他にないけど」

「はぁぁぁぁ」

「明乃が連れてこなかったら確実に死んでたね。お手柄だよ」

てゐが頭を撫でてくれた。その感触で助かったことがようやく本当だってことが飲み込めた。

「とりあえずよかったぁぁぁ」

「うん、そうね。とりあえずあんたも湯浴みしてきなさい。兎に言いつけて湯、沸かしてあるから。それと服はこっちで預かる。血まみれでもう元の色も見えないくらいになってるわよ」

「あ」

助けるのに夢中で全然考えてなかった。

――　少女入浴中。

永遠亭の一角にあるお風呂、それにつかりながら僕は呟く。
「ふぅ……あの人が何とかなってよかった」
思い返せば本当に酷い怪我だった。大丈夫かな？
「一体誰なんだろう、あの人」
知らない人だし、あの草原に倒れているなんてまるで……
「何処かで見たような見てないような恰好してたような……？」

――　少女着替中。

てゐが貸してくれた服に着替えて濡れた髪を布で乾かしながら廊下を歩いていると長い黒髪で十二単を着たかぐや姫みたいな人と白い髪に赤いリボンが特徴的な人が反対側から歩いてきた。僕に気が付いて声をかけてくる。
「あ、明乃　お風呂あがったのね」
「あれ？　明乃?!」
「あ、輝夜さん　あれ？　妹紅なんでいるの？」
輝夜さんはここに住んでいるんだし居てもいいけど、妹紅は何で？
「わたしはこいつに決闘を挑みに来たのよ」

「ええ、決闘を申し込まれたわ。それでね、毎回殺し合いじゃつまらないから、今回は花札なの」
「……まず殺し合いを日常にしちゃダメだと思うよ」
　そこ大切だと思うんだけど。
「明乃はなんでいるのよ」
「僕のツッコミは総スルーなんだね。僕は人を拾ったんだ」
「人はホイホイ拾っちゃダメだと思うわ」
「うん、わたしもそれに関しては同意するわ」
　解せぬ。
「で？　人間拾って何で風呂入るのよ」
「うん、血まみれになってさ。服もてゐに回収されたんだよ」
　血がしみ込んだ服どうしよう。洗って落ちるかな？
　ああ、と二人が納得する。
「それでそんな恰好してたのね」
「うん、鈴仙みたいな恰好よね」
「個人的にはようやくこの手の恰好かぁって感じだけどね」
「「??」」

学生服（っぽいの）、これが本来僕が来ているべき服だよね。外見年齢はともかく

――　少女移動中。

近くの兎に倒れていた人の寝ている部屋へと案内してもらった。

「まだ、目……覚まさないか」

血にまみれて全く分からなかったけど髪が白い、目元には今は包帯が巻かれている。

それから服も違うものに代わっていた。

その人を眺めながらついまどろんでしまった。

「……」

――　少女夢見中。

某守護者編　2

　ゴウンゴウンと歯車の廻る音で目が覚めた。
「ここどこ？」
　遠くに歯車が見える。赤い空、荒れた地面、ちょっと向こうに丘が見えた。地面にはたくさん何かが突き刺さっている。大きさや長さもまちまちだけど一つだけ共通点を見つけた。
「剣ばっかりだ」
　とりあえず、丘の上に向かって歩き始めた。近づいていくにつれて、周りの剣の様子が変わっていく。
「いや、鋏って」
　これって剣になるの？　だんだんと日用品になっていっている気がする。
「カッターもある。それに……鞘？」
　青と金で彩られたきれいな鞘だ。中には剣も入っている。これだけは刺さっていないで置かれていた。

「あ」
「……」
丘の上で人を見つけた。あの人だ。腕もあるし、全身が普通、たぶんあの人の心みたいなものなんだ。そう、僕は思った。
「おーい」
「……」
返事がない。ただの屍のようだ。
「気が付いてない」
しばらく僕は待つことにした。

――　少女待機中。

「ひまだよ。大体ここは何処なのさ」
呟いてみたけど、この人は答えてくれない。
「そろそろこの人に気が付いてもらうしかないか」
スペルカードを取り出す。どうやらスペルカードは使えるらしい。

殴符『アイスストライク』

氷でできたハンマーを取り出す。ハリセンのつもりだったんだけど、あれ？　まあいいか。

「いい加減に気づけぇぇぇ」

渾身の一撃が目を閉じて、そこに突っ立っていたこの人に決まった。

「はぐぁっ」

口から奇声を出して、倒れる。あ

「あ、気絶させてしまった」

――　少女再度待機中。

ちょっとしてから、目を覚ました。ぼんやりとした目でその人は僕を見た。

「あれ？　オレは何で」

「目、覚めたみたいだね」

僕が言えばその人は驚いたように目を見開く。

「あんた、誰だ？」

「んー……説明が面倒なので教えない」
「おい」
　ナイスツッコミ、まあそれでも教えませんが。
「ところでさ、ここどこ？」
　この人なら知ってるかなって思った。だって最初からいたし。
「さあな、オレも知らない」
「そっか、ところでお兄さんは誰？」
　この人本当に誰なのさ。草原で倒れていたし、大けがしてたし。そんなことを考えていると
「オレ？　オレは……」
　そう呟いてる。どうかしたのかな？
「どうしたの？」
「わからない。オレって誰だっけ」
「はぁ?!」
　思わず叫んでしまう。なんで?!
「わからない。わからないんだよ」
「記憶喪失って奴？」

「わからない」
　それすらもわからないんだ。体がちょっとだけ透けてる。あ、もう追い出されるんだ。
「お兄さんが助けてほしいならそれに『応える』からさ、後で？　会おうよお兄さん」
「は？」
　お兄さんがぽかんとしている。そんなお兄さんに僕は笑った。
「じゃあね」

――　少女覚醒中。

　目が覚めた。僕はお兄さんの手を握ったまま眠っていたらしい。
「……それにしてもまたかい」
　フランの時といい、僕は人の心の中に入ることができるのではないだろうか？
「まだ目、覚まさないし」
　お兄さんの顔をまじまじと見てみる。
「なーんかどこかで見たことあるんだよね？」
　どこだっけなぁ。あんまり覚えがないし。そう考えているとお兄さんの頭が少しだ

け震えた。
「ん？」
「あ、起きた」
　ようやくだね。目元の包帯が外れてないのにお兄さんはこっちのほうに首を向けた。
「目、覚めた？　自分が誰かわかる？」
　目元の包帯を外しながら僕は尋ねる。
　心のほうは記憶がなかったみたいだけど、こっちのほうは何か記憶があるかもしれないし。
「すまない、ここは何処だ？　それに私は一体……」
　お兄さんの一人称ってこれだっけ？　確かオレとか言っていた気が。
「（あれ？）ここは幻想郷の薬屋兼診療所、永遠亭　お兄さんは？」
「私は……すまない、記憶が混乱しているようだ」
　やっぱりか、僕らが会話している声がしたらしくて誰かが入ってきた。
「あら、起きたのね」
「あ、えっと？」
　赤と青が半々になってる不思議な服を着た銀髪の女の人だ。こんな人永遠亭にいたんだ。

「永琳よ。初めましてよね。明乃」
「どうも、今回はありがとうございました」
　ああ、薬担当の永琳さんか。永琳さんはお兄さんを見ながらつぶやいた。
「構わないわよ。それにしても片腕がなくなってるのによくまともで居られるわね」
「？」
　それはどういうことだろう。
「体の一部がなくなると一種の違和感みたいなので精神的にまいることがあるの」
「へぇ、そんなの初めて知りました」
　そんなことってあるんだ。でも、まあ当然か。あるはずのものがなくなるって辛いはずだし。
　僕たちが会話をしているとお兄さんが声をかけてきた。
「すまない、君たちは何者なんだ？」
「あ、そっか　僕は明乃、まあ一般人だよ」
　他に言いようがないし、氷精の娘も通じないだろうし。
「貴方を一般人と呼ぶ人間がどこに居るのかしらね。私は八意永琳、この永遠亭の主治医をしているわ」
「そうか、助けてくれたことには礼を言おう。しかし、私のような人間を助けたところで

意味などないのではないかね？」
　いや、なんでだよ。
「はぁ、何言ってるのさ。目の前で血だらけで倒れてたら普通に助けない？」
「明乃、あなたの考え方も少し珍しいわよ」
　そう？　と首を傾げれば永琳さんはええ、と首を縦に振った。そっか珍しいのか。でも、しょうがないじゃないか『呼ばれて』なくても人助けはする主義だし。
「とりあえず、しばらくは大人しくしてもらうわよ。これは強制、医者のいうことは聞くといいわね」
「わかった」
「明乃もこっちへいらっしゃい、患者に負担かけないためにもね」
　永琳さんに引きずられて僕はその部屋を後にした。

――　少女移動中。

　別の部屋にて
「とりあえずはあれだけ回復したけど腕はどうにもならないわ」
「そうですか」

やっぱりそうなんだ。でも片目や足が治っているだけでもいいか。
「そう落ち込まないの。あなたが連れてこなかったらもっと酷い状況になったかもしれないわね。でもそれ以上に酷いところがあるかもしれない」
「へ？」
永琳さんの言葉に驚くどういうことだろう？
「精神的な所は医者が完璧に治すっていうのは無理ね。たぶん彼、精神的な面で凄いことになってるわ」
「すごいこと？」
思わずオウム返しにしてしまった。いったい何？
「もしかしたら記憶が戻らないかもっていうこと、たぶん彼の記憶喪失は精神面からかもしれないわ」
「……精神面」
心すら自分が誰なのかを忘れていた。もしかしたらお兄さんには忘れたい過去があるからかもしれない。
「そういうこと、でね。少し提案なのだけどお見舞い来てくれないかしら」
「お見舞い……ですか？」
急になんでお見舞いなんて言葉が出たのだろう？

「ええ、少しでも彼の精神状態を良くするためにもね」
「まあ、そんなことであれば」
それでお兄さんが救われるのであれば、まあいいかなって思った。

某守護者編　3

今日は三日に一度の見舞いの日だ。
「こんにちはー」
「また君かね」
お兄さんは呆れたような顔をする。最初よりは表情が出るようになったなぁ。
「どうも、まただけど？」
「そうかね」
そんなやり取りをしていると、ひょこっと魔理沙が顔を出してきた。
「はぁー、明乃が本当に男拾ってるとは」
「そこ！　言い方が怪しいから!!」
お兄さんが呆れたように肩をすくめた。
「彼女とはそういった関係ではないのだがね？」
「そうだよ。ただ単に拾っただけだよ？」
それ以上でもそれ以下でもないのにと言ったら魔理沙が呆れたような顔をした。

「明乃、人間はそんなホイホイ拾っていいもんじゃないんだぜ？」
「拾われてなかったら僕、死んでたけど」
「あ」
僕、チルノに拾われてなかったらあのままのたれ死んでたんだろうなぁ。
そこに誰かが入ってきた。お盆を持ったてゐだ。
「お茶入ったわよ」
「てゐ、ありがとう」
お茶をみんなに配る。すると魔理沙が嬉しそうな顔をした。
「お、茶柱立ってるぜ」
「おや、私のもだ」
あ、ちょっとだけ口元が緩んでる。
「良かったじゃない。じゃあ失礼するわね」

――　少女見舞中。

別の日、僕はひとりで見舞いに来ていた。障子が開いて誰かが入ってきた。
「外から人が来たって話を聞いて見に来たのだけど」

「あれ？　紫、今まで来なかったのに？」
　僕は紫の方に向き直った。お兄さんは特に口を挟むこともない。
「私は暇じゃないの、それにしても守護者が生きて落ちてくるなんて稀有よ」
「しゅごしゃ？」
　えっと、守るって意味の守護に者って意味で？
「あら、知らずに助けたの？　明乃らしいわね。守護者っていうのはね」
　紫が説明してくれた。守護者というのは『滅亡回避の祈り』の権化であるアラヤ識と契約を結んだ者や知名度の低い英霊の総称だそうだ。アラヤ識とは守護者を使役して人類滅亡を阻止する緊急措置ならしい。
「人類滅亡ってそんな簡単に起こるの？」
　そこまでの大事ってめったに起こらない気がするけど。
「まあ、どんな些細なことでも人類滅亡に繋がるってことはあるのじゃないかしら。アラヤ識の場合やり方は抹殺っていうのは少しいただけないのだけど」
「抹殺って……」
　そこまでしないと人類滅亡って防げないのか。真面目に考えていると、背後でボスッと誰かが布団に倒れる音がした。
「お兄さん?!」

僕は驚いて彼を揺すろうとして、肩に触れた。その途端、ぐいっと引きこまれるような錯覚を覚えた。

「明乃?!」

紫の声が聞こえた気がしたけど、それすらも気にならない。別の誰かが僕を『呼んだ』気がした。

――　少女落下中。

ごぼりとまるで水の中に放り込まれたような感覚がした。思わず目を閉じるけど、それ以上に気になる落ちるような感覚に目を開いてみた。僕はどこまでも落ちていた。水のような感覚は抜けないけど、息苦しいなんてことはない。周囲には剣のような模様と光る箱のようなものがある。

「これって……」

一つの箱に触れてみた。閃光のように箱が輝き、視界が赤へと染まる。

――――――　始まりは赤、赤、赤　オレは焼けた街を歩いていた。

始まる一人語り、これはあの人の記憶だ。

養父のこと、近所の姉代わりの人のこと、一つ一つが穏やかな夢のようだ。
でも、夢は醒めるもの。養父の死、受け継いだ夢、広い家の中で一人、暮らしていく。
それから魔術の師に出会う。それに優しい後輩、騒がしい日常が生まれた。
そして、運命の高校二年生の冬、遅くまで残った、青い服を着た赤槍をもった男と誰かが戦っている。
その戦いを見てしまった。槍に心臓を貫かれた。魔術の師が生き返させる。戦争に偶然とはいえ巻き込まれた。戦場を駆け抜ける。
戦争は終わった。大切なものをたくさん失った。だからこそ前に進もうと焦る。
魔術の師であった彼女との決別、破滅の運命は加速する。
せめて死後人類滅亡を止められるのならと世界と契約した。
最期、信じていた人たちに処刑されて死んだ。

声は続ける。
『酷いものだろう？　これが君が助けた愚か者の人生だ』
「そんなことはないさ、まだ終わってないじゃないか」
僕はまだ落ち続ける。他の箱に触れてみた。

世界に呼び出されて、人を殺していく、ああ５人、また１０人、今度は５０人、さらに１００人、１０００人……数えることさえ止めた。それでもまだ殺戮は続く、こんなことのために自分は世界と契約を結んだのか、どうしてどうしてどうして、心の叫びは僕の心にも痛いほど響く。

『泣きそうだぞ。もう見なくていいじゃないか！』

「ううん、君の方がもっと泣いているよ」

目に涙が浮かぶ、それでも僕は見なくちゃいけない、聞かなくちゃいけない。だって僕を『呼んだ』のはあなたでしょう？

聖杯戦争に呼び出された。あの頃の自分、それが自分と同じ道を歩むのであれば……この手で

日常のような非日常のような道を歩みながら。時は近づく、過去の自分との決戦、過去の自分は言った。「決して、間違いじゃないんだから――――!!」決着はついた。消えていく、その時に『答え』は得た。

「答え……見つけてるじゃないか。なのにまだ自分を否定するの？」

僕のつぶやきと同時に心の最深部へと僕は降りた。

――　少女着心中。

心の最奥、そこは剣が大量に刺された丘だった。前と同じように空が赤い。
「や、お兄さん？」
「まさか、ここまで来るとはな」
お兄さんは手品のようにいきなり取り出した双剣を構えた。やっぱりこうなるんだよね。ここはお兄さんの心の中、僕は不法侵入者、だけど負けるわけには絶対に行かない。
「まあ、僕はただ『呼ばれた』から来ただけだよ」
スペルカードを構える。あーあ、英雄相手にこれで勝てとか無理かもしれない、でも勝たなくちゃ。そうじゃなくちゃ来た意味がない。
「『呼んだ』のはあなたなんだ。僕は『応えた』だけ！　あなたは答えを見つけたのにいつまで殻にこもる気さ！」
「私は呼びも隠れもしてないさ」
僕と彼の意地の張り合いが始まった。

――　少女決闘中。

散弾的な弾幕はかわされるだけ、かと言ってスペルカードしょっぱなから打つのもなぁ。そんなことを考える。考えている時間なんてあまりないのだけど、それでも考える時間は欲しい。

「どうした。先ほどまでの気概は何処へ行った?」

切り込んでくる彼をかわして、どうしようかと瞬間、頭の中で考える。彼は上手く身をひねってこちらへ切り込んできた。寸でのところでかわして、バックステップで距離を取る。一撃でも食らったら負けだね、大体これは完ぺきに命のやり取りだ。一瞬嫌な瞬間が浮かんで盛大に頬をひきつらせてしまう。それが彼には余裕と見えたらしく、さらに距離を縮めてきた。

「はぁっ!!」

打ち込んできた彼の双剣をかわした。

「かわすだけでは意味がないのではないかね?」

挑発するようなことを言ってくる。でもさ

「慌てるなんとかは貰いが少ないって言わない?」

軽口で返してみる。すると随分余裕だなとか言って彼が弓を持った。あ、なんかヤバ

イ
「偽・螺旋剣（カラドボルグ・ツー）」
「氷盾『アイシクルイージス』！」
物凄い勢いで飛んできた矢の代わりに設置された剣が神代の盾を模した氷の盾によって防がれる。彼は僕の盾を見て驚いた顔をした。
「なるほど、君も随分の使い手のようだな。遠慮はしないぞ！」
遠慮してもらった方がこっちとしてはうれしいんだけどなぁ。そんなことを考えながら、飛んでくる矢をかわしていく、威力的には低いけど早いのが怖いなぁ。
「赤原猟犬（フルンディング）」
「っ　幻氷『フローズンデコイミラー』！」
自分の身代わりが次々と現れる。その間をすり抜けて僕は自分にできる一番早いスピードで飛んだ。矢が次々と命中していく、身代わりが砕け散って彼へと襲いかかった。
「っ！」
流石に身代わりが砕けて襲ってくるまでは考えなかったらしい。慌てた様子で破片をいなしていく。その隙に僕は彼の背後に回った、よし！
「極氷術『アイシクルエデン』!!」

「なっ」
　丘がすべて氷漬けになっていく、ちょっと呆然とした様子の彼の目の前に僕は着地した。
「チェックメイト、かな？」
「ああ、私の負けだな。それにしてもここまでするか？」
　氷漬けになった丘を見て彼が呆れた。違うって。
「ここまでしないと勝てないの！　僕は普通の人間なんだかｒ」
「そうか？　はぁ、とりあえず負けたな」
　彼はそのまま凍った地面の上に仰向けに寝転がる。
「あれ？」
「え？」
「そら」
「あ」
　彼に言われて空を見てみれば青空が広がっていた。見れば自分の体が透けている。
　あ、帰れるんだ。
「……ありがとうな」
「どういたしまして？」

僕らは笑って別れた。

――　少女覚醒中。

目が覚めれば彼の横に布団がひかれていて、僕はそこに横になっていた。隣にいる彼を見てみれば、同じようにして横になっていた。その目が開かれる。寝ぼけているようで、ぼうっとした表情でこちらを見てきた。

「おはよ」

「おはよう」

まだ寝ぼけているみたいだ。

「もうそろそろ起きたらどうさ。正義の味方さん」

「！　オレは……」

目が覚めたらしい。僕は聞いてみた。

「もう一回いうけど、おはよう。ところでだけどあなたの名前は？」

「……オレはエミヤシロウだ」

「そっか、よろしく　シロウ」

――　青年回復後。

ここは妖怪の山のすぐ近くの河、ここに魔理沙の知り合いがいるらしい。僕とシロウと魔理沙の三人でここへやってきた。
「シロウは早く飛べるようになったら？」
「人間は空を飛べないものではないのかね」
あの後、シロウは何ていうか固っ苦しい口調と素が８：２ぐらいの口調になった。魔理沙が河の近くに立っているボロ小屋の扉を叩いた。
「よー、にとりー」
「どったのさ魔理沙……ってどちら様？」
少しけだるげな声をした誰かが出てきた。水色の髪に緑色のつなぎ、緑色の帽子……某配管工の弟が思いついたけど配色以外は違うよね。
「あ、はじめまして。魔理沙の友人で氷精の娘の明乃です。こっちは最近はいってきた外来人のシロウ」
「おー、あんたが魔理沙の話してた氷精の娘か、あたしは河城　にとり　河童だ。よろしくな。それで何か用事かい？」
「えっと、実はですね。こいつの義腕作れませんか？」

ここに来たのには理由がある。彼女が機械関係のエキスパートであること、それからロボット関係の知識もあるらしい、結局治せなかったシロウの腕の代わりみたいなものを作れないかと依頼しに来たのだ。
「義手は聞いたことあるけど義腕か……よし、面白そうだし乗った！　さーさー入った入った！」
「わわっ」
「少々強引じゃないか?!」
にとりに背中を押されて、中へと入った。

――　少女外出中。

それから一か月後、人里に一店の定食屋が出来た。味も美味いし、それなりに安いのでなかなかの大盛況だそうだ。昼時を少しだけ過ぎた頃に僕は店へと入った。
「こんにちは」
「いらっしゃい、明乃」
髪をおろして、和服を着てすっかり馴染んできたシロウが出迎えてくれた。そう、ここは彼の店だ。義腕は無事に完成して、そのリハビリも兼ねて料理屋を始めたのだ。

「シロウ、何かおすすめある？」
「今の時期なら夏野菜を使った品だな」
「じゃあ、それ」
「わかった」
　元正義の味方は幻想郷にて平和に過ごしています。

サーヴァントステータス

アーチャー
・真名：明乃
・身長：１３６ｃｍ／体重：３１ｋｇ
・属性：中立・善
・イメージカラー：青、もしくはアイスブルー
・特技：家事全般、ツッコミ
・好きなもの：友人・パエリア・家事／苦手なもの：自己中心的な人・世界からの制約
・天敵：チルノ（様々な意味で）・世界
現代的な服装をした「弓兵」のサーヴァント、マスターを性別問わずに「少年」と呼ぶ
略歴
とある世界の本来の『主人公』だったのだが、いわゆる「神様転生」というものをした人々によって性別や外見、思考までも変えられた挙句の果てに世界から『拒絶』され、

世界から姿を消す羽目になったところで、別の神様転生をした人々によって存在だけは救われる。ただし、そのまま世界に存在することはできずに忘れられたものの京「幻想郷」へと入り込んでしまった数奇な運命をたどる少女

幻想郷にて普通に生活してたところ誰かの「呼びかけ」を聞きつけ「応えた」ところ主人公に召喚された。つまり正確には英霊ですらない、唯の「一般人」である

人物

根っからのお人よしでなるべく争わずに済むのであれば争わない平和主義者。ただし怒ると実力行使に走る傾向がある。また他人の命の危機には敏感だが自己への危機管理が薄い、その様はまるで何処かの正義の味方見習いを思わせる。気の置けない仲の人間にだけは毒舌というか躊躇がなくなる

虚数空間に落ちた際にＢＢから囚人服を思わせる白黒の服やニーソとオレンジ色の上着、紫のリボンによる首輪（「Ｉｃｅ　Ｇｉｒｌ」の刺繍付）を強制装着された。本人的には「まあ、どこの誰とは言わないけど見れた格好なだけましでしょ」とのこと

能力

サーヴァントとしては完全に三流であるというのが本人の弁、ステータスは本人の申告通りかなり低い、ただしその代わりにスキルがやたらに豊富、ついでに言うなら思いつきで増えていたりするため実力本体は未知数になる。白兵戦はやや苦手としており、

本人的にはキャスタークラスのほうがあっているのではとのこと

人間関係

・主人公（ＣＣＣ）

マスター。虚数空間に落ちようとした彼／彼女の心の叫びを聞きそれに『応えた』なお、彼／彼女の本来のサーヴァントはバーサーカー（今回のコラボ時には赤いアーチャー）普段は友人のように接するがどこか煙に巻いたような言動をすることもしばしば

・遠坂凛

明乃のほうがエミヤシロウの記憶から一方的に知っている存在。彼女のテンプレや拝金主義などにはあきれつつそれなりに普通に接している

・ラニ＝Ⅷ

完璧に知らない存在、それゆえに普通に接している。ただしあの「露出癖」にはドン引いた。マスターが女子だとＳＧ回収の際にビームを打って録画の邪魔をする

・レオ

個人的にあまりおつきあいしたくない相手、某騎士王のようでありながら全くないなーと言うのが彼女の印象

・ジナコ＝カリギリ
ゲーマー仲間、意外と仲がいい。凡人同盟みたいなの
・ユリウス
割と仲がいい。ハーウェイカレーの一件ではキレた。食べ物を粗末にするなよオイ
・アンデルセン
仲は割とよろしくない。ぶっちゃけて言うなら水と油、性善説と性悪説は相いれないものなのだ
・正義の味方（エミヤシロウ）
彼女曰く彼女が知っている中でも一番のお人よしでバカ、しかし、彼女が彼の話をする際には複雑な感情があると主人公は読み取る

セリフ集
・戦闘開始時：「はぁーあ、勘弁してほしいなぁ」
「マスター、下がっておいて」
「むー」→「それじゃ、開戦と行きますか！」
・通常攻撃：A「やぁっ！」
G「よっと→返すよ」

B「はぁっ」
・チェイン３：A「ていやっ!!」
G「よっと↓反撃！」
B「もらったぁ!!」
・EXTRA：1「コンボ成功っ！」
2「さっすがぁ！」
・戦闘勝利時：「ま、どうにかなったね」（被ダメージ３回以上）
「やるじゃん」（被ダメージ２回以下）
完封「よっしゃ、オールコンプリートっ！」
↓「ま、僕のマスターなら当然だよね！」
ステ　：筋力：E＋＋　耐久：C＋　敏捷：B　魔力：B　幸運：D＋＋＋
スキル：直感：A－　カリスマ（人誑し）：B　弾幕：A
攻撃スキル
氷盾『アイシクルイージス』　MP：５０　アイアスと一緒
殴符『アイスストライク』　MP：１０　ダメージは筋力によるので小ダメージ
氷恋符『フリーズド・スパーク』　MP：４０　魔力依存　ビームぶっぱする

氷星『アイシクルスターダスト』　ＭＰ：６０　魔力依存　ＨＰが一定以下であれば強制終了

氷剣『エクスイカバー』　ＭＰ：３０　ＡとＢを一時的に強化、外見はＡチルのあれ

『永久凍土の氷剣』　ＭＰ：１００　スイカバー使用時のみ使用可能　魔力依存

幻氷『フローズンデコイミラー』　ＭＰ：３０　Ｇに凍傷効果追加、相手にダメージ

想歌『まごころ』　ＭＰ：２０　ＨＰ自動回復効果付与

宝具

『少女ノ遊戯（スペルカードルール）』

一時的にスペルカードルールを展開する。全員の攻撃が弾幕に切り替わる。

ボスもエネミーも自身もみな平等な立ち位置で戦うことになる。対ボスに有効

某凡庸型主人公編　1

――とある厄介な夢を見た。
ある意味、とんでもなく　非現実
ある意味、とんでもなく　超現実
ある意味、どうでもいいほどに　他人事
ある意味、どうでもよくない　自分事
ある意味、完璧に　虚構
ある意味、完璧に　事実
ある意味、これは　人が見た夢
ある意味、これは　蝶の見た夢
……とんでもなく厄介な夢だったことだけは事実だよね。はぁ、これからどうするかなぁ。

――　少女回想中。

誰かが僕を『呼んだ』それだけはよくわかる。それ以外は全く分からない。その声の主は諦めようとしていた。呼んでおいて早々投げ出すとか普通やらないでしょうに。

「助けてって思ったのは君じゃないか！僕を『呼んだ』のは君だろう？　それなのにあきらめるとかどうしてさ?!　あきらめんなよバカァァァァ!!」

思わずそう叫んでいた。つくづく僕はこういうことを喋るお人好しだよね全く。僕の視界は何処までも落ちていく少年の姿を見つけた。どこにでも居そうな…そうクラスで三番目位の人とか言われそうな容姿の少年だ。服装は学ランをイメージしたであろう茶色の制服、何処の制服なんだろう？

彼の手を取ってから僕は告げる。

「はぁ、ようやく見つけた。君が僕を『呼んだ』んだね」

彼は無言で首を傾げる。まあ、そうだよね。多分無意識の中で呼んだんだろうし

「まあいいか、今それどころじゃないし。後で逢おうか、少年」

直感的にこう呼ぶのが吉と見た。少年と呼ばれたことに彼は驚いた顔をする。まあしょうがないよね。

この辺で一回僕の意識はブラックアウトした。

――――　梦　少女覚醒中。

目を醒ませば、そこは僕としてはノスタルジックな木造二階建ての校舎、時代錯誤な服を着た僕には随分と似合わない場所だった。場所は保健室、そこには淡い紫のような色の髪をした長い髪の毛に赤いリボンが特徴的な白衣姿の女の子が居た。彼女に説明を受けてここがどこなのかを嚥下する。サーヴァントって……なんてこったい。サクラ（彼女の名前だ。聞いたら教えてくれた）に事情の説明を一通りされた後で彼女が告げる。

「そういうわけなのでアーチャーさんは二階の一・二年生の教室に待機してもらえますか」

「そう？　了解したよ。彼が起きたらよろしく」

「わかりました」

さて、適当に待機してるとしますか。つくづく暇になるだろうけど。

――――　梦　少年覚醒中。

しばらく経って足音が聞こえてきた。その足音は真っ直ぐとこちらに向かってきて、僕が待機している教室の前で止まって、ガラリと扉を開けた。

「お、来た来た。やほー」

学ラン姿の彼がフレンドリーに挨拶してきた僕に固まる。……失敬な。普通に友好関係築こうとしてるんだからいいじゃないか。
「えっと、アーチャー……だよね」
「そうだけど？」
いきなり確認されるほど僕は違和感の塊かい。
「なんていうか、カラーリングが変わったっていうか」
「あ、それね。サクラちゃんの話だとサーヴァント用の拘束具だってさ。せめてカラーリングくらいはどうにかしてほしかったんだけどねー」
そうだよね。それが拘束具とか勘弁して欲しいなぁ。てか、ここに落とした犯人さんは僕の心を読むことができるのだろうか。それだったら拙いなぁ。色んな意味で　本音がだだ漏れだし。よりにもよって本能（ぼく）の服装とは
「そうなんだ。後もう一ついい？」
「ん？　あーあれか、君の本来のサーヴァントでしょ」
サクラから説明を受けてるから知ってるっていうか知識として持っているっていうべきか、僕は彼の本来のサーヴァントじゃない。てか、僕がサーヴァントとかないわー。彼の本来のサーヴァントはバーサーカーだ。大方彼を拾いに来れなかったのだろうとか憶測が立つけど多分違う。あ、その辺はどうでもいいけど。

「うん、バーサーカーは？」
「うーん、正直僕は知らないんだよね。君に『呼ばれた』だけだしねぇ」
それ以外に何があるってんだから。『呼ばれた』それだけで動くだけの価値はあると僕はみなしてるし。
「『呼ばれた』？」
「ま、君が僕を『呼んだ』んだから、僕は君を助けるよ。それだけの話だね。さて、もうそろそろ生徒会室行ったら？　待ってる人いるんでしょ？」
「あ、ああ」
こうして僕らコンビが結成されたのだった。そうだよね。最初は『呼ばれた』だけだった。

――――　梦　少年少女移動中。

それから後、謎のアリーナ、サクラ迷宮の存在が明らかになって中に入ることになったわけだけど。
「ハァ　ハァ　ハァ」
当然ながらエネミー戦は超苦戦の連続だった。元々弾幕勝負程度の戦闘力しか持ち

合わせていない僕には当然の話だし、身体能力は普段のそれと比べ物にならないくらい落ちてた。ぶっちゃけ言うなら頭ではどうにかしようとしても体が動かない状態だね。これは

「だ、大丈夫か、アーチャー」

「あー大丈夫、大丈夫」

マスターとでも呼ぶべき少年、岸波白野が心配そうに僕を見てる。僕はそれにひらひらと手を返すことで返事した。

そこへ生徒会室から通信が入る。

『低級サーヴァントとは知ってましたがここまでとは』

「低級でサーセン、まあ地道に稼いでいけばどうにかなるでしょ……筋力とかはともかく」

筋力にはあまり期待しないでほしい。ぶっちゃけその辺は紙だし。スキルに期待するしかないなぁこれは。

「本当に大丈夫か？」

「大丈夫だよ。それにしても得物がないのは流石にきついなぁ」

現状は適当に足技みたいなので凌いでるけど、これだけはどうにかしないとなぁ。そうこぼすと彼はすぐにまじめな顔をして反応してくれた。

「戻ったらみんなに相談しよう」
「お、優しいねぇ。少年は」
とりあえずぶっちゃけた話をしよう。あの時は状況が状況だけに色々とキャラが迷子になってた。その辺だけは理解してほしい。サクラ迷宮恐ろしや……そういうわけじゃないんだろうけどね。
「あれ、あそこにいるのって……」
「遠坂凛?」
遠坂凛、シロウの記憶では彼の元マスター、こっちではA級の量子ハッカー、家訓は「遠坂たるもの常に優雅たれ」記憶の彼女は随分と猫かぶりな女の子だったけどこっちの彼女ってどんな子だろう? そんな感じでちょっとわくわくしながら彼女に少年が話しかけるのを見てた。色々と衝撃過ぎた。いや、痛すぎた?
「――月の女王と呼びなさい!!」
「……ついに狂ったか」
「アーチャー?!」
思わずそう言ってしまった。記憶の中の彼女や少年の語る彼女とは大幅に違い過ぎた。否、天元突破している。
ショックで呆けていると今度は狂気の気配がした。そこには赤い髪をして頭に角の

生えた、色々と目立つ服装の女の子が居た。可愛らしい見た目とは裏腹にフランには劣るけど狂気を感じる。来るかと思って警戒しているとなんか漫才みたいなノリで二人は笑いあってる。チャンスとばかりに二人して逃げ出した。

――――　梦　少年少女帰投中。

帰投後、サクラが用意してくれたマイルームへと僕らは足を運んだ。疲れがどっと出てくる。それは少年も同じようでぐってりとしていた。それにしても彼はかなりお人好しだ。疲れてるのに僕にベットを貸すとか。

「疲れた……」

「同じく……とはいえ、マスター　僕なんかにベット貸さなくていいよ？　こっちで寝なよ」

「いい、アーチャー疲れてるだろうし」

お人好しにもほどがあるよね全く。ま、疲れ切ってるのに譲ろうとする僕も僕だけど。

「どうせ僕が寝たところでスペース有り余るから一緒に寝る？」

「うっ……あー、謹んでお断りします」

お、なんか本能と理性のせめぎ合いを見た気がする。
「そう？　ふぁ」
「アーチャー眠いんだろ？　それに実際に戦ってるのはアーチャーだから俺よりも疲れてるだろうし」
紳士な目に僕は負けた。あー、まああそこまでマジな顔されたらしょうがないよね。
「うぅ……しょうがないか、マスター意外と頑固だね」
「それはどうも」
そうして僕は眠りについた。

――――　梦　少女起床中。

生徒会室の扉を開ける。呼び出しのコールがされていない時点で気が付いてたけどまだ生徒会室には誰も居なかった。
「サクラちゃん居る？」
「あ、はい居ますよ。どうかなさいましたか、アーチャーさん」
その辺に居るかなって思って声をかければ案の定サクラはすぐに現れた。
「余ってる資材（リソース）無い？　ぶっちゃけ食材かな」

「食材……ですか？　なんででしょうか？」
まあＡＩである彼女にしてみれば意外な代物だろう。当然それは自覚してた。でも、しょうがないっていうか。
「あはは、もう勝手に体に染みついた癖みたいなものでさ。無い？」
「いいえ、ありますよ。でもどんなものをお探しですか？」
ぱっとサクラは品目名を出してくれた。かなり充実してるところに驚いたよ。
「とりあえず、このツナ缶とマヨネーズ、それからレタスにこっちのパン頼める？　ついでに紅茶とかあるとありがたいかも」
「その程度であればすぐに出せます。でも量はどれくらいですか？」
量とか聞いてくるあたりしっかり者だなぁと感心したけど、そもそも量がわからないと取り出せないことに後で気が付いた。
「二人分で十分だよ。あ、サクラちゃんも食べる？」
「あ、いえ。私は特にそういったものは必要としてませんので」
「そう？　食べたくなったら言ってね」
それらを持ってサクラから借りた空き部屋で調理を開始する僕だった。ここまで設備がそろってないとか、本気でサクラメント貯めて調理器具充実さてたろうかとか妙な野望に燃えた僕だった。

――――　梦　少年覚醒中。

サクラに空き教室のキーを返して出来上がったサンドイッチもどきを部屋へと運べば少年がちょうど起きるところだった。
「あ」
「あ、おはよう　マスター、よく寝れたかい？」
少年は随分と困惑してた。まあそうだよね。いきなりサーヴァントが料理持って入ってくるとか何事って感じだっただろうし。
「う、うん　アーチャーは何をしてたんだ？」
「ああ、朝食作ってた。別に食べなくてもいいんだけどね。何となく作った方がいいかなって」
「そうなんだ……美味しそうだな」
「それはどうもありがとう、ついでに紅茶も淹れてきたから舌火傷しないように注意」
いただきますのしばらく無言の咀嚼タイムとなった。そして食べ終わった後に少年が笑う。
「……ありがとう、アーチャー」

「？　なんかやったかな」
「美味しかったから」
「それはどうも」
そこに生徒会からの呼び出し音がした。じゃあ、行こうかと少年が告げた。

――――　梦　少女探索中。

まあ、それから色々と展開はあった。全部思い出すのは面倒だけど。例えば目の前で男女の絡みを見せられたり（ぶっちゃけ誰得感満載）、あまりにテンプレすぎるツンデレを見たり（同じく、誰得って話だよね。少なくとも俺得じゃないし）、金銭強奪システム相手に「別に倒してしまっても構わないよね。答えは聞いてない」とか言ってしまったり（そこ、中の人違うとかツッコミなしで）、遠坂凛が意外と打てば響くタイプだとか知ったり（普通に彼女S寄りだと思ってた）、まあ色々とあった。
それで壁になってた彼女を救うためにとんでもなく色気のある尼僧さんの助力を借りて心の中に飛び込んで彼女とランサーと勝負した。まあ、いつもながらにギリギリだけどどうにか勝つことができた。ぐあああとかなってる彼女を少年が慰める。すると彼女は正気に戻って言った。

「そうよ、こうしちゃいられないわ。そっちにレオもいるんでしょ。相談しなきゃいけない事があるのよ」

相談？　何故また、急に？　少年が困惑する。

「細かい事はまとめて話すから今は外に――ああいや、此処に留まってた方が安全か」

「無理じゃない？　あの子、多分人の心覗けるみたいだし」

そうじゃなきゃこの服装とかないよね普通。しかも首には紫のリボンで首輪みたいのまでつけやがったし。

「何であんたが知って……ってあんたのサーヴァントってバーサーカーじゃなった？」

「色々あって変更になってるんだ」

「は？　ちょっとま「すとーっぷ、とりあえず　おいでなすったようだねー」

直感が告げる。とんでもないものが来たって、まあそこまで危機感覚えないってことはアレレベルの危機じゃないんだろうけど……つくづく平行世界に毒されてるなぁ。気が付けば元のアリーナに戻っていた。

そこにやってきたのはサクラそっくりな謎の少女、ＢＢだった。大方ブラックブロッサムかなぁとか考える僕は彼の記憶に随分と引きずられてるね。

彼女が色々と申した後、僕らは旧校舎へと飛ばされることになった。遠坂凛は結構青い顔してたけど気丈にふるまって話を進める。

「わたしは今後の展開について話すから、レオは何処に居るの？」
遠坂凛の言葉に少年は二階を指し示す。迷宮探索を助けてくれていたメンバーは、基本的に二階の生徒会室に居る。今後のことを話すならあそこが適しているだろう。
「わかったわ。先に行ってるわね。早く来なさいよ」
生徒会室にはいつもの面々が揃っていた。レオの話によれば、ＢＢの手から離れた遠坂凛は〝月の女王〟の頃に得ていた情報を殆ど失っていた。ＢＢの配下に居る時だけ、外付けのＨＤをつけられたようなものらしい。それでも、ＢＢが自分達を月の裏側に引き込んだ人物であることは間違いないね。容姿が同じ桜からも、何らかの理由で暴走した同型機だという証言も取れたし、正体不明の敵ってことではなくなった。
自分達の目的は変わらない。月の裏側を脱出し、聖杯戦争に復帰する事を目指す。新たな衛士として少年の知り合いらしいラニ＝Ⅷなる人物が立ち塞がる事にまた難関が追加されたけど……ＢＢチャンネルのことは深く考えないことにする。真面目に付き合ったら頭痛がするぞアレはね。こっちにも発言権が来るとか意外だったけど。
無駄に濃い夢／どこかの現実はまだまだ続くのだ。

某凡庸型主人公編　2

ラニ＝Ⅷが核になった迷宮を僕らは駆けた。第一階層は割と普通だった。まあ、主人公力とか普通測らないでしょうにとかツッコミを入れたら無粋だったので言わなかったけど。

そんでもって何故か少年はエロくて胡散臭い尼僧のサーヴァントのところに話を聞きいっていた。サーヴァントの事、聞くことになったらしいけどいくつか質問をしてた少年がふと思いついたように聞いた。

「せっかくだし俺のサーヴァントについて教えて」

「ほう、お前のサーヴァントかどれ、出してみろ。ケツの穴まで観察してやろう」

うん、こういった手合いって面倒なんだよなぁとか考える。まあ、少年のご指名なわけだし？　普通に霊体化を解いたけど。

「ひとこと言わせてよ。マスター　どうもそいつとはそりが合わない気がするんだけど。てか、正直どうあるかを批評される筋合いないし、いい加減にしてほしいなぁ」

僕がそう言えば童話作家は鼻で笑った。

「はんっ、まだ人生を生き切ってないガキがなにを言うかと思えば」
「はぁ、それくらい理解済みだよ。そもそもここに居ること自体が理解不能だし」
　ほーんと何で来たんだろうねと僕は内心つづけた。作家が目を細める。
「ほう、そう来たか。来た理由はお前が一番よく知っているだろうに」
「あ、そう……今更ながらに自分が怖くなったよ。無意識って奴か」
「ふん、それで済ませられるうちはいいな。理性のみで動いてるお前には無意識なんてものは存在しないんじゃないか？」
「それはどうも。てか、この会話の意味ってあるわけ？」
　僕の主張なんて無視していけ好かない作家は少年の方に向き直った。
「そういうわけだ少年、お前のサーヴァントは理性（たてまえ）の塊であり本能（ほんね）は不在の人間染みていない、いやロボットだな」
「人間染みないに関しては否定しないけどロボットは訂正してほしいんだけど」
「はぁ、お前の言動は十分に機械染みてると思うがな」
　へいへい、そーですかーいだ。みんなが居なくて情緒不安定だったんだからしょうがないじゃないか。

――――　梦　少年少女探索中。

ラニ＝Ⅷの二階層にて、僕の服装をどうにかしようかなんて話の後にその階層に来てみればなんとそこには脱衣式開錠扉なるものが設置されていた。コードキャストのための礼装を外すことでフォローしてたんだけどついに三枚目の扉に来てしまったのだった。

『ぱんつ　はかせ　ない』

なんと言う衝撃発言だろうか、少年は驚愕で目が丸くなっている。うん、ここまで行くと痴女の域っていうべきじゃないのかな。ノーパン主義の人っているんだ。意識が遠くなっている間に少年の表情は覚悟を決めたような顔になっていた。

「あの、アーチャー　できれば向こう向いててほしいんだけど」

「りょうかーい、ついでにデバカメ妨害しておくよ」

スキルには入っていなかったものの、何故か使えるスペルカードを発動させることにした。

「霧符『霧を歩く者《ミストウォーカー》』」

僕を中心とした半径１５ｍに霧が発生する。いつかの時に外見が大幅に違うチルノに教えてもらったスペルの一つだ。霧は僕が作り出したものなので熱源察知にも使える代物だ。

『ちょ、アーチャー何やってるのよ?!』
『せっかくの録画のチャンスが!?』
「人のマスター晒し者にしないでよ。はぁ」
がさごそと音がして少年が僕のことを呼んだ。どうやら脱ぎ終わったらしい。
「もう大丈夫?」
「あ……うん」
まあそうだよね。流石に下着付けないとかないわーってなるか。解放感は凄まじいわけですが。
その後、少年は無事にＳＧをゲット『露出癖』……確かにこれはＳＧだ。

――――　梦　少年少女探索中。

ラニ＝Ⅷの三階層にて、謎の放送ＢＢちゃんねるのせいで発言機能が上手くいかなくなった。即座にじゃんけんの組み合わせでバトル時の指示は出来るようになったんだけど、それでも色々とマズイ状況は続くわけで、マスターはなんかどんくさいらしくトラップに嵌りまくっていた。
「――っ!!」

「……」

もうそろそろ我慢の現界っていうべきか、これ足を置いたところにトラップがある仕組みみたいだしさ。

「?!」

抱きかかえりゃよくね？　そう判断した僕は少年を抱きかかえたのだった。当然驚かれるけど抗議の声は聞こえない、てか口がパクパク動くだけだし。筋力は相変わらずだけど人間一人くらいは抱えられるようになったらしい。ちなみに抱きかかえたままトラップが発動しない程度に浮いている。トラップ地帯を抜けるまで抱きかかえたままで進んだ僕だった。エネミー戦はスキルとして登録された「弾幕」で全部することにした。この攻撃、魔力依存だし。

――――　梦　少年少女勝負中。

さて、ラニ＝Ⅷの三階層も大詰め。ラニ＝Ⅷがチェス勝負で全戦全勝して無双しているところにジナコが麻雀勝負を持ち込んだ。運勝負に絶対はないって思うんだけど。

「ふぁー、暇」

「アーチャー少しは緊張感持って」

少年に注意された。でも勝敗はもう完璧に決まりきってるんじゃないのかな。
「しょうがないじゃないか。あれって勝ち負け決まったもんだし」
「そうなのか？」
「うん、さーて暇だし……花札でもする？」
僕は服のポケットから花の描かれた小さな箱を取り出した。なんでこんなのマイルームに無造作に置かれてたんだろうなぁ？
「なんでだ？」
「マイルーム整備してたらちょうどよく暇つぶし用の花札発見したから」
「そうなのか……とはいえ俺あんまりそういったのに明るくないんだが」
「大丈夫だよ。僕も僕で全戦全敗するほど弱いし」
ちなみに相手はシロウと霊夢、二人はめちゃくちゃに強いんだよね。軽い気持ちでおやつを作る担当決めようと勝負したところボロ負け、最終的にはおやつ作る担当になってたってのは閑話休題。
「よ、弱いな。でもラニとのチェス勝負はかなりいい線いってたってラニが」
「まあね。５００年も暇つぶしのためにチェスやってる子とチェス勝負するようになればおのずと強くなるさ」
レミリアとパチェリーさん相手にチェスやってればどうにかなってくるものだよね。

ちなみにこの前ようやくレミリアに勝てたはず。

――――　梦　少年少女帰投中。

とりあえず状況はこうだった。最終地点にどうにか辿りつけたのはよかったのだけど、そこにはＢＢから派生したらしい分身（アルターエゴ）が居た。もともとそうだけど実力差なんて分かりきっている。見逃される形でどうにか旧校舎まで逃げだしたのだった。

「すう、すう」

全員に疲労の色が見えたので休憩しようという話になってマイルームへと戻る。すると少年はすぐに普段使っているマットレスに横になって眠ってしまった。よっぽど疲れてたらしい。

「こんなとこで寝たら風邪ひくよ。はぁ」

少年を抱き上げてベットの方に移動させた僕なのだった。疲れてるのに無茶しないでほしかったなぁ。

――――　梦　少年少女探索中。

とりあえず一言、少年は割とオープンスケベのようだ。まあ、ある意味そっちの方が楽っちゃ楽だよね。主に変態かどうか見分けるって点において。

『アーチャー、あんたあのセクハラ発言になんとも思わないわけ？』

『ええ、間近で聞かされていたのに嫌悪感すら示さないのはどうしてでしょうか』

通信を挟んで生徒会室に居る面々と連絡を取る。なんでセクハラ発言とか気にしないかって？

「えー、そりゃ……ペドよりましじゃん」

『『……』』

そういう生き物が寄りつくような外見ですみませんでしたね。それに比べたら少年のあれは割と普通な高校生男子にありがちな奴だと思うんだけどなぁ。別に気にしないし。女の子って潔癖症が多いみたいだ。

――――　梦　少年少女探索中。

「え、えっと　キシナミさんにとって恋人に必要な条件って何ですか」

「あー、料理とか？」

それは普通だよね。てか、一番重要事項。その後も少年はつらつらと日常に必要なス

キルについて挙げていく。アルターエゴ、パッションリップはその答えを聞いて青くなった。

かわいそうに思った少年が特技を聞いてみれば、砕くとか潰すとか、なんと座右の銘は一撃必殺とのこと……随分と見た目に反して武道派な女の子だった。あと雰囲気的な問題だったわけだけど、悪い意味で子どもっぽい気がした。世界は自分を中心に回っていると思うほどにわがままな子ども、それが彼女の印象だった。彼女が去ってから少年が呟く。

「今考えたけどアーチャーって結構家庭的だよな」

「そう？　普通でしょ」

「そうか？」

――――　梦　少年説得中。

少年は会長発案の「恋人作戦」のためにジナコを説得する羽目になったのだった。ネーミングからしておかしいっていうべきか、戦闘経験全くなさそうなジナコにこの大役が務まるなんて思わないんだけどなぁ。ま、僕のツッコミは全くもって外になんて出るわけないので、少年のループ問答……否、高度な説得術でジナコは説得されたのだっ

た。一旦作戦前にマイルームに寄った。少年が地道にタイガークエストを処理しているのでインテリアが少し増えてきた。全体的に青を基調とした感じになってきているのは個人的に嬉しいなぁ。
「そういえばだけどさ。マスター」
「どうかしたのか？　アーチャー」
　僕が呼びかければ少年は答えてくれる。つくづく少年はお人好しだよね。
「マスター的に良いの？　恋人作戦って」
「？　どういうことだ」
　少年は首を傾げた。意図が伝わりにくかったらしい。慌てて僕は訂正を入れた。
「あ、ごめんごめん。恋人でもないのに恋人のふりとか良いのってこと」
「まあ、作戦じゃあしょうがないだろうし……でもやるんだったらアーチャーがよかった」
　まさか真顔で言われるとは思わなかったよ。
「へ？　それはどうも、お世辞でも嬉しいね」
「お世辞じゃないんだけど」
　そこまで小声だと伝わらないぞ少年。

――――　梦　少年少女決戦中。

恋に溺れた彼女はついに恋によって身を破滅へと導いてしまった。岸波白野（おうじさま）から拒絶された彼女は石になって壁となって立ちふさがった。またもやエロ尼僧の助力を借りて人の心の中に入ることとなったのだ。ついには彼女は少年の言葉も受け取れなくなる。襲いかかってくる彼女の爪を僕は少年の指示でいなしていく。

「……はっ！」

僕は自身の得物である鉄バット（遠坂凛にとりあえずで作ってもらった即席武器、結構気に入ってる）で少年の指示通りに攻撃を彼女、パッションリップに叩きこむ。少しづつでもパッションリップにはダメージがあるようだ。

「アーチャー！」

「氷星『アイシクル・スターダスト』!!」

星を模した弾幕がパッションリップに襲いかかった。攻撃をよけきれなかったらしくパッションリップが倒れる。勝った！　僕は内心よろこぶ。　パッションリップの体がノイズに塗れていく。そう、遠坂凛やラニ＝Ⅷの時とは違う、彼女はアルターエゴ、人間ではなくＡＩだ。そして完全な敵でもある。

「少年、君の好きなようにするがいいさ。彼女の心を砕くも見守るも君次第だし」

「……」

少年は彼女に歩み寄っていった。その時、本体から発する闇に少年は飲まれる。少年は心を砕く方を選んだようだ。

――――　梦　少年少女驚愕中。

次の階層の衛士には少し頭を抱えたくなった。まさかの恋人作戦の際に色々あってはぐれたジナコだったのだ。どうやらＢＢに捕まったらしい。毎度恒例な気もしなくはないＢＢチャンネルも終わり、とりあえずやるべきは迷宮探索だろうって話になり少年と僕は迷宮へと向かうこととなったのだ。その前に購買部の店員に声をかけられたわけだけど。

「新商品？」

「ああ、小物などで稼いでいくにはどうしても限度があるのでね。サクラ君に頼んでサーヴァント用の普段着を用意させてもらったよ」

おお、普段着とか用意できるんだ。あ、そういえばサーヴァント時の衣装に関しては普段通りの水色パーカーに水色と白のストライプの長そでシャツ、短パン、水色と白のストライプのニーソと完璧に色違いとしか言えない代物だった。

「じゃあ『青色の現代衣装』ください」
「温めますか？」
どうやって?!　僕がツッコミを入れたのは悪くない。でも、ここで絶叫するわけにもいかずツッコミは無いにも等しいことになってしまった。
すぐにマイルームに取って返すこととなって着替えてほしいとわくわくしたような表情で見られたのでもう断りきれずに着替えることとなった。
「……これは」
渡されたのはどう見てもセーラー服（水兵の方のあれ）だ。しかもご丁寧に短パン……何で幻想郷にこれなかったんだろう。そう思ってしまうような代物だ。まあつまり気に入るタイプの服だったってことで。
「着替えたよ」
「あ、結構似合うな」
でしょーなんて笑うのはしないで少しだけ嬉しそうにはにかむ僕だった。

――――　梦　少女清掃中。

ミッションとかＳＧ回収の合間を縫って僕はマイルームの清掃にいそしんでいた。

ちなみに少年は居ない。上手いこと言って部屋から出したのだ。今頃は生徒会の面々とお茶会の真っ最中だろう。

「あー、もういい加減にしろよ！　ゆっくり掃除する時間くらいよこせやこんにゃろー！　調理道具もなかなか充実しないし……いっそ、シロウに……はっ、邪念が入った。とりあえずマスター返ってくる前に掃除終わらせないと」

僕はマスターが帰る前にと何故か焦っていた。理由はよくわからないけど。部屋の扉の前でコトンと音がした。少年が帰ってきた？　僕がそろっと部屋の扉を開ければそこには何故かマグにホットミルクが入っていた。

「……なんでさ、はっ　まさかのブラウニー?!」

そうとしか言いようがない気がする。ま、そうなる原因はこっちにもあるだろうけど。ちなみに少年はその頃、僕のＳＧをゲットしてたそうな。

――――　梦　少年少女傷心中。

ガトーがジナコの最後のＳＧのために死んでしまった。いや、正確に言ったら死んでいるのにまた死んだ……その事実は僕にも少年にも深くのしかかっていた。

「……アーチャー」

「なにかなマスター？」
淡々としたやり取りが続く。少年は傷心しきってしまったようだ。僕はと言えばあったことを整理するためなのか、それとも頭では理解できていても感情が追いつかない状態なのか終始ぼうっとしてる。
「明日は最終決戦だな」
「……そうだね。終わる……いや、終わらせよう。マスター」
「ああ」

――――　梦　少年少女敗北後。

結果だけを言えば岸波白野とそのサーヴァント、アーチャーの二人……いや、生徒会は敗北した。衛士ジナコを破り、奥へと進めばそこには掘削作業中の部屋、そこで起こるＢＢとの戦い。乱入する緑衣のアーチャー、会長が騎士を伴ってＢＢとの直接対決をした。ＢＢのスキルによって会長は敗北、騎士もその場から姿を消した。これで残るは少年と僕という弱小マスターとサーヴァントコンビ、これもあっけなくＢＢの手に落ちることとなった。
……それでも希望は無くならないものらしい。

長い夢／短い現実の中盤戦。まだまだ逆転は可能だよ？

某凡庸型主人公編　3

　０と１で疑似的に作り上げられた心象風景の中で僕はため息をついた。
「はぁ、こうも面倒な状況になるとはなぁ……ＢＢマジで許さん」
　そう、本能（ボク）は今回全くもって表側に出れない状態に陥らされたのだ。おかげで色々と『僕』が人間染みなくなってきてるし、もう……全部ＢＢのせいだ。
「てか、少年も遅いなぁ。そうだ。令呪のパスを使えば視覚って共有できるはず」
　今更だけどそれに気が付いた僕は令呪を通して少年の状況を確認する。
「……なにこの真っ暗空間」
　慌てて聴覚情報も手に入れられるように調整すればＢＢの高笑いが聞こえた。あー
「犬空間って……拷問だな」
　確かそんな拷問があったはず。
「さて、少年待つか……この状況、打破するなら。少年の協力必須だろうし」
　不本意な心象風景にて僕は待機した。

――――　心　本能待機中。

しばらくして、少年がやってきた。ちょっとばかし傷付いちゃいるけどどうにかなったらしい。
「あ、来た来た。少年！」
「え、アーチャー……？」
僕の姿を視て固まった。まあ、当然の反応だよね。分かりきってたし。
「んー、そうであってそうでないともいえるけど、一応それでいいよー」
「あのさ、ここどこなんだ？」
少年は僕に詰問をする。それを静止して僕は告げた。
「話は歩きながらしよう。面倒だし、とっとと助けたいし」
「助ける？」
少年が首を傾げた。
「ほれ」
僕が指差す先にあったのは。
「アーチャー？！」
「な？」

そう、理性(ぼく)だ。もしくは『僕ら』を構成する最もたる存在と言ってもいい。
「なんでアーチャーがあんな状態なんだ?!　それに君は一体」
「だから歩きながら話そうぜ。少年」
僕は彼の手を無理やり取って先へと進んだ。

――――　心　少年本能移動中。

歩きながら少年へと説明を始める。ま、今はふざけてらんないからなぁ。少年結構からかいがいがありそうだけど。
「とりあえず説明な。ここはあんたが知っているアーチャーの心の中とか思ってくれればいい。僕はその本能であっちでレリーフ状態ていうか、引きこもってるっていうべき状態なのが理性の方」
「え、えっとつまり君はアーチャーの本能で向こうのアーチャーが俺の知っている方のアーチャー?」
それが一番正しい。本能(ボク)は傍から見ているに過ぎない存在だからね。ぶっちゃけアルターエゴと似たり寄ったりだし。
「まあそんなとこ、デリートされかかったもんだから、あんたの所に戻るために布石とし

て自分を凍らせたんだ。僕の氷には0と1は効かないからね。それにデリートされかかったのは理性だけだから自分の身さえ守ればどうにかなるって思ったんでしょ。その辺が相変わらずっていうべきだよねー」

僕がいい加減にしろよって言いたくなるよーとか言うと少年は驚いた顔をした。

「え、アーチャーってそういうことするタイプなのか？　なんていうかアーチャーらしくないっていうか」

ま、見ているのが建前だけなんだからしょうがないか。建前だとあんまり素直じゃないし。

「あー、ぶっちゃけいうけど君さ。本当の『僕』に遭遇してないからそんなこと言えるんだよ。基本的に他人のためなら自分を削れるお人よしだぜ？　君が知っているのは理性だけ、どこかの童話作家も言ってただろう？　理性だけで本能のないロボットって……しょうがねーだろうが、こっちに引き込まれた時点でこうなっちまったんだからよー」

ほんと、こっちに引きずり込まれなきゃもっとましだったのにな。

「何かあったのか？」

「ま、一言でいうならこっちも引きずり込まれたといえば終わるか？」

ＢＢに性能の一部を書き換えられた挙句の果てに放置されたし。

「そ、そうだったのか」
「さて、少年。ここからが正念場だ」
やっぱりか、僕がここに助けに行けなかったのはこれが理由だしなぁ。
「え？　痛っ」
「はぁ、やぁぁっぱいたのかよ」
「……」
そこには理性（ぼく）よりは少し身長が高めで、本能（ボク）よりは身長の低めの少女が居た。特徴はなんといっても無駄にだぼっとした黒い長そでシャツと顔を除く肌の見える部分全てに巻かれた包帯だろう。手にはスペルカード、あいつ、本気で追い払う気か。
「えっと、彼女は誰？」
「ま、分身（クォーター）とでも思うが吉、僕ら以外あいつしかいないけど　そんなわけで少年、SGさくっと回収して次に進むぞ」
「えええええ?!」
少年が再度驚愕した。

――――　心　少年本能対峙中。

「というよりもなんでクォーターがいるんだ？　あれはＢＢの作ったシステムだろう？」

あいつと対峙している少年は僕に耳打ちをした。

「まあ、そこはバッキバキに屈折しちまった『僕』に文句を言うんだな。少年は某携帯獣しってるか？」

少年はちょっと考えてから答える。

「えっと、１９９０年代に流行りだしたゲーム？」

「お、意外と知ってるんだな。それの合金のやつ　ほら、北海道をモデルにした」

商品名は会話からご想像ください。

「えっと、あ　なんとなくわかった」

「あれに出てくるネットで三湖なんて呼ばれるやつ、あれは確か感情と決意と英知を象徴するんだよ。それが人間の感情を構成したとまあそんな感じだな。僕は感情、あそこにいる奴はひねちゃいるが決意を、そんでもってあそこで眠っているのは英知を……こう考えれば『僕』という一人の人格を形成してるのが僕ら三人ってわけ」

「な、なるほど？」

壮大すぎてついていけねーよなそりゃそうだ。僕もここまで理解しきるのにかなりかかった。

「さーて、僕の口からＳＧ言うわけにもいかないんで考察よろしく」
「ええっ?!」
僕は少年をあいつの前に蹴り飛ばした。
「い、いたた」
「……誰?」
少年が痛みを抑えながら立ち上がろうとする前にあいつは少年を覗き込む。
「えっと、俺は」
少年が答えようとする前にあいつの目はどこぞの吸血令嬢のごとき目に変わってヒステリッキー叫びだす。
「来るな」
「え?」
少年が困惑する。ま、そうだよねー。
「くるなくるなくるなくるなくるなくるな」
「アー……チャー?」
呆然とする少年にあいつは言った。
「どーせ、君も『世界』とおんなじようにわたしを捨てるんでしょう。だったら最初から来るな来るな来るな」

「……」
　少年が言われた言葉を理解しようとしている間にあいつは少年の顔色を見て弁解し始めた。いつもながらに歪んでるよなー。あいつ
「あ、嘘だよ。わたし本当にそう思ってるわけじゃないんだよ？　お願いだから捨てないでお願いお願いお願いお願いお願いだからっ!!」
　その叫びを聞いて少年は納得した表情となる。ま、結構わかりやすい奴だからなぁ。
「……アーチャー、そんなわけないだろ？　君は俺のサーヴァントで、大切な戦友で……これ以上にないくらい大切な存在だよ。そんなアーチャーを捨てる？　そんなことするわけないじゃないか」
　真剣な目であいつを見る。あーあ、これだから一級フラグ建築士は。
「……本当に？　君はわたしのことを拒絶しない？」
「もちろん」
　少年は笑った。あいつはほっとした顔になる。
「……そっか…ありがとう、君の気持ちよく伝わったよ。口先だけじゃなくって本当に伝わったよ。そっか、拒絶されないんだ……よかったぁ」
　微笑んであいつは消えた。少年は回収したらしいＳＧを見て驚いた。
「……『拒絶恐怖症』？」

「お、近い　てか正解にするか。さーて、君を拒む壁は無くなったぞ少年！　このまま眠りについた茨姫を起こすとしようか」
少年を引きずって進めばもうレリーフはそこだった。

――――　心　少年本能移動中。

「着いた」
「着いたな。ここまで攻撃一切なし、やっぱSG手に入れといて正解か」
正直に言えばあいつが電子空間に書き換えられたここのセキュリティーだからなぁ。
「そこまでです。この先は、最後のファイヤーウォール。絶対に進ませません」
後ろを振り返れば、BBとその傍らに攻性プログラムが現れた。たく人の心に土足で踏み入るなよな。
「せっかく封印したサーブァントを解放されてはたまりませんから。貴方を、ここで排除します」
BBがこちらを睨みつけて、指を指す。あの目は本気の目だ。どうやら、BBは本気でこちらを排除しようとしているようだった。その証拠に、攻性プログラムもまだかまだかと、待ちかまえている。

そして、ＢＢが攻性プログラムに指示を出す。それと同時に、攻性プログラムが少年へ向かって突撃してきた。

一閃、それを僕が押し返す。得物はどこぞの花畑の妖怪から貰った日傘だ。ぶん殴ってもびくともしないとか、流石だよね。

「はぁ、僕までがサーヴァントの真似事する羽目になるとは」

「っ!?なぜあなたが邪魔を?!その人を野放しにすることは、貴方にとって自殺行為の筈でしょう!?」

「は？　何言ってんだか。ようやく元に戻れんだよ。こんな大チャンス逃すわけがない！」

目線はＢＢに向けたまま僕は少年へと告げた。

「少年！　後ろを向かないで前を向きな!!　理性(ぼく)の解放をよろしく」

「っ！　分かった!!」

ダッと少年が走り出す音がした。相変わらず攻撃を仕掛ける攻性プログラムを僕はいなし続けた。

――――　心　少女解放中。

「来てくれ、アーチャーっ!!」
――　誰かの呼ぶ声がした。それは久方ぶりに向けられた『僕』への呼びかけ。
『応え』ようとするけど体が動かない。ああ、もう何でだよっ!!
どうにか動こうとすれば周囲の視界に罅が入る。
刹那　何かが砕け散る音がした。
――　ああ、そっか　色々あり過ぎだけど　まあ、出来ることは一つだね。
「君の『呼ぶ』声、ばっちり聞こえたよ。マスター」
――　目の前には驚愕で目を見開く不器用な女の子、
でも、まあそれでフォローできないくらいにやり過ぎだけど
「犬空間とか、ふふっ。ＢＢこんにゃろーてめーぶちのめすよ☆」
「あ、アーチャー?!」
――　マスターは驚いて目を見張っていた。
そういえばここまで露骨な敵意表明ってサーヴァント始めてからは初だよね。
「はー、そうだよね。感情あってこその人間だし、一般人はこうでなくっちゃ……そういうわけでなくしものも見つけたことだし。負ける気がしないね！」
何かが消滅する音、見れば攻性プログラムが消えていた。
「はぁーようやくかい。これで傍観者に戻れるよ。頑張れよー」

――　本能はにやっと笑いながら手を振ってきた。また他人事みたいにぃ

「事実他人事だ。さて、攻性プログラムもう一体来たぞ」

「げ、マジか……マスター、準備はいいかい？」

「ああ、大丈夫だ。アーチャー」

「そう、それから完全復帰祝いに宝具……みたいなの解放するよ。タイミングはマスターに任せた!!」

さあ、ここからが反撃戦さ！

その先にあるのが暗い未来か明るい未来かはまだ未知数だけどね。

某凡庸型主人公編　4

どうにかこうにか旧校舎に戻った僕と少年は無事だった面々と再会を喜んだ後、マイルームに向かった。少年怪我自体は少なかったけどあそこに居た時点で色々とヤバかったからなぁ。あいつだけは止めておいて正解だったね。

「ま、とりあえずいろんな意味でお疲れ様、マスター」

ベットに倒れるようにして眠った少年に僕は毛布を掛けた。

「……ふぅ、疲れたなぁ」

僕はベットの端に腰を下ろす。そして少年の顔を見ながら呟いた。

「ここは夢かもしれない、もしかしたら現実なのかもしれない。いずれにしても僕は君の声に『応えた』これは事実だし、『君を表側に返す』これはさっき決めた……どう考えたってさみしがってるだろうしなぁ。アイツ」

パス越しに誰が『本当の』サーヴァントだったのかを知った。ようやく納得したよ。なんたって僕がアーチャークラスで呼ばれたのかとか、弾幕だけならそれでもありかなって思ったけど使ってるものの部類としてキャスタークラスが順当なのにね。

「マスターはほんっとアイツとは相性ばっちりだね」
　さて、帰りを待っている正義の味方のためにも頑張りますか。僕はそう決意した。僕もそう思った。

――――　梦　少女起床中。

　次の日の朝、まだ眠っている少年を放って置いて生徒会室に向かった。
「こんにちはー、サクラちゃんいる？」
「あ、アーチャーさん。おはようございます」
　何時もの通りサクラが居た。普段だったら居ない生徒会の面々も居る。あー、やっぱ会長の抜けた穴は大きいのか。
「うん、おはよう」
「あら、アーチャー　あなただけ？」
「ミスターキシナミは起きていないのですか」
　二人が不思議そうにした。まあ、当然だよね普段は鉢合わせない時間帯に食材取りに来てるし。
「まあね、まだ修復に時間かかるみたいだし。いつもの頼める？」

「あ、はい　今日は何を使いますか？」
「うーん、どうもマンネリ化しそうで怖いんだよねー。キッチンあればいいのに、せめてコンロとフライパン」
　僕がそんな話をしていると二人は驚く。
「えっと、何の話してるの？」
「コンロとフライパンでしたらリソースさえ頂ければ作りますが」
　ラニ＝Ⅷの一言に僕が反応した。嬉しいなぁ。ここに来るまでずっと探したりしたんだけどずっと見つからないし。
「あ、ホント?!　さっすがラニちゃんだね。頼める？」
「はい、しかしマイルームに置くには少々容量が足りなくなるかと」
　あちゃぁ、しょうがないのかな。てか料理の臭いで目が覚めるとか贅沢だと思うんだけど。
「あ、だったらここで作っていい？　別に引火さえ気にしなきゃ大丈夫でしょ」
「だったらＩＨにしたら？　あれだったら気にしなくて大丈夫でしょ」
　ＩＨって今この世界にもあるんだ。とはいえ個人的にはキッチン欲しいなぁ。できればシステムキッチン位の性能は要求したいけど無理なのなんて分かってるからせめて水道とコンロこれが欲しい。

「うーん、火力がなぁ。ま、安全面のほうが重要か。じゃあそれでお願い。サクラちゃん、今日は卵とベーコンとトーストとバター……うーん、後は簡単（インスタント）でもいいからコーヒー。あ、紅茶はマイルームにあるやつ持ってきたから気にしないで」
僕だけなんだよねー。紅茶派、てかコーヒー苦くて飲めないんだよね。ミルク入れてカフェオレにするか砂糖たっぷりのカプチーノにしないと飲めないし。
「わかりました。コーヒーなら私が作りますよ」
「あー……じゃ、よろしく」
僕が頼んだらサクラは嬉しそうに笑った。
「はい」

――――　梦　少年起床中。

調理をしていると生徒会室の扉が開く。
「……おはよう、アーチャーいる？」
少年だ。どうやら僕を探しに来たらしい。
「あ、岸波君おはよう」
「おはようございます」

「あ、おはよう、マスター」
「おはようございます。センパイ」
教室に居た全員が挨拶をした。僕が料理しているのを見ると少年が目を丸くした。
あー、料理姿って見せるのはじめてだったり？
「アーチャー、こっちで作ってたのか？」
「まあね、たまには豪華でもいいじゃないか」
そう言いながら一番よく焼けたベーコンが入ったベーコンエッグを少年の前に出す。我ながら完璧な半熟具合だよねー。少しだけ濃い目に焼いたトーストも一緒だ。サクラがその横にコーヒーを準備した。
「あれ？　もしかして岸波君いつもアーチャーにご飯作ってもらってたの？」
「うん、毎朝一緒に食べてるけど」
「そうなんだ。それにしても、おいしそう」
「それについては同意します。ここまでの料理技術とは」
「はい、今日は珍しくモーニングプレートだよ。デザートは時間的に無理だから勘弁してね」
そう言って五人分の食事を全部テーブルに並べた。そしてサクラに声をかけて彼女の分の椅子を引く。

「え、私もですか？」
「え？　なんでさ。普通にあるにきまってるじゃないか。生徒会の仲間でしょう」
「そうだぞ。サクラ、サクラも生徒会の一員なんだから」
「そ、そんな」
　リソースの無駄遣いですよとサクラは慌てる。僕はちょっとムッとしたのですぐに反論した。
「はいはい、サクラちゃんは人ががんばって作ったものをむげにするような子だっけ？」
「うっ、その言い方なんだかずるいです」
「まあ、みんなで食べよう」
　全員が食事の前に着く。作業に関しては一旦中止だ。
「はい、せーの！」
「「いただきます」」
　本日の朝食はちょっと賑やかだった。ま、その後のＢＢちゃんねるがああなるとか思いもしなかったけどね。まさかの三分クッキングが残り物って……いや、残り物は残り物でも残りサーヴァントだったとは。

――――　梦　少年少女探索中。

とりあえず吸血魔嬢の領域にやってくれば待ち構えている彼女とワカメが居た。ちょっと少年と会話してたんだけど何故だか子どもの喧嘩みたいなのを始めるし。僕は飽きて感想をぼそりと言った。

「……まあ一言、マトウシンジはどこでもマトウシンジでした。あー、でも下種じゃないだけまだマシ？」

「アーチャー、慎二を知ってるのか」

知っているのは似て非なる平行世界の存在だけだよ。ま、そんなこと言ったところで伝わらないのでスルーするけど。

「ま、とりあえず。糞爺に脅されてかわいい義妹を苛めるような下種はしってるよ。ま、あれもあれで環境さえよければどうにかなったのかな？」

あ、ＢＢ混ざった。これにしても早く終わらないかなぁ？

「ちょっと、そこ!!　なにこそこそ話してるのよ」

「あーごめんね。そっちが話してるようだしＢＢも交じってまだまだ続きそうだから空気を読んだつもりなんだけど？　あー、もしかして読まないで攻撃とかしたほうがよかった？　こっちに注意向けてもらうにはそれはそれでちょうどいいよねー」

ちょ、流石に暴走してるって……はぁ、素はこんな子じゃないのに。ＢＢ相手だから

かなぁ。
「なあキシナミ、お前のサーヴァントなんか変わった？」
「まあ、頼もしくなった。当然だろ」
　ワカメと少年がそんな会話をしていた。それを聞いた僕が笑う。
「お、嬉しいこと言ってくれるねぇ。マスター」
「はーい、マスターとサーヴァントもいちゃつくの禁止です!!」
　ＢＢはいきなりビームを撃ってきた。単なる嫉妬だよね。そんな攻撃は氷盾『アイシクルイージス』で防御するわけですが。
「おっと、ひゅー　怖い怖い」
「さくっと防御できてるあたりお前のサーヴァント優秀なんだな」
「当然。アーチャー、その辺にしておいたほうが」
「んー、了解」
　僕らが黙れば吸血魔嬢とワカメは姿を消した。そしていきなり雑魚が大量発生する。
『多少手間取りそうではありますが』
『所詮は小物の寄せ集め、今のあんたたちを止めることはできない……でしょ？』
　生徒会室の二人が僕らに語りかけた。それを聞いて僕と少年は笑う。
「とーぜん、こんなところで止まっていられるほど僕らは弱くないよね。マスター準備

はいいかい？」
「ああ、もちろんだ」

――――　梦　少年少女探索中。

エネミーがぎっしりと詰まっている坂とか結構嫌な配置だけど、レベ上げのこと考えたらありかーとか軽い調子で考えた。最悪弾幕とかスペルもあるし頑張らせてもらいますかと僕は気合を入れなおして先へと進んだ。
「登り切ったな」
「だねー」
結構いい感じに経験値たまりそうなエリアだったなぁとかゲーム好きな僕の思考回路はそんな感じで考える。まあ、ここゲームじゃないんだけどね。そこにワカメから通信が入る。
『こんな程度で止められるなんて思ってないよ。でも最後に勝ったほうが勝ちなんだ』
「その言葉そっくりそのまま返すよ。ウチのマスターがそんな軟だとか思わないほうがいいよ？」
少年の目には決意があった。うん、こうなんかじりじりと焼かれる感じがかっこい

い。でも、僕にはそれ以上に気になる点があったらしい。
「……なんかやばい感じが一瞬したけど気のせい気のせい」
「アーチャー？」
少年は首をかしげた。多分、また女の子に絡まれるぞ少年。

――――　梦　少年少女帰投中。

ぶっちゃけて言おう、少年はどこぞの正義の味方張りに女難の相があったらしい。吸血魔嬢を骨抜きに（多分不可抗力、あそこまでちょろいのって中々いないはず）、アルターエゴから求愛（まあ、予想の範疇。ただし、彼女に関しては妙に悪寒が走る）、うん彼よりひどいかも。
「何で俺にばかり」
「あはは、お疲れ様、モテる男の子は辛いねー。お茶はいったよ」
僕は少年にお茶の入った湯呑を渡す。何というかこのままだべる気満々らしい。
「アーチャーは気が楽っていうかなんというか……」
「うん、これに関しては何とも言いようがないっていうか。見事に女の子ひっかけたねー。まあ、男も誑しこんでるんだし。どっちかっていうか人誑しの気が強いかな？」

思い出されるのはどこかの平行世界の彼、あれはあれで凄かった。人誑し…ＥＸくらいはありそうだよなぁ、というよりはあるのだろうな多分、彼をサーヴァントにしたら多分ハイ・サーヴァントと同格かもしくはそれ以上か。

「はぁ、好きでやってるわけじゃないんだけど」

「分かってるって。でも、君のこと見てると、こう……協力したいっていう感じになるっていうかさ。多分、人柄がそうさせるんだよ。さしずめ、カリスマＢランクってところかな？　かの騎士王もそれくらいだったらしいし凄いと思うけど」

僕が少年を褒めると少年は顔を少しだけ赤くする。

「そうなのか……ところでなんだがアーチャー、これを見てほしい」

「へぇ、ステータス？　ふむふむ、直感がＢ、弾幕がＡ、カリスマがＢ……カリスマ？」

僕が固まった。うん、こっちもちょっと固まりかかったよ。カリスマ……カリスマと来たか。流石に無いでしょそれ……っていうよりもアーチャー固有能力の単独行動ないし。

「ああ、この前解放されたスキルなんだけど……」

「いやいやいやいや、僕が?!」

だよねー。何回見直してもカリスマはカリスマのままだった。戦闘の役に立つのそれ？

――――　梦　少年少女食事中。

赤い赤いボロネーゼがそこにある。直感と本能が告げる。これは姉や母が作ったもの並みにヤバいと。

何でこうなったのかと言えば、朝になり起きてみれば、廊下には何故か招待状、吸血魔嬢からの食事会のお知らせだった。料理って……って話になり生徒会室の面々に告げたところ、迷宮の監視カメラ？　的なもので状況確認しようって話になって見てみれば……ｎｉｃｅｂｏａｔな展開になってしまった。うん、僕は慣れてるけど少年たちはドン引きした。

「……どうしよう」

「うん、どうしようもないよ。とりあえず食べない道を探そうか。あれ多分病院送りになるくらいではないにしろ気絶ものだから」

これはワカメがかわいそうになるんだけど。うわぁ

「画像見ただけでよくわかるわね」

「うん、あれなんかよりはるかに凄いの昔食したことあるし。病院送りになって九死に一生を得たよ」

うん、あれは凄かった。この世のものとは思えない味だったね。そのしばらく後に小学校のクラスメイトになった女の子がくれたクッキーも凄かったなぁ。なんだっけ、確か薬品とか入ってたんだっけ。味付けは普通調味料でやるもんでしょうに……はぁ。

「「「……」」」

さて、意識は今現在に戻してこのボロネーゼどうしたものかと考えてよし僕が食べればいいやと僕は考えてから二人に言った。

「これってサーヴァントが食べてもいいよね。毒見役くらいならやるよ」

「うっ」

「それは無理な相談ぞ。岸波の奴以外は消化出来ないようになっているんだ」

うわぁ。面倒なことしやがって。流石マトウシンジ。

「……わかった。食べる」

「マスター……わかった。心臓マッサージとか輸血とかの心得はあるから頑張って！」

少年はそのボロネーゼをがんばって食べた。うん、色々とダメージは食らったけどね。まさかゲッダン並みに体が回転するなんて思わなかったよ。

――――　梦　少年少女食事会。

……もうこれは拷問なんじゃないだろうか？　激マズ料理のオンパレードを少年はどうにか完食する。まあ、一部「まるごしシンジ君」と言う名の救世主によって救われたけど。空ろな目をしながら少年は頑張っている。生徒会の面々はなんかパニクってるし、ワカメ……いや、シンジに至っては心配する有様。

「食べたいな。そのカレー」

「ちょっとしょうねぇぇぇん?!」

うん、ごめんこっちが出るほどにはパニクった。ヤバイ、これはやばい。少年ははっとした顔になってこっちを見てきた。

「おかしな夢を見てたようだ」

「うん、そうだね。むしろ見ちゃいけない夢見てたね。多分、渡し賃とか要求されなかった?」

「？　大丈夫だよ」

本気でよかったって思う。流石に死後の世界にまでついていくのは無理だよ少年。

その後、どうにかＳＧを回収。愛妻願望（料理好き）って……色んな意味で諦めるべきだと思うんだけど……はぁ。

――――　梦　少年少女驚愕中。

ＳＧ2を回収した後、サクラがメルトリリスによって浸食されてしまった。それを打破するためには童話作家のマスターの力が必要でどうにか説得しようと少年は試みる。それで、色々とあってあのいけ好かない童話作家とそのマスターは消滅してしまった。それにショックを受けている暇もなく、どうにかサクラの電脳体に入り込んで体内に居たシンジや吸血魔嬢を救ったり閉じ込めたりすることに成功した。その際にＳＧ3もゲットしたわけだが、理性にしては珍しくアウトらしいので多くは語らないこととしよう。

「……何で閉じ込められるの……か」

僕が感慨深げにつぶやいた。あー、たしかにそれはそうだよねぇ。

「どうかしたのかアーチャー？」

「いや、あの子の最期の声が気になって」

「何か関わりが？」

少年が首を傾げた。僕はため息をついて話始める。

「いやさ、僕は『世界』に拒絶されたってことは知ってるでしょ」

「うん、でもそれとエリザがどう関わりあるんだ？」

「……僕さ、ある日いきなり世界から要らないってされたんだよね。理由はその時は全

然わからなかった。今でも完璧に理解してないと思う。彼女とはちょっと理由は違うけどなんか似てるなぁって。あとジナコさんのご両親の話も」

そうだよなぁ。ほんといきなりだった。お前は世界から居なくなれって言わんばかりに僕の存在は掻き消えた。あの時、あの誰かの声が救ってくれなかったらこの人生はもうとっくに終わっていただろう。

「そうか、でも俺にとってアーチャーは必要な存在だし、大切な存在だぞ?」

「うん、知ってる。ありがとう、マスター　こんな僕でも見捨てないでくれて」

僕が笑えば少年も笑う。うん、大切だって言ってくれる人間が居てくれるだけでも世界は暖かいものだって思えるんだよ。だろ?

奇譚もそろそろ終盤戦?　真相は多分闇の中、それでもそれでも進まないとね。

某凡庸型主人公編　5

さて、新衛士の時のおなじみＢＢチャンネル！　いつもながらきつかった。てか、ＢＢはここに至ってまで遊んで……いないか。なんか妙な間があったしあっちも色々不味かったのかなと推測してから。毎度の如く迷宮に向かった僕らは確実になんかありそうな看板に出くわした。

「水着？」

「一応探してみる？」

少年は首を傾げた。でもなんか期待するような目線は隠しきれてないぞ少年。

「まあ、僕は別にかまわないけどここって泳げるとこあるの？」

「……正論だけどなんかこう……集められるのに集められないとかもったいない気がして」

なんか少年は妙に凝り性っていうべきか何といべきか。こっちは呆れてるけど僕の方は呆れるよりは苦笑している。

「なんていうかマスターって本当にコレクター趣味っていうか……」

「ごめん、大変なところなのにつきあわせて」
「まあいいよ。とりあえず頑張ろうか、水着はともかく経験値貯めるのはありでしょ」
無駄に居るみたいだし。一応、回復スキルはあるし大丈夫っと。回復系のアイテム使えないけどどうにかなるでしょ。

――――　梦　少年少女探索中。

水着一歩手前でＢＢと遭遇したけど、すぐにＢＢの方が居なくなった。彼女の目を見て僕は思う。
「……あーあ、どこぞの信念ガリゴリ削られて摩耗しかけの正義の味方みたいだ」
いつぞや見た記憶の彼はあんな顔していた。あれはなんていうか見てて痛いって思ったんだよね。辛いとも……人がああなる姿って嫌だなぁ。
「アーチャー？」
「……正直あーゆーの見たくないんだけどなぁ。はぁマスター、さっさと回収しよう」
少年を急かしてアイテムフォルダを開けてもらえばそこには可愛らしいフリルのいっぱい入ったワンピースタイプの水着が出てきた。色は水色と白だけど、うわぁ……
「これは……」

「結構かわいいと思うけど」
　見た目は、可愛い。それは認めよう。でもさ、これは生理的に受け付けないっていうか勘弁して欲しいっていうか。ここまで拒絶反応起こす僕も僕だけどいや、ないないないない。
「いや、僕的にはお断りしたいデザインなんだけど?!」
「普通に似合うと思うよ?」
「お断りしますー」
　同じく!　マジで全力でお断りしたい気分だ。
「似合うのに……」
　残念そうな顔しても僕は着ないぞってその時誓った……はずだった。

――――　梦　少年少女探索中。

　目の前に広がるのは謎の川、渡ろうとするとばちっと攻撃が入る。
「……このための水着?」
「そんな気がしてきた」
　生徒会室から通信が入った。遠坂凛たちからだ。

『うわ、これ水着に着替えないと渡れないようになってるわよ』
『一応対策は立ててみているのですが難しいようですね』
「……アーチャー」
少年が僕を見る。あああああああ、もうわかったよ。物凄い沈黙の後に僕は口を開く。
「……わかったよ。着ればいいんでしょ着れば！　マスター、リターンクリスタルもってる？　いったんマイルームに戻るよ」
「わかった」

――――　梦　少年少女帰投中。

一旦マイルームに帰投する。そして渡された水着に着替えた。
「うわぁ、違和感バリバリ」
「え、普通に似合うと思うけど？」
僕の水着姿を見た少年はそう感想を言った。似合うっていうのすらうれしくない。
「もう勘弁してよ。個人的にはこういうのはかわいい女の子が着るべきなんだよね！　ほら、あのパッションリップの階で遭遇したゴスロリっ子とか」

決して僕みたいな奴が着るものじゃないよねと心の中で続ける。うん、正直同意するよ。
「アーチャーも普通にかわいいと思うけど」
「っ　そんなこと言ったっておだてられないんだからねーだ。とりあえずとっととあの川渡っちゃおう!!」
「うん、それにしても何で川なんかあったんだろう？」
どうせＢＢの策略かなんかでしょ。どういう意図があるのかは不明だけど。

――――　梦　少年少女探索中。

水着に着替えて戻ってみればすんなり渡ることに成功する。よかったと思っていたのも束の間、また渡れなくなりそうになって思わず川を凍らせてしまった。
「はぁ、渡りきった」
「最初から凍らせればよかったって気が付いたのは後の祭という奴だよね」
「言わないで、恥晒してこの状況なんだから、ガチで勘弁願います」
しばらく進むとメルトリリスの毒に犯された人々を見つけた。助けることは出来ずに彼らは解けてしまう。そのことを悼みながらもなお先に進めばそこには緑色の服に

緑色のマント、四肢や服の一部には少しノイズが走っているけど形は残っている弓。
「……アーチャー」
緑衣のアーチャー、森の狩人がそこに居た。何ていうタイミング、てか彼がこの状況ってことは……。
「よう、期待外れのお二人さんよ。切り札の一つでも取り戻したか？　おや、嬢ちゃん、趣味に合わない衣装替えでもしたのか？　不機嫌そうじゃないか」
「煩い黙れ、緑の狐　それにしても溶かされそうになってるけど……メルトリリスにでも反抗したとか？　ま、反抗は君の常套手段か……あ、あの時の煙幕は君か」
ようやく分かった。メルトリリスが最初にコンタクトを取ってきたエリザの最初の階層、あそこで煙幕を張ったのは彼ってことだったのか。
「たく、お前さんなんか聞き覚えがあるのを二人も混ぜるとか何やってんだよ。ま、そういうわけだ」
狩人は少年に何かデータを投げてよこしてきた。
「わっ」
少年は慌ててキャッチする。そのデータが何なのか考えるよりも先に生徒会室から通信が入った。
『ちょっとそれ、ＢＢのデータよ！　急いでこっちに転送して、これを解析できればＢＢ

のチート技術に対抗できるかも！』

どうやらこれはＢＢの目を盗んで彼が探したデータらしい。一体なんで？

「負けちまったがこれは旦那の聖杯戦争だ。個人の欲で潰していいことじゃないんだよ。報酬はそうだな。この聖杯戦争をダメにした元凶の命でいいか」

あー、そっか。狩人も誇りあるサーヴァントなんだ。彼のマスターは彼が使えるに値する人物だったらしい。ああ、あの老騎士が狩人のマスターだったっけ？

「……そういうことか、まあサーヴァントとして呼ばれた君らしいね。そんな安いことでいいなら構わないさ、むしろもっと別なの要求したらどう？　体、直すくらいならやらないでもないけど？」

「そいつは止めとくわ、オレも毒使いなんでねぇ。受けた毒の効力ぐらいはわかるさ。ところでだが、あんた本当に何者？」

だろうね。狩人の記憶にあるのは僕ではなく本来の弓兵だ。聞かれるのも当然。いつものように返すだけだ。

「何者って言われてもねぇ……ふむ、誰かの呼びかけに『応える』事しかできないただの一般人とだけ名乗らせてもらおうか。ああ、そうそう弓兵の代用品ともいえる」

「アンタみたいな一般人はめったにお目にかからねーよ。ま、そっか　代用品なら仕方ないか」

そして彼は弓を構えた。僕は鉄バット（ラニ＝Ⅷが強化プログラムで改造してくれた）を構える。
「さてと、話すことは話したし殺し合いでも始めますか」
「結局この状況になるのか……はぁ」
「な、なんだって」
少年は驚く。それは当然だよね。普通はそうなる。何となく察してしまった僕の方がおかしいのかな？
「ああ、驚くようなコトかぁ？　オレ、ＢＢのサーヴァント。オタク、ＢＢの敵対者。ごく自然な流れでしょ。目的が一致していても殺し合う。戦場じゃよくある話さ」
「……僕としてはあんまりこういう戦い好きじゃないんだけどなぁ。ま、でもマスター、これが今の僕らにできるせめてもの手向けだよ。準備、いいかい？」
少年の目が覚悟をした目に変わる。ああ、この諦めない目、少年はそこがいいんだよね。
狩人は薄く笑っていった。
「おう、かかってきな……しかしなるほど。こりゃ確かにクセになる。サーヴァント同士の戦いは悪くない誇りなんて余分なウエイトも、微笑ましくなるもんだ。あんたらが間に合ってよかったぜ。つい眠りそうになるわ、片手からずるっといきそうになるわ、

こっちはこっちで心配だったんでね。これでようやく派手に行けるってもんだ!!」

――――　梦　少女狩人戦闘中。

あの後、回復アイテムの無いギリギリの戦闘を続けて、どうにか宝具解放までこぎつけ、氷剣『エクスイカバー』を召喚して最後の一撃を繰り出す。

「『勝利の永久凍土(アイスカリバー)』っ!!」

「ぐっ」

氷の一撃が狩人を襲った。これ宝具解放しないと撃てないんだよね。威力は高いから当然の話だけど、てか撃てる方が奇跡だよなぁ。

「……」

狩人は膝をつく。その体は戦いの傷と毒で急速に自壊していく。その様子なのにも関わらず狩人は自嘲気味にわらった。

「……何とか間に合ったか。あのままメルトリリスになるのだけは勘弁だったからなぁ。ったく、自決もできねぇとは厄介な毒もあったもんだ」

なるほどね。それで狩人はここに居た。同化を拒み、自分から消えることも出来ないで、最後の手段としてここで戦いに負ける道を選んだのか。

「それじゃあまあ、後はよろしく。オレは先に抜けさせてもらうわ。できる範囲で、納得のいく仕事をしてくれよ」

……狩人はそれだけを残して消えた。何というべきかこの世界での『死』というものは随分と綺麗だなと思ってしまった。どこかの誰かが見た『死』とはまた違う。そして僕が知っているものとも。でも、そこには『絶対』が隠れている。そうとも感じた。だけどそれで沈んでばかりもいられない。それだけは僕も少年も感じているようだった。

――――　梦　少年少女帰投中。

「……マスターはよく寝てるなぁ」

マイルームにて、少年が眠ったことを確認してから僕は空を見上げる。星ひとつ、雲一つ無い空だ。別に夜空ってわけじゃないんだよね。これ、空を見ながら僕は考える。

「……うん、僕らは託された。色んな人のいろんな希望を」

今まで散って行った仲間たちの顔が脳裏に浮かぶ。彼らのおかげでここまで進めたのだ。手を握って僕は誓う。

「だから、止まってられない。大丈夫、大丈夫」

少年を守ろう。再度、僕は誓った。

――――　梦　少年少女探索中。

「ありがとう、ありすのことを見送ってくれて」
　砂糖菓子みたいにふわふわとした語り手は微笑みを絶やさないまま、風に流れるように消えてしまった。その場にはＳＧだけが残っている。少年はつらそうな顔をしながらもＳＧを回収する。
「……アーチャー、シールドに行こう」
「うん、了解。それで正しいと思うよ……それにしてもキャスターを分裂させたあのエネミー、知り合いの人形を壊してるみたいで罪悪感半端なかったなぁ」
　そういえば彼女もアリスか……アリスと人形は切っても切り離せないらしい。周りを見渡せばエネミーは通常の物に変わっていた。うん、よかった。
「――――お皿に乗った貴方の首！　本当に楽しかったわ」
　お前はヘロデの妻、サロメかと言いたくなった。確か預言者ヨハネの首を要求した女だっけ？　そして彼女を見ているとこう……悪寒が酷くなる気がするんだけど。
「ふふっ、そういえばアーチャー、貴女随分と可愛らしい外見をしているわね。貴女なら私のコレクションに加えてもいいかもしれないわ」

ああ、なんとなく悪寒の意味が分かった。彼女、僕を着せ替え人形にしようとしているときのアリスにそっくりなんだ。それに今の発言とあの子を見てみればどういうことになるかなんて明白だ。さしずめ観賞人形（ブランツドール）か嗜好品（ホビー）にされるのがオチだね。ああ、なんて蝋人形の館。あれＰＶ見て怖かった記憶がする。

「お断りさせていただきます。この人形愛好家が！　この世の全て人形に変えないと気が済まないのか」

「あら、それは楽しい発想だわ」

僕らの言い合いに少年の左手が反応する。やっぱＳＧは「人形愛好家」ってことか、まあこの空間とキャスターの証言を纏めればそうなるのも当たり前か。メルトリリスが嬉しそうに笑う。

「これがＳＧの摘出、不思議ね。穴が開いたみたいなのに心があるって実感できる。

――そう、その通りよ。人形はいいわ。ひたすら愛しても文句を言わない、不満をこぼさない、変わらない。私、人間の消費文化は愚かだと思うけど、フィギュア文化を磨き上げたところは感謝しているの。事の起こりはやっぱりヴィーナス像ね。ギリシャ始まった。そうとさえ思ったわ。それが国を越え、海を越え、時を越えて……日本の職人達の手に渡った時、宇宙誕生に匹敵するビックバン、いえ、パラダイムシフトが起こったのよ。バレちゃったから言うわ。私、人形が好き。大好き。等身大から根付け

サイズまで、分け隔てなく評価するわ！でも、特にお気に入りはやっぱりスケールモデルね。３６０度、舐め回して観賞できる支配感、所有感は最高だもの。この趣味を分からないヤツは、徹底した再教育あるのみよ。溶かした後、土台の材料にしてやるから。あ、でもアメトイはダメね。ガチムチすぎる。こと工芸において、日本人の繊細さに勝るものはないわ。私の夢は失われたガレキ職人たちを集めて、私のトイ・ストーリー王国を作ること――あ、もちろん職人たちも人形にするから。究極の造形を求めて来る日も来る日も腕を磨きあうフィギュア職人たち……いい笑顔（グッドスマイル）！こんな素敵な光景が他にあって？いいえ、あるはずがない。ないからこそ私が築き上げてみせる！」

語っている。物凄い語っている。うん、冷酷無慈悲で他の「サクラ」とは違うって思ってたけどこの子もやっぱ「サクラ」だ。そして僕の生きてた時代って人形に困らない時代だったのだなぁとしみじみ思った。この前暇つぶしに歴史見たけど凄い変動が起こってたんだよね。少なくとも「僕」が生きていた世界とは全く違う世界だってことはよくわかった。

メルトリリスはその後余裕綽々と言った表情で消えて行った。まあ、舐められてるとも取れなくはないけど個人的にはありがたい。でも、未だに悪寒は消えなかった。

――――　梦　少年少女探索中。

シンジは逝ってしまった。メルトリリスの力(レベル)をゼロにして。この時空の彼は随分と度胸があっていい人だなと思う。少年と僕はメルトリリスが作り出した壁の前に立っていた。

「……マスター」

「ああ、大丈夫だ。いつもの通り、行こう」

「それでこそマスターだよ」

中に入り、メルトリリスとの戦いが始まった。彼女の一撃一撃は随分と重い、マトリクス見たけど絶対に筋力Eは嘘っぱちだと思うんだけど。

向こうの攻撃をどうにか凌ぎながらじわじわとダメージを貯めていき、どうにか彼女を下した。

「マスター、君が選ぶといいさ。彼女の恋を砕くのも長らえさせるのも君の自由だ」

「……」

少年はメルトリリスに近づいていく。そうなるかなって気はしていたようなしてないような。少し複雑な気分だった。メルトリリスの壁がなくなり次の階層への通路が見えた。僕は少年に声をかけた。

「マスター、急ぐよ!!」

「あ、ああ」
階段を下っていくとそこには、
「これって……」
「サクラちゃん?」
大きなサクラのレリーフがあった。普通のレリーフよりも大きい。
「え、ちょ」
「うわっ」
その後ちょっと色々あって旧校舎へと戻る羽目になった。あーあ、ゴール近かったのに。てか少年、よく一日を秒で知ってたなおい。紫か藍なら知ってるだろうけど、人間が知ってるとか驚きだよ。

――――　梦　少年少女強制帰投中。

旧校舎の生徒会室にて、絶望している二人を見て一言言いたくなった。なんだろう、このもどかしさ。この前自分で運命を変えるために戦ってるとか言ってたのにいざその運命が見えたら立ち止りたくなるのも分かるけど。でも、それじゃあダメなんだ。
「……一ついいかな?」

「何よアーチャー、もうあたしたちにできることなんて……」
「そうですよ……」
　暗い顔で二人はこっちを向いた。少年も何事かとこっちを向いてくる。よし。
「はぁ、とある正義の味方の話をしよう。彼はがむしゃらに正義の味方を目指した。その在り方は『正義』を貫いただけかもしれないけど、まあ正義の味方であろうとした。彼は世界と契約をする。それは『人類滅亡を止めるための緊急装置』の一部になるということだった。死後も人類の役に立てるならと彼は契約した。でも、その仕事内容は否応のない抹殺の仕事だ。彼はそんなあり方になった自分に絶望した。そして、ふとしたきっかけから自分殺しを思いついた。そして、チャンスはやってきた。どうなったと思う二人とも」
　彼の話はいい例だなって思った。ただそれだけ……ってわけじゃないけど一番わかりやすい気がしたのも事実なんだよね。
「え？　うーん……成功した？」
「いえ、論理的に矛盾が多数発生します。不可能かと」
「うん、結果的には殺すことは出来なかったよ。どうせ殺したところで自分は消えないのはわかってたんだろうけど。ま、そこは本人にでも聞くとして、でも彼の目的は成功した。さて、どうしてだ？」

うん、彼は結局自分殺しは出来なかった。むしろ自分が殺された。でも彼は満足そうだ。理由は今説明している内容じゃないだろうけど、彼の知らないところで目的は達成されたんだよね。

「は？」

「それはさらに矛盾しているのでは？」

「だって、正義の味方にとっては過去でもそこの彼には現在なのだもの。そこの彼は正義の味方という自身の結果を先に知ってその先を変えることができる。一種のタイムパラドックスだね。それに成功したんだよ」

「あ」

二人は顔を見合わせた。ちょっとだけ覇気が戻ってる。あともう少し。

「ここは現在過去未来すべてが混在する場所、だから未来が見えているわけであって、現在はまだ滅亡してないでしょ。いくらムーンセルでも一瞬で人類滅亡させるとか不可能だし」

「つまり『現在（いま）』に干渉すれば、人類滅亡という『未来（けっか）』を変えることは可能ってことか？」

少年が口を挟んできた。ほんと、少年ってかなり察しがいいよね。少年の発言に便乗するように僕が続ける。

「うん、だってたった一人の運命ですら変わるんだよ？　だったら大丈夫でしょ。ただし、これはマスター一人でどうこうできる問題じゃぁない。味方がいてこそ出来ることだよ」

「凛、ラニ、今、アーチャーが言いたいこと全部言ってくれた。でも、俺からも頼む」

少年が二人に頭を下げる。うん、僕も頭を下げた。二人の声色が変わる。

「……そうよね。なんですぐに絶望してたのかしら」

「……そうでしたね」

まだ、負けじゃないよね。少年と僕の諦めの悪さは見てて呆れるほどだしね。

夢物語も最終局面、誰が笑うのかなんて決まってるじゃないか。

某凡庸型主人公編　6

「いってら、マスター」
保健室に入るという少年を見送る。僕はぼうっとしながら呟いた。
「ふー……最終局面だよね。うん、これでＢＢを止めることができればこっちの勝ち」
そう、それが最終条件で確定条件、負けるわけにはいかないぞ？
「うん、とはいえ勝てるかなぁ。メルトリリスの時は物凄くギリギリだった」
ギリギリなんていつもの話じゃないか、それにここで諦めてどうするつもりさ。
「それもそっか、勝てる勝てないの問題じゃないよね」
脳内葛藤も終了といこうか。
「さて、もうそろそろ黙ろっと」
怪しい人に見られかねないしねー。

――――　梦　少年少女決心中。

生徒会室に行ってみれば、あのサクラの壁は実はＢＢではなくサクラの心の壁ならし

い。でもその先に進むための条件を提示された。
「えっと、神話礼装？」
「そうよ。英雄の原初の姿って奴ね」
「はい、それであればＢＢと同等の力を得ることも可能かと」
「……そうなんだ」
　そもそも英霊ですらないこっちはどうしたものかそう考えるけど、僕はいい案が思いつかないようだ。こっちは嫌な予感がするんだよね。どうしよう。
「アーチャー」
「うん、ＢＢ倒すのに必要とあらばいいけど……大丈夫かこれ」
　色んな意味で破滅しないといいけど。
「大丈夫です！　ダイブは一度経験済みですから前回よりもスムーズに行えます」
「いや、そういう意味じゃ……」
　そもそも英霊じゃないってこと自体ここのメンバー知らないんじゃ?!
「岸波君、一度入ったら目的を達成するまで出ることはできないから準備を徹底してね！」
「ああ、わかってる」
「あのさ、僕が居ないとマスターの身を守ることができないよ？」

そんな僕の意見なんてすぐに対策を立ててたらしく普通にスルーされた。一応施しの英雄を呼ぶことで決定したけど、無理だった場合の嫌な予感がじわじわと押し迫っていた。

――――　梦　少年少女説得中。

結果としては施しの英雄の協力は得られなかった。彼は彼でマスターであるジナコの傍に居たいらしい。ふと疑問に思ったんだけど彼の代名詞である黄金の鎧は何処に消えた？　でも、それを聞く暇もないまま僕らは事務室を後にした。

「あーあー、残念。カルナさんが協力に応じてくれないとは」

「そうだな。何でだ？」

さあねと言いながら生徒会室へと向かう。そこには遠坂凛のあくどい感じの笑みがあった。うん、何でそういう顔してるのかが不明だよ全く。

「そっか。でも、その辺は予想の範疇よ。はい、これ」

少年に黒いアイテムフォルダが渡された。うん、やっぱり嫌な予感がする。

その後、プログラムのために僕の体は眠らされ。後はダイブを待つだけとなった。

――――　魂　少年潜入中。

少年がこちら側へと降りてきた。僕が声をかける。

『マスター、聞こえてる？』

「アーチャー？！」

少年は驚いた。ま、そうだよね。眠らされてるんだから話しかけてこないって思っただろうし。

『そりゃ眠らされたのはあくまで体、心は眠ってないからね。あの二人もナビできないみたいだし僕がナビするよ……と言いたいところだけど、お生憎様　僕は心眼なんて持ってないからね。面倒だし他のメンバーに任せるわ。しばらくは使い魔（ファミリア）に護衛頼んでね』

そこで僕は居なくなった。正確に言うと眠っている体に引きずられて眠ってしまったって言った方が正しいけど。少年は後ろを見て驚く。

「あれ、使い魔（ファミリア）は？」

そこにはなにも居なかった。遠坂凛の奴、何かやったのか？

「わっ」

少年が持っていたアイテムフォルダが高速回転を始めてどんどんと回っていく。そ

こから聞き覚えのある声がした。回転を速めるごとに調子に乗っていく。これって……

「聞くわ。アンタがアタシのマネージャー？　ってこれ一度やってみたかったのよね！」

そこに居たのは出戻りランサーこと鮮血魔嬢だ。うわぁ遠坂凛の奴、よりにもよってこいつかよ。少年と鮮血魔嬢は一時的に協力関係と相成ったのだった。

――――　魂　少年魔嬢潜入中。

少年と鮮血魔嬢の前にぶかぶかの長そでシャツに顔以外の肌が見えるところ全部を包帯で隠したセミロングの髪の女の子が現れる。色々とひねちゃいるけど『決心』を象徴する拒絶だ。

「あ、来たね」

多分僕らの中では一番淡々としてる。後、発狂もするけど。

「あら、誰よ貴女？」

「あれ、あの時の？」

少年が首を傾げた。ま、少年は面識あるし当然の反応か。

「うん、一応理性の方から話は聞いてる、と言うよりは理性の見たこと聞いたことはわたしにも伝わるから。本能の方だとダイレクトすぎて自分の経験のようになるのがたまに瑕だけど」
「それで？　アンタは優秀なナビゲーターってことかしら？」
　鮮血魔嬢が尋ねた。それでいいと思うよ。
「まあ、そういったところだよ。本来なら免疫機能みたいな感じで、君たちのことを『拒絶』するのが仕事なんだけどね。君がＳＧを持っているから拒絶対象にならなったってわけ」
「つまり、敵対しないと？」
　するわけがない。一応ここの拒絶反応はこいつが一挙にになってるわけだし。
「そういうこと、ついてきて原初のところまで案内するから」
　少年と鮮血魔嬢、それに拒絶の三人は移動を始めた。途中滅菌細胞もどきに出くわすがそれは全て鮮血魔嬢が打ち破った。彼女ってかなり強いんだ。
「……」
　しばらく進めば全部が黒い人影が姿を現した。手には木刀のような何かを持っている。その目がビカンと光った。
「あら？」

「あれって……」
　あ、意外と早めに見つかるとは。
「あ、原初がこんなところに居るとは、あーそっか理性は眠ってるし本能は完ぺきに傍観決め込んでるし当然か」
　悪かったな。傍観決め込んでおかないと原初見つからないかもしれないじゃないか。
「ふぅん、それなりのドレスコードね」
「いや、なんかおかしくないか？」
　あ、やっぱ色々とおかしいか。拒絶が苦笑いをして告げる。
「主に身長かな？」
「ま、まあ　そことか」
　ま、それはそうだよね。どう見たって１７０は行ってるようなないような？
「気にしないで。本来なら『僕』って１７０近くなれるはずだったから」
「え?!」
　少年は拒絶の発言に驚いた。その驚きをスルーして拒絶は告げる。
「それじゃあがんばれ、わたしはここまでしか手助けできないから」

――――　魂　少年魔嬢決闘中。

原初が敗れると同時に原初の黒いのがなくなっていき、一人の少年が姿を現した。うん、やっぱりなんだよね。あれが『僕』の根本なわけなんだよなぁ。はぁ

「ふぁー……あれ？」

原初が首を傾げる。

「え？」

「あら？」

寝ぼけた感じで原初は続ける、しばらく喋れば覚醒状態に入った。

「君たち誰？　っていうか、何で寝てたのにたたき起こされたんだか……まあいいや、何かあったのかよくわからないけど僕の協力が要るってことはわかったよ。ま、何でも『受け入れる』事が僕の本質だからね。ふむ、後はどこぞで傍観決め込んでる彼女のでも説明受けなよ。それじゃ、流石に魂に居座られるのももうそろそろ勘弁して欲しいし。じゃあね」

少年と鮮血魔嬢はこちらへと飛ばされた。

――――　魂　少年魔嬢排除中。

ここはどこか懐かしい学校の屋上、僕が気に入って滞在している心象風景の一つだ。
「よー、少年、それから鮮血魔嬢」
「えっと?」
「へぇ、中々かわいいわね」
「そりゃどうも、全く人の封印しておいた本質呼び起こすとか一体何やってんだか」
これから先『僕』は確実に奇妙な運命をたどるんだろうなぁ。てか、もうすでに送ってたか。
「ご、ごめん。でも!」
「分かってるって。これもBBを倒すために必要なことだってね。はぁ、こりゃ戻った時の情緒不安定を気にするべきだなぁ」
絶対に色々と大変だ。
「??」
「とりあえずあれがラニ=Ⅷが言っていた神話礼装を解放するための原初の姿……にもした魂の本質だよ」
「模した?」
僕の発言に少年は首を傾げっぱなしだ。それはそうだよね。色々と分かりづらいし。
「まあねー、『僕』ってムーンセルのサーヴァントの在り方とは全然違うサーヴァントだ

し色々と異例（イレギュラー）なんだよ。只の人間の魂が幽体離脱してふらついていたところをムーンセルに引きずられて強制的にサーヴァント化されただけの存在だからね。そもそもの話、神話礼装なんて持ち合わせていなかったんだよ。ま、それによく似た何かは持ち合わせていたからいいけど」

「そうだったのか……」

少年が呆然とする。ま、それもそっか、信じてたサーヴァントが実は一般人でしたーとか信じろって方が無理だよね。

「はぁ、そういうわけだ。僕はＢＢへの対抗策を手に入れようとも相変わらずピーキーなことこの上ないからサポートは任せた。これでも僕、全面的に少年のこと信用してるんだぜ？　そうそう、鮮血魔嬢　今回は助かった。ウチの少年が世話になったな」

守ると決めた人間を助けてくれたんだ。その前に何をやってようとも礼を述べるのが礼節ってもんでしょ。

「ふんっ、あんたに礼を言われる筋合いも何もないわよ」

「そりゃ失敬、じゃ解散ライブも成功したことだしこれにてお開きでよろしいか？」

「ええ、じゃあね」

――――　梦　少年帰還中。

睡眠状態(スリープ)が解除され、僕の意識は元に戻った。
「……うわぁ、ちょっと変な気分」
　さっそく理性が大変な目に遭っていた。うん、こうなることは予測済みなんだよね。でも、自力でどうにかしてもらわないとこっちとしては何もできないし。
「大丈夫か？　アーチャー」
「だいじょぶ……それにしてもそれはそうなんだけどなぁ。やっぱり凹む」
　少年は僕の発言に首を傾げた。さっきから少年驚きっぱなしだよね。
「??　本当に大丈夫か？」
「ああ、少年　大丈夫だよ。色々と滅多打ちにはされてるけど、どうにかなる範疇だから」
　少年が焦る。うん、そうなるのも当然だよね。
「あのさ、今日はもう休もう！　そうした方がいい」
「あはは、ありがと。流石に気持ちの整理がつかないや」
　もうなんか滅多打ちにされてる気分だから早く休ましたれと言いたいけど言えなかった。
「大丈夫ですか？　アーチャー」

「うん、大丈夫　神話礼装も使いこなすのは楽そうだけど自分の精神面が複雑だからちょっと頼むから休ませて」
「了解しました」
どうにかマイルームに向かうことができた。

――――　梦　少年少女休息中。

マイルームに入ると僕は枕を滅多打ちにする。そうでもしないとフラストレーション溜まりそうで怖いんだよね。
「ぐあああああ……もう嫌だ」
「本当の本当に大丈夫か？」
少年が本気で心配そうな顔をした。僕は苦笑いで答える。
「うん、情緒面の問題だから気にしなくていいよ？」
「そんなこと言ったって心配になる。アーチャーは俺のサーヴァントだ。辛かったら頼ってほしいから……」
少年が真摯な目で僕を見た。じりっと何かで焼かれるような視線が僕を貫く。僕はこのことに関してはちょっと諦めることにした。何をって意地を張るのを。

「ぐぬ……はぁ、しょうがない。ここからは僕の独り言だからね。反応しなくていいし、むしろスルーしていいよ」

本心の吐露、この時だけは「僕」が主役だ。いつもいつも考えて考えて心の奥で『拒絶』して押し殺して来たことをぶちまける。

「僕はさ、ずっと男の子になりたかった。そうすれば世界から捨てられずに済んだんじゃないかって思いこんでた。ううん、思い込んでいなくちゃ発狂しそうだった……平行世界にはさ、色んな僕が居た。でも、全員男の子なんだよね。もしかしたら女の子の僕も居るのかもしれないけどそれに出くわしたことはなし……うん、居なかったんだ。それに平行世界の僕は凄いんだよね。どんだけバカだって言われてもそれでも真っ直ぐに突き進めたり、世界なんか簡単に塗り替えちゃうくらいの力を持ってたり、それでいて人間であろうとしたり、色々と凄いんだよ。僕には眩しすぎるくらいにね」

そう、僕は正直に言えば、あの他人(ぼく)たちが心底羨ましかった。普通に世界に居れて、普通に世界で生きていられる彼らが。そして、彼らが全員男だったのも色々と助長させた原因なんだろうなぁ。まああと考えられるのは「僕は男でなければならない」と縛った誰かの言葉だろうけど。

「あーあ、僕は何で女の子なんだろう。男の子だったらもっとできること増えたんじゃないかな？　サーヴァントとして呼ばれても、マスターに迷惑かけなかったかもしれな

い。もっと別の『在り方』あったように思えてならないんだ……それでさ、今回の神話礼装を手に入れる過程で魂の奥底にある『僕』の起源みたいなのを見せつけられたわけだ。笑っちゃうけど男の子だったんだよね。うん、なりたくてなりたくてしょうがない物は魂の奥底に眠ってた。『無い』じゃないんだよね。そう思えたら色々と複雑な気分でさ」

そう、魂の本質は男なんだ。それなのに『僕』は世界に捨てられた。この矛盾をどうしたらいいのかがよくわからない。理性ならなおさらだ。冷静に物事を捕らえようとしてつい論理的になる。それだからこそ今回の葛藤にいたったわけだ。

少年は僕の目をじっと見つめてから口を開いた。

「……アーチャー、そんなこと言わないでほしい。俺のアーチャーは料理が上手で、戦闘の時だって頼りになって、俺の事真摯に考えてくれる。そんな女の子だ。男がよかったなんて言わないでほしい、それじゃあ俺のアーチャーとは違うんだから!!」

「ありがと、マスター　でもさ」

そんな慰めでどうにかなるほど軽い傷じゃないんだと僕は続けようとする。すると、少年は僕の肩をガッと掴んでさらに告げた。

「でももしかしもない！　アーチャーはアーチャーだろ!!　平行世界が何だ！　とんでもない力を持ってる？　そんなの関係ない！　俺のアーチャーは自称ピーキーでも十

分に強い！　それにアーチャーとコンビじゃなかったらここまで戦い抜けなかった！
俺のアーチャーは今ここにいるお前なんだよ!!」
じりじりと心の氷や冷め切っていた決意を端さえも彼の目は焦がしてくる。僕は……いや、『僕ら』はその目に絆されたらしい。
「っ……マスターは凄いよ。今の一言でびっくりするくらいすっきりした。そうだよね。僕は僕なんだ。性別とか気にしてる場合じゃなかったね……ありがと、マスター」
僕は心底嬉しそうな顔で笑った。よかった、もうこれで悩まなくて大丈夫だ。少年がいきなり驚いたような顔をした。あ
「あ」
「ん？　あ、もしかして最後のＳＧ？」
「ああ、何で今??」
そんなの決まりきっているじゃないか。
「あー、確かにこれは秘密だよねー。普段だったら絶対に男になりたかったとか言わないし」
「えっと、名称は……」
どうせああいう感じだろうけど言わないでほしいなぁ。
「すとーっぷ、正直予想はついてるけど見たくないから言うの禁止で」

「え、何で？」
　少年が不思議そうな顔をした。
「いやぁ、さっきのアンニュイな自分も忘れる意味合いも込めて。マスター、明日は最終決戦……ん？」
　直感的になんか違和感を感じた。すぐに最終決戦になるかな？
「どうかしたのか？」
「あー、いやなんか最終戦の前になんか戦う気もしなくはないから？」
「へ？」
　少年が驚いた。
「明日になれば全部がわかる。今日の事は今日で終わらせよう！　はい、忘れた忘れた」
「あ、ああ」
　少年を無理やり寝かしつけて次の日に備えることにした。

――――　梦　少年少女探索中。

　ちょっと脇道にそれてみれば、ダンジョンが広がっていた。そこを探索している間に変なワームホールを見つける。

「さて、マスター　嫌な予感がバリバリするわけですが、入る？」
「ああ、飛び込もう」
「……了解」
　嫌な予感ってこういうときほど当たるっていうんだよなぁ。うん、そうだけど少年が言うならしょうがないか。
　そんなわけで中に入ってみれば彼の記憶の中にある方の遠坂凛と彼が居た。
「あ」
「嘘、聖杯戦争の参加者がここにも？」
「ああ、そのようだな」
　うん、やっぱあの二人か。彼が知ってる時空の住人ってわけではないんだろうけど。
「え、遠坂？」
「マスター、よく見て彼女と恰好が少し違うよ。どうやら平行世界の彼女のようだ」
「？　分かるのかアーチャー」
「まあね」
　平行世界っていうことならここもそうだしなんて野暮なことは言わない。秘するが華って奴さ。二人がこっちを見て何か言いあっている。
「へぇ、あんな可愛いアーチャーっているのね」

「そのようだな。それにしても本当に何の英霊だ？　かなり幼い少女のようだが」
「うーん、本当よね。何歳くらいかしら？　てか、子どもの姿が全盛の英霊っているの？」
「私の知る限りはいないが……いや、いたには居たか？　只あれは特殊なケースだがね」
　なんだろう、頭の中で何かがはじけた。久方ぶりに暴れたい気分だ。
「……マスター、アイツ　フルボッコでも構わないよね？　答えは聞いてないけど」
「アーチャー?!　いつぞやの遠坂マネーイズパワーシステムみたいなこと言うなよ。それ死亡フラグだから！」
　少年、死亡フラグは打ち破るためにあるんだよ。あのときだってどうにかできたじゃないか。あれはあれでちょっとばかり苦戦したけど。
「ちょ、何よその遠坂マネーイズパワーシステムって?!」
「何やら妙に聞き覚えのある台詞を聞いたようなのだが？」
　うん、それに応える余裕なんてない。ついでに言うなら二人ともさっきので地雷踏みまくってるし。うん、良いよね。答え聞くことなんてしないけど。
「煩い、正義の味方のなれの果て！　黙って聞いてりゃ、誰が幼い少女じゃバカァァ！」
　僕は感情に任せて弾幕を撃った。慌てて向こうの彼が双剣で防いだ。
「っ　凛、応戦するぞ。構わないな？」

「ええ」

二人が構える。よし、やっぱりこうでないとね。

「少年、サポートよろしく。悪いけど、今回は完全なる個人的な感情で戦わせてもらうよ」

「ああ、もしかしてアーチャー、身長　気にしてたのか？」

身長は別にいいんだ。身長は。

「うん、身長っていうよりは外見で年齢考察されるのが嫌いなんだよね。誰がロリだ。幼女だ。マジでいい加減にしろ」

その手の変態のことを思い出したらさらに腹が立ってきた。そこに彼がこちらの弾幕を防ぎつつ告げる。

「君のような。低身長かつ他人に対する思慮も足りないような幼い少女など知り合いには居ないがね」

あ、もうこれはダメだ。理性なんてどこにも居なくなるあるのは本能だけ。

「……はっ」

「む、何か鼻で笑うような要素があったかね？」

心底真面目な顔をしてこいつは言いやがった。いい加減にしろ。もうあくどい笑みしか浮かべらんないや。

「シロウ、てめー　よくもまあ僕をチビとかガキ呼ばわりしたな。いい度胸だな、オイ。こちとら一応義務教育は終了する程度の年齢はあるぜ。てかそこの赤いのと多分同年齢だよ！」

　びしっと遠坂凛を指さした。見れば少年と遠坂凛はこそこそ会話している。

「な、なんかあの子、色々と変わってない？」

「なんか珍しい、アーチャーがここまで感情的になるなんて」

　ま、たまには僕だってプッツンしますけど？

「もちろん！　人の地雷踏み抜くような女難人間に同情の余地なんてなし！」

　ほんっとだよね!!　彼を見れば眉間にしわを寄せていた。

「何やら色々と不名誉な称号を与えられているのは気のせいか？」

「さあ？　でも、あの子なんかあんたの事よく知ってるみたいね」

　しばらく戦闘が続く、一進一退の攻防と言えるかもしれない。ま、僕はかなり感情任せに動いてるせいで凄いことになってるけど。

「ほら、アーチャーあれやって！　あいあむざぼーんおぶまいそーどってやつ」

「急にやる気を削がれたのだが……」

　あー、あれやる気か。ま、どんなのが来ても気にしないけど？

「来なよ。錬鉄の英雄、ただの鉄なんざ砕ききるよ？」

「言ったな」
彼が詠唱に入った。世界が少しづつ塗り替えられていく。世界が完璧に変わり、彼が赤原猟犬（フルンディング）を繰り出した。そんなの前に受けてるからどうすればいいのかぐらいわかるって―の。
「幻氷『フローズンデコイミラー』」
「なっ」
僕を追尾する矢が身代わりを次々と破壊していく。その破片は彼に襲いかかった。
「アーチャー、持ち直して！」
そんなのさせないよ
「霧符『霧を歩く者（ミストウォーカー）』」
「霧ですって?!」
遠坂凛は驚いた。でも、驚かないのが僕の少年だ。
「アーチャー!!」
少年の呼びかけに応える。
「もち、宝具発動!! 『少女ノ遊戯（スペルカードルール）』!!」
錬鉄の英雄の心象風景は描きかわり、氷に覆われた件の丘へと変貌した。
「うそ、固有結界を書き換えた?!」

「これが僕の宝具さ。別に固有結界じゃないよ？　世界を書き換える絶対的ルール、化け物だって、妖怪だって、カミサマだって平等な舞台に落としてやるよ？　もちろん、世界と契約している人間でもね!!」

そう、これこそが僕の宝具『少女ノ遊戯（スペルカードルール）』ある一定期間だけ戦闘ルールをスペルカードルールに切り替えるのだ。僕はスペルカードを構える。

「極氷術『アイシクルエデン』っ!!!!」

氷の術が世界を完璧に凍らせた。固有結界が解かれていく。そこには彼が驚いた表情で呆然としていた。彼にスペルカードを向け宣言する。

「チェックメイトさ。どうだい正義の味方？　侮ってたチビに負ける気分は」

「っ　はぁ、確かに負けは認めよう。しかし、君が低身長であることは事実ではないかね？」

いい加減にしろよマジで、皮肉として言っていいことと悪いことがあるだろうがゴラァ！

「……殴符『アイスストライク』ウゥゥゥゥ!!」

「ぐはっ」

その日一番のいい攻撃（少年談）が決まった瞬間だった。彼が気絶する。

「はーはーはー……くたばれエミヤシロウ。お前は絶対の絶対のぜぇぇぇぇったいに僕

の知ってる彼じゃない!!　僕の知ってる彼も地雷原に気が付かないで突っ走るような馬鹿だったけどここまでじゃねぇぇ」

　僕の魂からの叫びがその空間を支配した。

「アンタのサーヴァントって意外にキレやすいのね」

「いや、あんなアーチャー初めて見た。普段だったらもっと普通の対応を取るし」

　それからちょっとして正気に戻った。うん、やり過ぎた。こっちが表に出てたとはいえ流石にやり過ぎだ。

「はぁ、いや八つ当たりも甚だしかったわ。ごめんね？」

「……」

「うん、絶賛二回目だよねー」

　この前は記憶喪失相手に全力投球したけど今度はこれが原因で記憶喪失とかないよね。

「まあいいか、勝つことにはかったし」

「あ?!　色々と衝撃過ぎて忘れてたけど私たち負けてる?!」

「あ、勝ってたんだ」

　うん、忘れられてるみたいだけど勝負してたんだよ僕ら。

「ま、所詮ここは泡沫の夢　正しくあるべき場所に戻る時間だよ。遠坂凛、それから守護

者さん、僕らと再会しないことを祈ってるよ。じゃあね」
「よかった。まだ負けていないのね。今度会った時にはぼっこぼこにしてやるんだから覚悟しなさい！」
　その一言を最後に遠坂凛とそのサーヴァントアーチャーは消えた。僕は少年に向き直る。
「こっちも戻ろうか、マスター？」
「あ、ああ……」
　ドン引きしていた。無理もないだろう。
「あはは、ごめん　久方ぶりにプッツンしてました。これ多分対ＢＢよりも酷かったよね」
「アーチャーって意外と感情的になりやすいんだね」
　正確に言うとようやく本調子って言った方がいいかも。
「ホントごめん、どうかしてました。そういえば、なんか拾ったみたいだけど？」
「あ、これか??」
　二人と戦闘した後、何かアイテムフォルダを拾ったのだ。少年が開けてみればそこから赤い服が飛び出してきた。
「おお、さっきのアーチャーが着てたのみたいだね。礼装??」

「多分、へぇ状態異常と体力全回復、凄いな」
効力を確認した少年が驚く。
「こんな礼装あるんだ。便利だね、僕幸運低いからステータス異常受けやすいし」
「だな。これはいい拾い物かもしれない」
確か他にもワームホールらしきものがあったようなないような。
「この調子でワープホール片っ端から攻略する?」
「それもいいかもな」
軽い調子で僕らは奇妙な邂逅を続けることにした。

え、妙に目的ずれてる?　最終決戦前の寄り道はゲームに必須じゃないか。
それでもこれは全部泡沫の夢、それはわかってるさ

某凡庸型主人公編　7

さて、ワームホールがもう一つ発見された。
「……また飛び込むのマスター？」
僕は少年に尋ねる。
「うん、だってさっき片っ端から飛び込もうとか言ったのはアーチャーだぞ」
「そういえばそうだったね……うん、そうするか」
ワームホールの中に入れば、青いランサーと購買部の店員が居た。彼の記憶からこのコンビを引っ張り出した僕は呟く。
「……ある意味すごい組み合わせだね」
「？　何かあるのか」
「個人的な主観なので気にしなくていいよ」
戦闘の旨を伝えれば、青いランサーはすぐに承知した。僕を少し眺めて首を傾げる。
「ん？　組み合わせが妙な気もするがいいか、まあいいか」
「はぁ、よし　頑張るか、心臓穿たれるのだけは勘弁だし」

弾幕や釘バット（ラニ＝Ⅷと遠坂凛による最終強化版）の応酬を青いランサーはいとも簡単にいなしていく。やっぱり不利にもほどがあるよね。弾幕は基本、矢除けの加護で当たらないし。槍の方がバットよりもリーチは長めだ。

戦っている最中に青いランサーは話しかけてきた。

「そういえば嬢ちゃん、俺のこと知ってるみたいだが？」

「まあね。君とはたぶん別個体の話だけど、そういえばアサシンの真似事はしないの？

ついでに言うなら戦闘からの途中離脱とか」

彼の記憶から色々と引っ張り出したことを言えば青いランサーは驚いた顔をした。

「おいおい、なんで知ってんだ？　だが、今回はそういうわけでもないんでな。どちらかが倒れるまでのサシの勝負だ」

「そりゃよかった。まあ、相手なら同じ弓兵でも赤いほうがよかった？　青いランサーさん」

青いランサーは目を細めた。その目にはなんだか感慨深いものがある。

「ほう、あいつの知り合いか。ま、いねーもんはしょうがねーだろ」

「それはごめんなさい」

それなりに通常攻撃を繰り返してたパターンが変わったのは青いランサーの宝具が撃たれたことだった。

「氷盾『アイシクルイージス』!!」
「なっ」
　神代の盾を模した氷の盾が魔槍ゲイ・ボルグを防ぎきる。青いランサーは驚愕の表情を浮かべた。後ろでは購買の店員がお前の槍は当たらないものなのかとか言っているけど、そんなの気にしている暇はない。これが最初で最後のチャンスだ！
「どこぞのアイアスよりも防御力はあるからね。マスター！」
「了解」
　僕の呼びかけに少年はこちらへ魔力を回してくれた。スペルカードを掲げて、僕は宣言する。
「氷恋符『フリーズド・スパーク』っ!!」
「ちっ」
　氷の力を纏ったレーザーが青いランサーを襲った。青いランサーが膝をつく。この勝負こっちの勝ちだね！
「いぇい！」
「ははっ、久々にいい勝負だったぜ。また会う機会があったら会おうぜ、青い弓兵の嬢ちゃんよ」
　青いランサーはそう言って消えた。うん、これこそ普通の勝負だよね……決して年齢

を勘ぐられてぶちぎれるとか普通じゃないよね。うん

――――　梦　少年少女探索中。

もう一つのワームホールを発見して飛び込んでみるとそこに居たのは。

「……犬？」

犬だった。白い、ひたすらに白い犬だ。尻尾の先がちょっと黒いのが特徴かもしれない。

「そうだよな。何で？」

「ごめん、わからないや」

こんなとこに何で犬がいるんだろう？　まさかあれでもサーヴァントとか？

「アーチャーも分からないってなると俺にはどうにも」

「わうん？」

犬がこちらを向いたまま首を傾げた。あざとい、てかそんなの気にするよりも先に可愛い!!

「……抱きしめてもいいでしょうか？」

「ずるい。俺もやりたい！」

少年と僕は犬に近寄って思う存分撫でたり抱きしめたりした。
「はぁー癒される」
「うん、なんという極上のもふもふ」
「うぅー」
犬もそこまで嫌がるそぶりを見せていない。いい子なんだなぁこの子。
「でも何でこんなところに犬が？」
「それは気になった。でも、それよりももふもふ……」
少年が名残惜しそうにするけど、それは気にしないことにして、僕は犬に尋ねた。
「わんちゃん、何でこんなところに居るの？」
「わぅ！」
犬が何かを咥えて僕に差し出していた。いつの間に？
「？　鈴？！」
受け取った僕が首を傾げる。
「これ、礼装じゃないか」
「え、な……あれ？」
犬に慌てて確認を取ろうとしたけど目を上げればそこには
「居ない」

「居ないね」
犬はいなかった。一体なんだったのだろう？

――――　梦　少年少女探索中。

寄り道も終えて、サクラのレリーフの前に立つ。少年はごくりと喉を鳴らしてから言った。
「……アーチャー、行くぞ」
「うん、行こうか」
サクラの防壁が消えた。ここからが正念場だ!!　そう意気込んで少年と僕は中へと進んだ。
中にはムーンセルと同化したＢＢが待っていた。僕は少年から切り離されてありえない速度で弾き飛ばされる。
「っ　マスターアアアアア!!」
その声は『僕』をいや『魂』を揺さぶるのには十分だった。弾き飛ばされていたのが急に元の場所へと戻っていく。戻ってみれば少年とＢＢはまだ対峙していた。
「な、何で!?　銀河の果てまで飛ばしたはずなのに」

「はぁ、それは当然でしょうに。マスターの傍にサーヴァントが居なくてどうするのさ。悪いけどチートさせてもらったよ。今なら負ける気はしないね」
「アーチャー……その恰好」
ま、言われるのは当然だよね。見た目は只の学生服なんだもの、平行世界の僕が通っている文月学園の制服だ。しかも男物
「ふふっ、『本質』はこれだった。それだけの話さ」
ＢＢとの戦いの火蓋が切って落とされた。

――――　梦　少年少女対峙中。

結果だけ告げれば勝った。圧勝なんてものは出来なかったけど、どうにか勝てた。ＢＢが敗れ去り、サクラがシステムをリセットして万事解決なんてなればよかったのだけどそうもいかなかった。
気が付けばムーンセル中枢に僕はいた。しばらくこのままらしい、はぁなんてこったいとか呟きたくもなったよ。それからちょっとしてからだろうか、確実に見覚えのある少年が中枢へとやってきた。少しずつ分解されながらも願いを書き込んでいく様に腹が立った。

――――　梦　少年分解中。

ムーンセル、電子の海を僕の氷が凍らせていく。僕の氷には0と1は効かない。ぽかんとした表情の少年に向かって僕は本心を口にするこんなところで建前とかないよね。
「ばーかばーか、マスターってやっぱり向こう見ずで自分の事大切にしないよね」
あーちゃー？　と少年の口が動く。僕がそうだと頷けば少年が少し苦笑いして言い返した。
「アーチャーに言われるのはちょっと悔しいんだけど」
「そうかもね。僕らは結構似た者同士だ。時に少年、少年はこのまま消えるのを良しとしているの？」
「……ああ」
少年は即答した。あー、やっぱかとは思ったけどそれはそれでこれはこれだ。
「そっか、でもここに良しとしてない人間がいるんだよね。多分、もう一人いるし」
「え？」
多分、「彼」は外に置かれているのだろう。うん、令呪使って拘束しているのかもしれない。あー、ごめんね。シロウ

僕は少年に手を差し伸べて告げる。
「少年、来ないかい？　忘れられたものの京、幻想郷に」
僕が笑えば、少年は驚いた顔をした。
「この手を取るも取らないも君の自由さ。どうする、少年？」
「俺は……」
少年は……

――　少女回想終了。

そんなわけで、少年と僕は幻想郷に戻ったわけだけど……。
「あれ、少年??」
隣に少年はいなかった。それどころか普通に就寝したままだったし。あれか、マジで泡沫の夢か。そんなことを思っていたけど、僕の体は耐え切れずにまた眠りについた。

――　少女就寝中。

眠って心象風景に戻ってからそれに気が付いた。

どうしてこうなった。
「どうもこうもないっていうべきか」
学生服姿の原初が苦笑いした。
「それについては同意見、わたしにも原因はわからない」
無表情の拒絶は首を横に振った。
「うん、理性が居ないだけマシだよね。何この一人脳内サミット」
一人で理性や外を眺めていた心象風景の場に拒絶と原初も居た。うん、どうしろっていうのさ本当に……『僕』の運命は確実に奇妙なものになりそうだよ。

――　少女起床後。

何だか変な夢を見た。いや、片方は夢じゃないんだけど、もう片方は夢と思い込みたいっていうか……似た顔が三人頭突き合わせて脳内会議とか妄想甚だしいよね。うん
「おはよ、明乃」
「はよー　チルノ」
先に起きていたチルノに声をかけて顔を洗う水を汲みに外へと出てみる。水を汲みに湖の方へ行ってみればなんか学ラン姿の誰かがぷかぷか浮かんでいた。

「うわぁぁぁ、白野君?!」
慌てて助け起こす。やっぱり岸波白野君だ。夢じゃない方の夢で僕がサーヴァントやってた時のマスター、確かに幻想郷には誘ったけどせめて普通の場所に落ちようよ。
「あ……アーチャー?」
「うわ、体つめたっ　今の時間帯に診療所開いてないよね」
僕の叫び声が聞こえたらしくてチルノがこっちにやってきた。白野君を見て目を丸くする。
「どうしたの……って誰?」
「湖に落ちてた」
「はぁ、明乃って落ちてる人間拾うのの天才ね。わかったわ。ウチに運んで」
「うん」
その後、白野君は綺麗に人里に溶け込む……なんてことはなかった。紅魔館で住み込みの仕事をするようになったからね。そうなった原因はレミリアが白野君を気に入ったから、それに白野君が図太かったから、うん白野君は物凄く図太いもんなぁ。フランとも仲がいいみたいだしよかった。後、パチュリーさんから魔法を習ってるそうな。

泡沫の夢も覚めたようだね。少年は安寧の地を手に入れたようだ。

ま、少女の奇譚はまだまだ続くけど？

氷娘邂逅録（番外編）
氷娘表裏夢

――　随分と馴れ馴れしい夢を見る。
目が覚めてみれば、僕は何処かわからない学校の屋上に居た。どう見ても懐かしの鉄筋コンクリート造りの学校です。
「……ここどこ」
思わず呟いたけど誰も答えてなんてくれない。
「知らないところっていうべきか、全然どこかわからないんだけど」
この前の陽炎の一件ともまた違うし、どう考えたって僕の知っている場所じゃない。
「……誰かの心の中？」
そんな回答が頭をよぎった。するとポンと誰かが肩を叩いてにゅっと横から顔を覗かせる。
「せーかーい」
「え、うわっ……えっと、君は誰？　平行世界の僕？」

そこに居たのは茶色の長い髪に茶色と赤のオッドアイ、服装は囚人服のような白黒の上の服にオレンジ色の上着を着て下には白い半ズボンを穿いて、白黒のニーソを穿いた僕よりも一つか二つ年上っぽい女の子だ。
「ちぇー、良い驚きっぷりには感謝感激雨霰だけど、気が付いてないとかあんたよっぽど鈍……逆か、鈍くなきゃやってらんないよねー」
「いや、だから誰？」
本当に誰だろう？　こんな知り合い居ないんだけど……しいて言うなら「彼ら」に顔の造詣が似ている気がしなくはないけど。
「はぁ、理性は随分と知りたがりなんだねぇ」
「ちょ、今なんかとんでもない字にルビふられなかった?!」
思わずそうツッコんだ。ルビふられているって何で分かったんだ僕?!
「おお、メタいね。さっすがだね！」
「いや、え？　えええええ?!」

――　少女錯乱中。

しばらくして彼女が聞いてきた。

「落ち着いたか？」
「ま、まあね……てかメタいとか言っていいの？」
　てかメタいって、言っちゃっていいの？　色んな意味でダメじゃね？
「えー、今回のこれは蛇足兼俺得話だぜ？　それなのにメタくならなくてどうする」
「はぁ、なんでさ」
　思わず行きつけの定食屋の店長の口癖が出てしまう。本当にどうしてこうなってるの？
「ふふーん、本能（ボク）が登場ってことは常識なんて投げて捨てるような話になること間違いなしだしねー」
「とりあえず、君誰？　それでここどこ」
　もう一回聞き直す。結局ここどこだかも、この人誰なのかも聞いてない。
「ノリ悪いなぁ。はいはいじゃあ説明するよ。ここは君の心の中、僕は君の本能、君は君の理性　ドゥーユーアンダースタン？」
「アイムノットアンダースタン!!　訳が分からないよ!?」
　いきなり英語になるのも本能と理性とか言われても分からないし。彼女は呆れたように肩をすくめてから言う。
「じゃあ噛み砕いて説明するけど、ここは君の心の中、魂の原風景と取ってくれても構わ

ないね。で、ここに居る顔は君そっくりだけど見かけは全然違う僕は君の本能だ。君が『世界』からの縛りを受けなければこの姿になっていたかもしれないって奴さ」
「えっと、ここが心なのは理解できた。でも理性と本能って??」
　心の中っていうのは納得しよう。シロウとかの一件もあるし。でも本能と理性を理解しろって方が無理っていうか……。
「僕らってさー、ぶちゃけ『世界』から物凄く縛られてるんだよね。外見とか?」
「う」
　痛い所を突かれた。思わず顔が引きつる。
「でしょー?　でも『世界』だって人間の本能は縛れない。いや、縛ってしまうことはできないってところか。理性は縛れるだろうけど」
「つまり、縛られてるのが僕で縛られてないのが君ってこと?」
　噛み砕ききってみればこういうことだったらしい。
「ま、そういうこと」
「だったとしても何でこんなとこで僕らは邂逅してるわけ?　普通ありえないよね」
　理性があったら本能は押さえつけられるものだし、本能が強いときには理性は無いものなんだから出会えるわけがない。
「うん、理性があったら本能は表に出ない。これは原則だよ。でも、そうも言ってられな

いっていうかさー。ぶっちゃけた話、君と僕が乖離しすぎて二重人格化？　まあ、僕は表に立つのなんて面倒だしやる気ないけど」
「に、二重人格?!」
　マジで？　流石にそんなことあり得るの??
「あ、物の例えだから。別にそこはいいのさ、ところで僕の外見見て気が付かない？」
　彼女は得意そうに一回転してみせる。うーん、思いつくこと？
「えっと、某戦士と勇者の勇者さんｉｎ牢屋みたいな恰好してるね」
「そこじゃないよ。どっちかっていうと魔王モードの彼みたいに目が赤いとこ突っ込んでほしかった」
　さっきも言った通り彼女の目はオッドアイだ。左目が鮮血のように赤い。
「え、そっち？　中二か何かなのかと思って放っておいたんだけど」
「はぁ、根本は同じはずなのに目の色まで変わったらそれはカラコン入れてるか、何かでしょうがもう」
　彼女が呆れた。そうは言っても普通そういう考えにいたる方が普通じゃない？
「で、なんで？」
「いやぁ、ぶっちゃけた話だけど。君がフランとバトった時に僕もフランのアレにちょっとばかし当てられちゃってさー……ここは俗にいうあれだよあれ『ブラックルー

ム』だね」
　ブラックルームってまさか……アレ？
「つまりちょっとばかし気が触れちゃったと？」
「まあ、そういうこと。でもまあ君が居る時点で気が触れてるのなんざどうでもいいことになるわけだけど」
「へ？」
　思わず固まる。気が触れているのが大丈夫とかどういうことなの？
「だってさ、君は『恐怖に打ち勝つ勇気がある』人間だからね」
「どうも？」
　一応褒められているらしい。
「そういうわけ、今回の邂逅は偶然だけど今度は君のピンチ救ってやるよ。じゃあねー」
「え、うわっ」
　彼女が笑って去って行った後、いきなり目が眩んだ。

　――　少女起床中。

　パチッと目を覚ます。

「……夢かい」
　思わずそう言ってしまった。いや、夢でよかったって思うべきなんだろうけど。
「というか色々とおかしいでしょうに」
「……」
『恐怖に打ち勝つ勇気がある』……か」
　はじめて邂逅した本能がそう言ってくれたことになんとない感慨を覚えた。でもそれより先にちょっと思ったことがある。
「それにしてもまあ」
　思わず空を睨みつけて言った。
「……世界恨むぞゴラァ」
　思わずそんなことを言ってしまう。ぶっちゃけてしまおう。彼女の高身長っぷりと発育の良さにちょっとだけだけど嫉妬した。世界の縛りさえなければ自分もああなったかもしれないのだ。やっぱちょっと恨むぞ世界。

※氷娘見習談

その場に居た全員が絶句する。
「うん、どうしてそうなったのさ」
本当に聞きたいどうしてこうなった。僕の呟きにその場に居た当の本人以外の全員が同意した。
「……正直わからないよ」
「どうなってるんだぜ？」
「とりあえずわけわかんないっていうのだけは満場一致よね」
目の前に居るのは知っている彼よりもふたまわりくらい小さくなって、僕らと同い年くらいになった知人、全員の呟きに困惑している。
「えっと、私の顔に何か？」
いやさ。説明するのすら面倒なんだけど。
「……元英霊でも若返るんだそういう話」

――　少女回想中。

それはちょっと前の事、団子屋で団子とお茶を楽しんでたら、偶然にも咲夜に出くわした。それで話し込んでたんだけど、どうしてここに居るのかって話になったら、ちょっと耳を疑うような話を聞くことになったんだよね。

「は？　若返る薬？」

「ええ、パチュリー様　何を思ったかそんなもの作って……」

そうなんだ。あれ？　でも紅魔館の人たちって……。

「正直生半可な薬じゃ若返らないよね紅魔館の人たち」

「そうなのよ。そのせいでとばっちりがこっちに飛んで……はぁ」

咲夜がため息をついた。普段絶対に愚痴なんてこぼさないのに珍しいなぁ。

「ちなみに何歳くらい若返るの？」

「ざっと２０くらいらしいわ。まだ仮定の段階だけど」

「へぇ、とりあえず僕や咲夜は一桁どころかマイナスだから止めておいた方がいいよね」

マイナス何歳とか某チョコレート工場の原作の二巻とかじゃないんだし。

「そうよね。だからお断りして逃げてきたっていうか……こういうことになって」

咲夜がポケットからなにかが入った瓶を取り出した。

「これが薬……ってことは？」
「誰でもいいから実験してきなさいって……気が重いわ」
「あはは……止めた方がいいと思うんだけど」
色んな意味で迷惑以外の何物でもないっていうか、思いつく人思いつく人ちょうどいい年齢の人いないし。みんな長生きか同年代なんだなぁ。
「ええ、正直止めたいわ」
どうしたものかと二人して考えていると見知った黒白金が声をかけてくる。
「よー、なんかここで見るには珍しい組わせだな」
「やほー、魔理沙はどうしたの？」
人里に来るときって大体寺子屋か香霖堂なのに。
「ん？　団子食べに」
「そうなんだ」
意外に普通な理由だね。
「なにやってんだ？」
魔理沙が瓶を挟んで考え込んでいた僕らに首を傾げた。あー、妙な光景だったよね。
「あー、ちょっとね」
「ん？」

――　少女説明中。

「へぇ、やっぱパチュリーはすごいな」
魔理沙が瓶のコルクを外して薬を覗き込んでいる。頼むからひっくり返さないでよ。
「ええ、その凄さの被害がこっちに来なければよかったのに」
「あはは、うん　そうだね」
ついにパチュリーさん薬は被害認定されてしまった。まあ、わからなくはないからなぁ。
「まあ、わたしでよければ手伝ったが生憎無理だ」
「だよねー」
「ええ、正直そう思ってたわ」
年齢的にアウトだし。
「あ、明乃！」
「あ、闇乃」
「よー」
「あ、魔理沙も久しぶりー。何やって……あ」

闇乃が駆け寄ってきて、僕らがちょっと動いたのとか多分その辺の要因が重なって蓋をあけっぱなしだった瓶が倒れてさらに一本だけ残っていた団子にかかってしまった。
「あっちゃぁ」
「ごめん、なんかまずいことやった?」
闇乃はきょとんとしている。まあ、そうだよね。今の今までここに居なかったんだし。
「ま、まあだ、大丈夫だろ。最後の一本だったんだし」
「食べなきゃ大丈夫よ」
「どうしたの?」
闇乃は首を傾げた。説明しないと
「おや、君たち」
それよりも先に知った声がかかった。白髪に褐色の肌、灰色の目、うんシロウだ。
「あ、シロウ」
「あ、店長」
「何処か買い物帰りなのかしら?」
「まあ、食材の買い付けにな。どうしたんだ? 一本だけ残ってるが」
シロウがちょっとだけ首を傾げた。うん、残ってるよ。食べたら拙い団子がね。

「あ、そうだ。店長食べない？　ちょうど、一本だけ余っちゃってさー」
「おい、ちょ　ま」
魔理沙が慌てて止めに入るけど間に合わない。うわぁ……
「良いのか？　ではいただこう」
団子を食べた瞬間、シロウの外見は変わっていた。肌色に銅色の髪、似たような色の目……別人かって思うくらいの変化だった。髪型がかろうじてそこに居るのがシロウだってわかるオールバックだ。
みんなは口をポカンとあけている。そんな様子を見て僕は呟いた。
「……幸運Eは何処に行っても幸運Eだったんだね」
運がない人をサーヴァントのステータスでは幸運Eと言ったはずだし。これはあっているはずだ。

――　少女回送終了。

「うん、どう見ても衛宮士郎です。ありがとうございます」
過去の夢で見た少年ときっちり被ってるね。これで素の方の口調だったらもう完璧に衛宮士郎の完成だ。

「いや、だからいきなりどうかしたのかね」
シロウが困った顔をする。あ、流石に口調まで変わってるは無かったかぁ。
すると咲夜が本当に申し訳なさそうな顔をしながらナイフを取り出した。もちろん鞘つき。
「……本当にごめんなさい。えっと、これで顔を確認したらどうかしら?」
シロウは慣れた手つきで鞘からナイフを抜いてそこに映る自分の姿を確認して、呟いた。
「……なんでさ」
「ですよねー」
正直どうしていいのかすら不明だよ?!